

Z32-B88

# 金の星

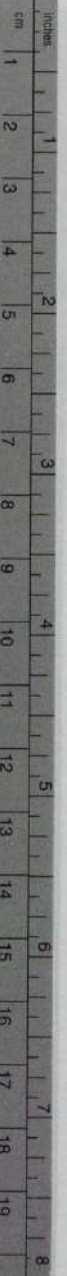
八月号



国立国会  
3.26  
図書館

第八号

第九卷



## Kodak Color Control Patches

Blue 1 Cyan 2 Green 3 Yellow 4 Red 5 Magenta 6 White 7 3/Color 8 Black 9



## Kodak Gray Scale

A 1 2 3 4 5 6 M 8 9 10 11 12 13 14 15 B 17 18 19



© Kodak, 2007 TM, Kodak





# 武井武雄画

各  
冊  
菊判美装百餘頁  
一冊  
送料八錢

## おもちゃ箱

■あるき太郎に次でこのおもちゃ箱が出ました。おもちゃの國のおもちゃ博物館で色々なおもちゃが賑んだり踊ったり、一體どんなことを起すのでせう？

### あるき太郎

— 二色版一、三色版二、單色版五九葉 —

あるき太郎が、汽車に乗り、船に乗り、飛行機に乗り、陸のはて、海のはて、空のはてまで行く面白い旅行記

No. Ⅲ

動物の近刊



三色版七枚  
凸版九〇葉

東京日本橋通  
丸善株式會社  
大塚 神戶 京都 名古屋  
東京 山崎 福山 札幌  
東京 丸善 田三 早田 丸善





目次

僕の水泳 (表紙・石版)……………岡本歸一  
 潮けむり (口繪・三色版)……………寺内萬治郎  
 南蠻船 (童話)……………野口雨情  
 同作曲……………藤井清水  
 毬子の話 (童話)……………加藤武雄  
 蛇をだました蛙の話 (童話)……………新井紀一  
 一王國を爭ふ (長篇)……………小島政二郎  
 ひまわり (童話)……………野口雨情選  
 日本童話選 (童話)……………立石美和  
 頼光の四天王 (長篇)……………川崎春二  
 大發明家エヂソン (童話)……………廣瀬龍太郎  
 美しい菓子箱 (童話)……………水谷まさる  
 てゆ〜坊 (童話)……………西川喜平



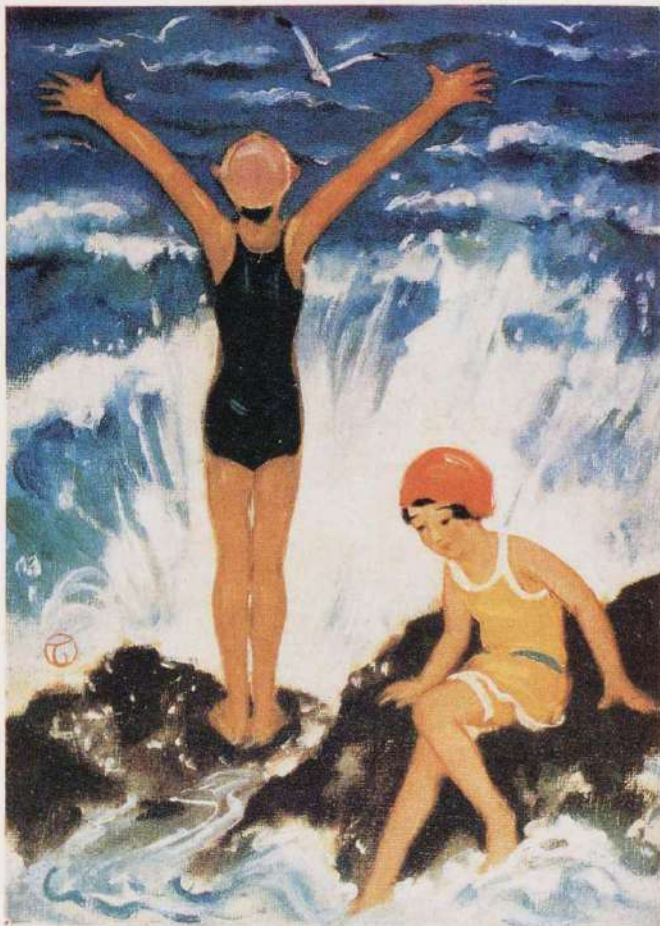
世界童話欄 (特別附録)

初捨てる神があれば (童話)……………野口雨情選  
 山へ歸る (童話)……………岡崎六郎  
 春の主人 (童話)……………野口雨情選  
 大石の税 (長篇)……………三島霜川  
 少年輕業師 (談話)……………三井信衛  
 蟬と谷の水 (童話)……………三木露風  
 通読出版者 だだよ (童話)……………(三三)  
 読者 だだよ (童話)……………(三三)  
 信大欄……………(三三)  
 紅燈 (支那) ドロチアと薔薇の花 (イタリ)……………(三三)





湖けむり



寺内萬治郎畫

日本歴史  
實傳物語叢書  
各册定價十錢

- |      |        |
|------|--------|
| 2    | 1      |
| 曾我兄弟 | 源義經    |
| 4    | 3      |
| 小楠公  | 赤穂四十七士 |



日本歴史實傳物語叢書(5)  
信玄と謙信

三島霜川先生著・羽鳥古山先生畫

定價金壹圓・送料十錢



日本歴史の中の面白い、有名な物語を選び出して、史實に従って少年少女の爲めに書かれたものです。著者 三島先生も畫の羽鳥古山先生も、その方面の有名な方々ですから、世間に有りふれた何の研究もない本とは全然違つてゐるので、大膽な評判を受けてをります。

第五編として發行された「信玄と謙信」は川中島の合戦で誰も知つてゐる二人の大將です。甲斐の信玄と越後の謙信、この二人は共に甲乙ない偉い武人でした。この本は、この二人の偉い大將の幼い頃のお話からはじまつて、遂に此の二人が、どうしても戦はなければならぬ此の二人が、どうしても戦はなければならぬ有様、火藥を散らす大合戦の光景まで、眼のあたりに見るやうに書いてあります。これまでの何の本にも出てゐない三島先生の深い研究から成つた名著ですから、是非御一讀下さい。



出世の  
タンコブ

(一) ベンスケハ小学校チイウト  
ウテンツケフシマシタガ、イヘ  
ラツガアア申學校ヘユケナイ  
ヲヒクワシテ、カンガヘナガ  
ラアルイデキマシヌ。



小學校卒業後

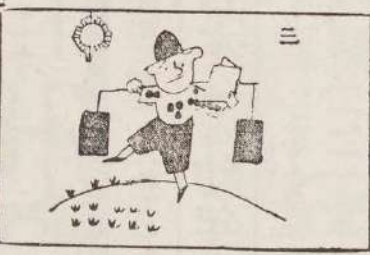
イロくナ事情ア上ノ學校ヘ行ケナ  
シヨク人、ナトハ、今、大日本國民中學會ヘ  
イ諸君ハ、今、大日本國民中學會ヘ  
入會シテ、日本一ノ中學講義録ヲ勉強  
ナサイ。

(二) ツシテ、アチチエーニイ  
トイウホド、アタマヲ、アツケマ  
シヌ。ツシテ、オ、キナコ、アチチ  
シラヘマシタ、ベンスケ「アツ  
イ、オ、オ、キナコ、アチチ、ア  
グ、オ、ナニカ、カイテ、アル  
ソ、オンテ、ミヨウ」

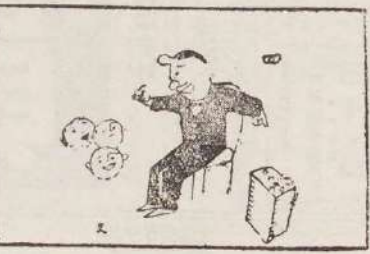


僅か一ケ年半で中  
學卒業の學力と資  
格が得られる。

(三) ツブソノカテ、リツパニ  
中學ガソツゲフデキル、ドクガ  
クシヤノミカタ、大日本國民中  
學會「トソコニカイテ、アツタノ  
アス、ベンスケハ、コーギロクテ  
ベンキヨウチハ、シメマシタ。



(四) サカイウラケアツタシハ  
シユツセヲシタノデス。ダカラ  
ラシニハ、コノタンコブ、ト  
ノコーギロクガ、タカラアス、ト  
アコヤマセン、セイガ、オツシヤ  
イマシタ。



◎入會するには今が一番好いと来てす  
講義録見本の規則書申込無代で進呈  
東京 大日本國民中學會  
駿河臺  
振替東京四二〇〇番 電話神田二二二二



諸君！など投書下



飛び上る程  
おもしろい  
いさましい  
お話がーばい

幼年俱樂部

あつた方のお名まへは、幼年俱樂部の十月號にのせます。  
▼本誌の讀者諸君は、一人も残らず投書するやうあなたからおすめ下さい。

- ◎身の丈七尺、力百人力の大家傑  
金剛太郎のいさましい話！
  - ◎體はチビでもトテモえらい  
オヤユビ三郎の面白いお話
  - ◎敵の大將今川義元をまかした  
ステキに面白い信長天下取
  - ◎小波先生のステキにおもしろい「ほら先生」のお話！
  - ◎ためになる面白いちゑ競べ  
軍神橋中佐の勇しい物語！
  - ◎おへそが宙返りする程面白い「モノグサクラベ」の話
- この外まだく澤山ステキに面白いお話があります。  
長くも幼年俱樂部は各皇族若宮殿下台覽の名譽の雑誌であります。讀物は全部色刷り八月號はトテモ立派です。

幼年俱樂部 八月號 四十錢！ せひ、お早く御覽下さい！！

本誌愛讀者

おもしろい  
いさましい

大懸賞

【問題】 次の文章の〇のところへ適當な文字を入れてもらいなさい。

面白い爲め〇なる日本一の幼年〇樂〇

おわかりになつた方は七月二十五日までに、こちらへつ  
くやうに、答をハガキに書いて、お出し下さい。  
ハガキの書き方は、ていねいにハッキリ書いて下さい。  
あつた方には、一人のこらす………  
美しいメダルをあげます！！

答の書き方 (アウ) (テモオ)

答	幼年俱樂部 アア字目
お名前の読み	





少年文學名著選集(4)  
父戀し

沖野岩三郎先生の傑作  
岩岡とも枝女史畫

四六判箱入美本  
内容二五〇頁  
定價金壹圓二十錢  
送料十錢

父様の船は歸らず  
今日もまた  
濱邊に出たが  
何としよう  
風和いで  
たゞ恨めしい  
海の色よ  
何故答えない  
この聲に  
(父戀しの唄)

少年文學名著選集

3 黒馬物語語	2 家なき兒	1 十五少年漂流記
十五人の少年が絶海の孤島に漂流し、そこで助け船の来るまでの一大冒險生活を書いたフランスの有名な物語りです。	世界の名著です。名家に生れながら不思議な運命の爲めに旅藝人に賣られ、旅から旅をさすらひ歩く孤兒の物語りです。	動物を主人公にしたお話として有名な作です。黒馬の一生を書いたもので、動物のあはれな一生には何人も涙を催します。

世界の代表的名作を三種づゝ一冊に収め、装帧は寺内萬治郎先生が苦心に苦心をこらした結果出来上つたものだけに、立派な事は他に比類がありません。



安價を以て誇つてゐる全集本も、本書に比べたら遙かに見劣りがあります。まして、世界の傑作ばかりを集めた、本書が内容に於て如何に優れてゐるか書店にて御覽下さい。

金の星家庭文庫(1)

内容 ロビンソン漂流記  
アラビヤンナイト  
ガリバー旅行記  
(新刊)

四六判五〇〇頁 各冊 定價金貳圓  
天金箱入美本 送料十二錢

金の星家庭文庫(2)

内容 アンデルセン童話  
青い鳥  
イッツブ物語  
(新刊)

金の星出版社



しなのもろめてれさ唱愛ごほ集譜曲の社本

# 集譜曲謡童星の金

録六金料送・録拾八金下以輯三・録拾六金各輯二輯一

第十三輯	しやんこくお馬	野口雨情作詞 藤井清水作曲	(目曲)	しやんこくお馬、おめ、おとて、お留守、子供は風の子、因幡の白兔、秋の夜
第十二輯	俵はごろく	野口雨情作詞 本居長世作曲	(目曲)	俵はごろく、小石、つまらない
第十一輯	夢のお國	野口雨情作詞 藤井清水作曲	(目曲)	夢のお國、死が来い、赤い櫻んぼ、猫さんお手まり、櫻の歌、砂の歌
第十輯	名所めぐり	野口雨情作詞 本居長世作曲	(目曲)	長柄の橋、柱くより、阿彌陀池、宮城野の萩、お乳給、石山寺の秋の月
第九輯	あの町この町	野口雨情作詞 中山晋平作曲	(目曲)	あの町この町、雀踊り、木の葉のお船、高野山、鼠の小せさん、證誠寺の狸囃
第八輯	べんべん鳥	小松耕輔作曲 遠崎龍作詞	(目曲)	紅殻蜻蛉、さみだれ
第七輯	お人形さんの夢	野口雨情作詞 本居長世作曲	(目曲)	お人形さんの夢、釣鐘草、啼いた啼いた雉子、芒の穂、お鳥のお耳、草遊び、霜柱
第六輯	子守唄	野口雨情作詞 本居長世作曲	(目曲)	子守唄、櫻と小鳥、乙姫さま、はぐれ鳥、葱坊主、藪の下道
第五輯	夢ごり	野口雨情作詞 小松耕輔作曲	(目曲)	夢ごり、おしやれ棒、つげ子、十と七つ、雲雀の水波、雀の機織
第四輯	赤い靴	野口雨情作詞 本居長世作曲	(目曲)	赤い靴、山彦、三ヶ月さん、姥捨山、朝鮮船屋、眠り龜の子
第三輯	青い空	野口雨情作詞 本居長世作曲	(目曲)	青い空、燕、雨夜の傘、でん／＼蟲、雀の酒盛り、呼子鳥
第二輯	一つお星さん	野口雨情作詞 本居長世作曲	(目曲)	一つお星さん、七つの子、馳と雀、鶴さん、象の鼻、四丁目の犬
第一輯	人買船	野口雨情作詞 本居長世作曲	(目曲)	人買船、昔い目の人形、九官鳥、日傘、鶯、燕、十五夜お月さん

女少年少界世  
系大傳人偉  
録十料送・録十九册各



## 世界少年少女偉人傳大系 (11) ナポレオン

山野虎市先生編・羽鳥古山先生畫

四六判箱入美本  
内容二〇〇頁  
定價金九十錢  
送料十錢

1	ジャンヌ・ダルク	6	ナイチンゲール
2	ローマ英雄	7	ワシントン
3	ネルソ	8	大楠公
4	リンコルン	9	ロシア英雄
5	太閤秀吉	10	コロロンブス

てフランス皇帝となり、歐洲を征服して鬼神のやうに恐れられてゐたのが、雪のモスコで露國に破られてから、遂に一人淋しく大西征の一孤島セント・ヘレナで死ぬまでの一生を、面白く書いたのが此の本です。皆さんから大歡迎を受ける事はいふ迄もありません。

世界歴史にナポレオン程華やかな英雄はありません。それが古い昔でなく、今から百年程前の出来事だけに、どんなに興味が深いかわかりません。

小さなコルシカの島で生れた名もない少年であつたナポレオンが、忽ちにして







南 蠻 船

作曲 藤井清水

作詞 野口雨情

M.M. ♩=112-120

(マカオ明風に)

musical notation for piano introduction, marked *dolce* and *mp*

vocal melody with lyrics: 南 蛮 船 と 南 蛮 船 と 南 蛮 船 と

(一番だけ半拍子休んで)

piano accompaniment for the first system, marked *mp*

vocal melody and piano accompaniment for the second system, marked *mp*, includes first ending (I. II.)

piano accompaniment for the third system, marked *mp*, includes third ending (III.) and instruction 左手 (left hand)



南蠻船

野口雨情

南蠻船

いふ船はく

むかし むかし

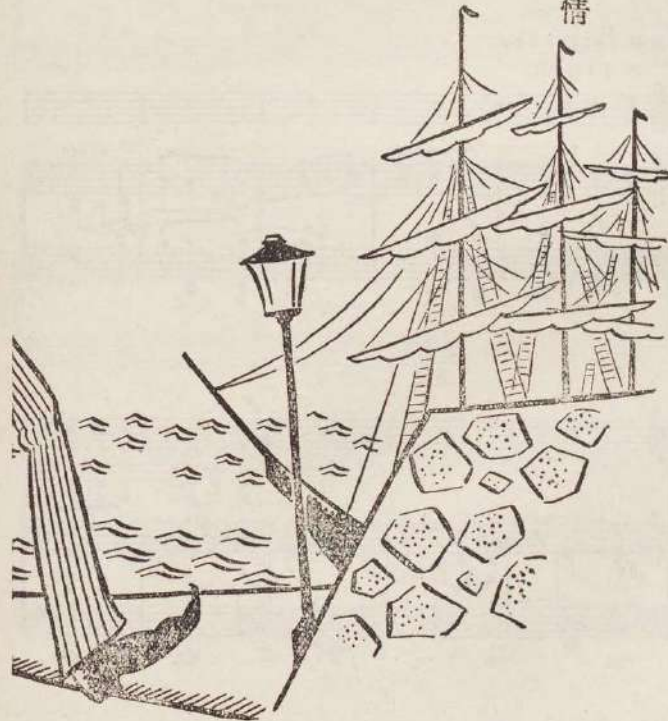
長崎へ 長崎へ

三尺茜の

手拭をく

形見にみなごて

おいてゆくく



形見にみなごの



手拭でく

長崎娘は

涙ふくく



註。昔、南蠻國の船が長崎へ来て、三尺の紅手拭を、形見においていった話が、今尚長崎に残つてゐます。この童謡は、その話を手まり唄に書いたのです。

寺内萬治郎畫



# 毬の子の話

加藤武雄

岩岡ととも枝畫



六

一

「どれにしようか知ら。」

「これ、何う？」

「さうね、少し大きすぎるわ。」

「ちや、このくらゐ？」

頭の上でそんな聲がしたので、毬子はそつと眼を開けて見ました。十六七と十ぐらゐの二人のお嬢さんが立つて、毬子のお友達をあれこれと取りあげて、どれにしようかと相談してゐるのです。

「私これにするわ。」

急に小さいお嬢さんはさう云つて、毬子を取り上げました。毬子はだしぬけだつたので、きまりが悪くて、お嬢さんの小さい手の中で、身を縮めてゐました。

「ちや、それになさい。」

「姉さんは？」

「ほ、姉さんはもう毬はほしくないの。ちや歸りませう。」

玩具屋の店先きに並んでゐた毬子のお友達の毬どもは、一齊に毬子とお嬢さんに「左様なら」をして見送つてゐました。

毬子はその日からこのお嬢さんのお友達になりました。毬子のつれて行かれた家は、東京の郊外の綺麗なお邸でした。

大勢の仲間から離れて、急に獨りぼつちになつたので毬子は淋しくつて困りました。お嬢さんが學校へ行つてゐる間、毬子はお部屋の隅つこの箱の中でぼんやりしてゐました。

お嬢さんの名は愛子さんと云ひ、姉さんは光子さんと云ひました。

「愛子さん。」

午後になるとさういつて、よくお隣りのお嬢さんが遊びに來ました。

七





棄て、終ひました。

毬子はびつくりしました。餘りにあたりが汚いので、でもまだ自分が棄てられたのだとは思はないので、何かの間違ひでこんなところへ入れられたのだと思つてゐました。

そのうちに日が暮れて終ひました。郊外の夜は静かでした。毬子は心細さと不安とで慄えてゐました。そのうちに東の空が明るくなつて、眞ん圓いお月様が上つて來ました。

「まあ、何て綺麗だらう。」

毬子はお月様を見るのは初めてなので、暫くはうつとりと見とれてゐました。夜外へ出たことのない毬子は、唯不思議な美しいものだと思ひました。

「何かしら、お日様の子供かしら。それとも私たちの毬の中の王様かも知れない。」

毬子がそんなことを思つてゐるうちにも、お月様はすん／＼空へ上つてゆきました。

「なあに、道子さん。」

愛子さんは、待構へてゐたといふやうに椽側へ出て行くのでした。

「遊びませう。」

「え、遊びませう。」

そして毬子は箱の中から明るい椽側へ出されるのでした。

「……一つ緋鹿の子、……二つ藤色、……三つ水色……四つ吉野のさくらあいろ……五つ伊豫菜……六つむらさき、……七つ鳴海の豆しいばり、……八つ山吹、……九つ濃い茶で、……十で淡紅色、ときはあいろ……まづまづ一貫貸しまあした——」

毬子はお嬢さんの手と椽側との間をとんとくどくどく弾んでお嬢様の機嫌をとるのが好きでした。手毬唄は立派な音楽のやうに聞えて、さういふ時、毬子は一生懸命で手毬唄に調子を合せて踊りました。然し、息が切れて目がくらみさうになると、「お嬢

さんごめんなさい。」と、心で云ひながら、ついと身を弾ませて、ころ／＼と椽側から落ちました。

お嬢さんが、道子さんと、まゝ事や人形遊びを初めると、毬子さんは道子さんの毬とお椽側にならんで、二人のお嬢さんの無邪氣な様子を見てゐるのでした。

「あなたのとこのお嬢さんおきれいなね。」

道子さんの毬は、そんなことを云ふのでした。

「あら、あなたのとこのお嬢さんだつて美しいわ。」

二人は顔を見合はせてにっこりしました。毬子は幸福でした。

二

ところが、この幸福だつた毬子の身の上にも、やがて不幸がやつて來ました。毬子の身體がだん／＼硬ばんで思ふやうに弾まなくなると、「もうこの毬だめだわ。」さう云つてお嬢さんは、毬子を掃溜へ



「やあ、今夜は素時らしい、お月様だなあ。」

「うん、素的だ。」

向ふ方でそんな聲が聞えたのでそつちを見ると二匹の小さい生き物が、腐れかゝった板の上に坐つて話し合つてゐました。

「もし、一寸お伺ひしますが。」

毬子がさういふと、二匹ともこちらを向きました。

「あれがお月様といふのですか？」

毬子は思ひ切つてさう云つて見ました。そして一寸きまりが悪くなつて顔を赧くしました。

「うんさうだよ。君はお月様を知らないのかい？」

「えい。」

「馬鹿だなあ。」

輕蔑した様に云ひました。毬子はむつとしました。

「だつて私、夜出たことがなかつたんですもの。」

「君は今迄お嬢様のところにゐた毬なんだね。」

急に二匹の生き物は氣が付いた様に云ひました。

「え、さうよ。あなた方は何なの？」

「僕は雨蛙といふものだよ。」

さう云つて二匹の雨蛙は、偉さうな顔をしました。

「私早くお嬢様のところへ歸りたいんだけど。」

毬子がさういふと、

「君はきつと棄てられたんだよ。君は見たところ大分古くなつてゐるね、だからきつと棄てられたんだ。

人間つてさういふものだよ。自分の都合のいい時はかり可愛がつて、使へなくなるとごみ溜へ棄てちゃうんだ。」

「私、棄てられたんぢやないわ。」

「棄てられたんだよ、きつとさうだよ。」

毬子は悲しくなつて黙つて了ひました。しかし、心の中では明日になればお嬢様がお迎ひに来て呉れる。私が此處に置かれたのは何かの間違ひなのだと思つてゐました。

雨が降ると嬉しいな

蓮の葉に銀の玉  
芋の葉に金の玉

げつ、げつ、げつ

雨が降ると嬉しいな

広いお庭や路傍で

飛んだり、はねたり、踊つたり

げつ、げつ、げつ

蛙どもは元氣よく、そんな出鱈目な唄をうたひ出しました。毬子はそれを聞いてゐるうちに、いつの間にかうとくと眠りました。

「毬子の寝坊やい。」

「毬公の寝坊助やい。」

耳元で騒ぐ聲に氣がついて毬子が眼を覺ました時は、もうお日様が一寸も上つて、庭の青葉に風がさらりと輝いて、雀が賑かに囀つてゐました。毬子を起したのは昨夜の蛙でした。

「まあ、あなた方だつたの。」

毬子は眠い眼をこすりながら眼の前に立つてゐる蛙共を見ました。

「うん僕達だよ。」

「お早うございます。」

毬子は丁寧に言ひました。

「や、お早う。」

蛙どもは一寸まごついたやうに頭を下げました。

「今日は、お嬢様がきつとお迎へに来て下さると思ふわ。」

「まだそんな事を考へてるのか。馬鹿だなあ、人間つて自分勝手に薄情なものだよ。」

「でも、家のお嬢様はそんなことないわ。」

「ふん、ぢやあ勝手にさう思つてるといふや、ところで、君おなか空いたらう。芋の葉に溜つた綺麗な夜露をやらうか。」

蛙どもはさういつて、綺麗な葉つばの上に露を一しづく入れたのを毬子の前に出しました。青い葉の



上で、しづくは銀の玉のやうに光つてゐました。  
『まあ綺麗ね、でも私は何にも喰べないの、今迄喰べたことがないの。』

『うんさうか。君は喰べないで空気がかり吸つてるんだね。さういへば、君のお腹は空気がかりだつてはつ、はつ、はつ。』

蛙どもは太鼓腹を抱へて笑ひ出しました。毬子も仕方なく微笑んでゐました。

『何だい蛙君、朝つばらから馬鹿笑ひなんかして。』さういつて其處へ来たのは一匹の蟾螂でした。

『なあにね、此人が昨日人間に棄てられたんだよ。』何だ毬か。この間も片足のない人形が、裸にされてこの邊に棄てられてたじやないか。よくあるやつさ。それより君、裏の垣根の處へ行かう。そりや素的な露があるんだ。』

『うん行かう。ちや毬子君失敬。』

『失敬。』

『おい、君、此處にこんな毬があつたよ。これでキヤツチボールをしようや。』

『うん、やらうよ。』

さう云つて、少年達は毬子を掃き溜から持ち出して、前の路傍へ行つてキヤツチボールを初めました。

『今度はカーブだ。』

『今度はドロツプだよ。』

そんなことを云ひながら盛んに毬子を投るので、毬子はくるく眼がまはつて終ひました。

『今度はアウトカーブだ。』

少年がさう云つて力を込めて投げた時、力が餘つて毬子は相手の少年の頭を飛び越へて、後ろの塚につき當つて、ほんと一つ彈づんで、すぐ側を流れる川の中へ落ちて了ひました。

『おい、塚を飛び越えちやつた。』

『川の中へ落ちたんぢやないか。』

『さうぢやない、塚の中へ飛び込んだんだ。』

蛙共が行つて了ふと、毬子は何となく寂しくなつて、ばんやりしてゐました。

晝頃になつても、夕方になつても、お嬢さんは来ませんでした。

『どうしたのかしら。本當に私は棄てられたのかしら。ひどいわ。』

毬子は悲しくなつて、しくしく泣きました。そのうちに昨夜のやうな綺麗なお月様が出ました。お月様は、下界のごみ溜の中で、しくしく泣いてゐる毬子を、一寸憐れみ深い眼差で見つめて、そしてしづしづと空へ上つて行きました。

### 三

毬子は一晩中泣き明したので、すつかり疲れてうとくしてゐますと、突然ぎゅつと何かに掴まれました。はつとして気が附いて見ると、自分は十二位の少年の手にしつかり握られてゐるのでした。

そんな事を云ひ合つてゐる少年達の聲を後にして毬子はだんく流れて行きました。

お晝頃迄、毬子は水の上を静かに流れて行きました。兩側には草が茂つて、川に青々とした影を落してゐます。水の中には種々の小さい魚が泳ぎまはつてゐます。その中を毬子は流れて行きました。

お晝頃になつて、或小さい橋の下まで流れて來ましたが、その橋桁にかつてゐる棒に支へられて止まりました。それで毬子は棒に倚りかゝつて息を休めてゐました。

『おい、變なものが流れて來たせ。』

『何だらう。浮いてるからまさか石ぢやあるまい。』

『石よりもつと軽いものだらう。』

『一寸突つて見ようか。』

『よし給へ、危いよ。』

そんな話聲が聞えるので、気がついて見ると、水の中で目高や鱧が毬子を見ながら、話し合つてゐ



るのでした。

「おい、君は何でものだい？」

中で一番大きいはやが、勇氣を出して聞きました。

「私、私、穂子よ。」

「穂子？ 穂子って何だい？」

「何って、私穂ですもの。」

「だから穂子って何だいつて聞いているんぢやないか。」

「そんなこと、私困るわ。」 穂子は困って、おどおどしながら泣き出しさうになりました。

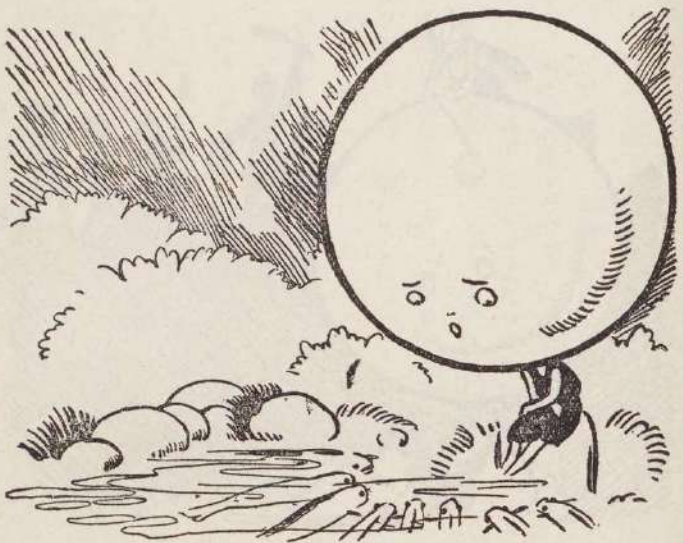
「まりこつて云つて泣きさうになつてら。」

「大きい癖に意氣地なしなんだろ。」

「だが妙なものだね。」

魚どもは多勢をたのんで、わい／＼云ひながら、でも遠くの方から見てゐるのです。

「これ／＼お前達、それは人間の使ふ穂と云ふものだよ。」 その時向ふの石垣の下からのつそり出て來



た大きなうなぎが教へるやうに云ひました。

「何だ、人間の使ふものか。」

「鰻のおぢさん、人間はこの穂を使つて私達をとらうとしてゐるんぢやないの。」

「いや、これは人間の子供が遊ぶ玩具だから怖いことはない。」

「何あんだ。人間の玩具か、そんなら大丈夫だ。」

魚どもは、穂子の近くに寄つて來ました。

「おい君、人間の玩具だつてねえ。」

「え。」

「どうしてこんな處へ來たんだい。」

「私棄てられたのよ。」

「さうか。棄てられたのか。おいみんな、このひとは人間に棄てられたんだつて。」

「さうだろ、人間つて残酷なものだから。」

「全くだ。人間て奴が實際ひどい。」

穂子は、この小さい雑魚共もあの雨蛙などと同様に、人間を攻撃するのを聞いて思はず微笑しました。

「あなた方人間が怖いのか？」

「そりや怖いさ。僕のお父さんも、向ふの石垣の鰻のおぢさんのお嫁さんも、お隣の君ちゃんも、みんな人間にとられちやつたんだ。」

「まあ！」

「僕のお母さんも人間にとられたんだよ。」

「僕の兄さんも。」

「僕の妹も。」

「あたいの姉さんも。」 雑魚共は口々に云ひました。

「まあ、みんな人間にとられたの？」

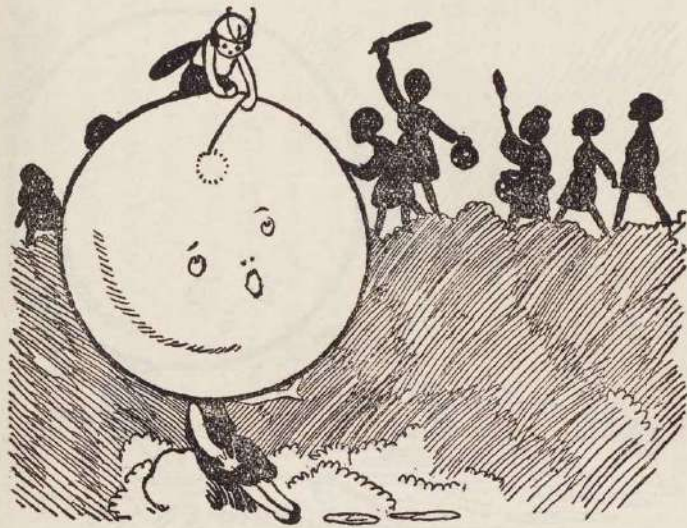
「さうだよ。だから僕達は、大きくなつたら人間に敵討ちをしてやるんだ。」

「まあ、強いのかえ。でも人間つて、そりや大きくて強いよ。」

「知つてらい。僕達はもつともつと人間よりも強く大きくなるんだ。」

「まあ、強いのかえ。でも人間つて、そりや大きくて強いよ。」





「やう。」

毬子は、こんな小さい川の小さい橋の下にすんでゐる雑魚どもが、人間に復讐するんだと力んでゐるのが少し滑稽に思はれて、思はず笑ひ出しました。「ほ、笑つてごめんさい。私人間に乘てられたんだけど、今では却つてこの方が氣樂でいゝと思つてるの。貴方方とかうして遊んでる方がすつと面白いわ。」

「さうか、ちやいつ迄もそにに給へ。そして僕達と遊ばう。」

「え、遊んで頂戴ね。」

毬子はそれから雑魚どもにせがまれて、お嬢さんの處にゐた頃の話や、はき溜での事をいろ／＼話してきかせました。雑魚どもは、毬子を取り巻いて熱心に聞いてゐました。

そのうちに夕方になりました。すると雑魚どもは「ちやあ毬子さん、また明日話して呉れ給へ。」

「失敬。」「左様なら。」

と、口々に云つて、それ／＼石垣の下や石の蔭に入つて了ひました。四邊はだん／＼暗くなつてゆきます。毬子は心細くなつて、「一體私はどうなつてゆくんだらう。」と泣きさうになつてゐました。

その時、毬子の頭の上で、ぴかつと光つて、すつと消えたものがあります。「おや」と思つてると、又ぴかりと光つて消えました。

「何かしら？」

毬子がそんな事を考へてゐるうちにも、ぴかりぴかりと光りながらその邊を舞つてゐるのでした。

そのうちに、その變な光るものは、毬子を見つけて、つういと飛で來て毬子の上に止まりました。

「貴方誰なの？ 何て云ふものなの。」

毬子はびつくりしてかう聞きました。

「私？ 私と云ふものです。」

螢は、思ひ掛けなく足の下から聲をかけられたの

で、驚いたやうに答へました。螢と云ふ光る虫のこととは、毬子もいつか聞いたことがありました。

「まあ、貴方螢さん、随分お綺麗ね。」

「ほ、貴方は？」

「私、人間の玩具の毬よ。」

「あら、貴方が毬なの。どうしてこんな處へ？」

「私棄てられたのよ。」

「まあ、お氣の毒ね。人間つてひどいものね。」

「螢さん、あなたもさうお思ひになるの？」

「え、さう思ふわ。今に見てゐらつしやい、きつと人間の子供が歌をうたつて私を擱へに來ますから。」

そんな事をいつてゐるうちに、最早遠くの方から人間の唄がきこえて來ました。

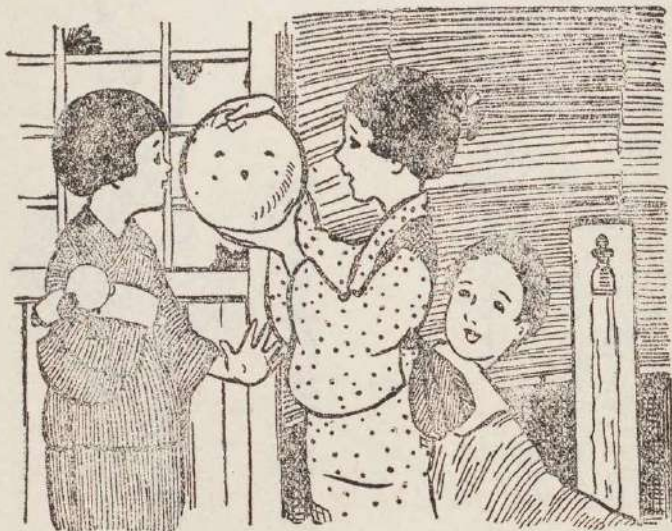
「ほーたる來い。ほーたる來い。」

あつちの水は辛いぞ。

こつちの水は甘いぞ。

「それ御覽なさい。あ、云つて私達をだましてとら



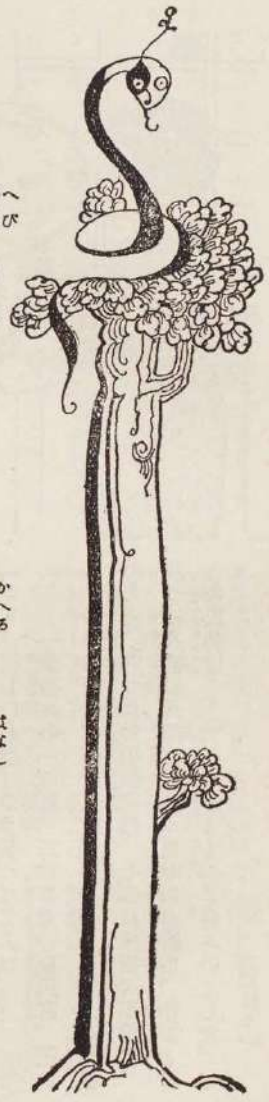


しかし、女の子は大變毬子を可愛がりしました。  
 『お母さん、私ゴム毬を兄さんに拾つて貰つたの。』  
 『さうかい、まあよかつたね、大切にするんですよ。』  
 母親にさう云はれて、その子は毬子を大切に箱の中へ入れました。  
 翌日、隣の女の子が遊びに来ると、早速毬子を出して見せて、  
 『ね、二人でつきませう。』と、云ふのでした。  
 『光子さん、それ拾つたの？』  
 『え、これ二人のにしてつきませう。』  
 『あら、嬉しいわ。』さう云つて二人は、  
 『……一番初めの一の宮、二に日光の東照宮、三にさくらの吉野山、四の又信州の善光寺、五つは出雲の大社、六つは村の鎮守様、七つは成田の不動様、八つは八幡の八幡宮、九つ高野の高野山、十でこのの氏神様——』と、仲よくつき合ふのでした。  
 (をはり)

うとするのよ。あんな方に甘い水なんぞあるもんですか。』 螢はおびえたやうにいひました。  
 『螢さん、ちや貴女光らないで居るといゝちやないの。さうすると見つからないでせう。』  
 『え、けれど、私達は呼吸をする度に光るやうにつくられてるの。神様がさうおつくりになつたのだから仕方がないわ。』  
 螢は嘆息するやうに云ひました。  
 『やあ、そこに螢がゐた。』  
 とかくと足音がして、さういふ聲が聞えました。  
 『あら来たわ。ちや毬子さん左様なら。』  
 螢はさういふと、ついと舞ひ上りました。然し、もう橋の止に來た人間が團扇でさつと翳つたので、螢は一溜りもなく又川へ落ちました。  
 『毬子さん。』  
 落ちた螢はすぶ濡れになつて、泣きさうになつて毬子にしがみつきました。羽が濡れたのと、怖さで

もう二度と飛べさうもないので、毬子も、  
 『螢さん。』と抱きしめました。  
 『やあそこだ。』そんなことをいひ乍ら、人間は川へ入つて來て直ぐ螢を捕へました。  
 『おや！』  
 人間は螢を捕へると同時に毬子を見つけて、  
 『おい、こんな處にゴム毬があるよ。』  
 と、頓狂な聲を出しました。  
 『あら、兄さん、ほんと？』橋の上に立つてゐた、八つ位の女の子がさういつて嬉しさに覗き込みました。毬子はこの時から又人間の手に拾はれて、人間の世の中へ出ることになりました。  
 毬子の連れて行かれたのは、むさくるしい田舎の百姓家でした。両親と男の子と女の子と四人の家族でした。お嬢さんの家に比べると、何から何迄汚くて貧乏くさく見え見えました。





# 蛇をだました蛙の話

新井紀一  
初山 滋登

昔、昔、ずっと大昔の話であります。  
或るところに大きな池がありまして、その池を中心にした近傍に、猿だの、鹿だの、熊だの、兎だのそれから、蛙だとか、蛇だとか、龜だとか、いろいろな動物が寄り集まつて棲んで居りました。無論、

その中には人間も居れば、鴨だとか雀だとか云つたやうな鳥類も居りました。  
初め、彼等は皆んな仲よく暮して居りました。がその中に一匹悪る賢い蛇がありまして、それが内緒で、夕方から夜にかけてこそそこそこ匂ひ出して來

ては、口に合ふ程のものは皆んな、鳥であらうと獸であらうとまた蛙であらうと片つ端から喰べて歩くのでありました。餘り色々のものを喰べるので、蛇のからだは段々大きくなつて參りました。大きくなるにつれ、益々手當り次第に何んでもかんでも喰べるやうになりました。が、その中でも、蛙が一番大好物でした。蛙とさへ聞けばどんな遠くまでも、押し掛けてつて、喰べて了ひました。が、流石の蛇も人間だけは喰べませんでした。喰べない許りか、人間の姿を見かけると、こそ〜と隠れて了ひました。  
しかし、驚いたのは、蛙だとか、鳥だとか、小さな獸達でした。彼等の仲間達は片つ端から蛇の爲に喰べられて了ふのです。で、到頭ある日、彼等は相談しました。それは、蛇が決して人間を喰べないのを知つて、もし蛇が近づいて來たら俺は人間だぞと云つて、威かしてやらうと云ふのでありました。  
ある夏の初めの夕方、一匹の小兎が木の根に寄り

かゝつてぐうぐう寝て居りました。そこへ、例の大きな蛇がする〜と匂ひ寄つて來て、わんぐりと大きな口を開けて云ひました。  
『おい、起きろ。お前をいま喰べちまふんだから。』  
小兎はびつくりして眼を開きました。そして、眼を赤くして泣くやうな聲で云ひました。  
『ぼ、ぼくは人間だよ。心得違ひしちや困るよ。』  
すると、蛇はにや〜と狡さうな笑ひを浮べて、『なに、君が人間だつて？ 今まで君のやうな長い耳の人間は見ることが無いね。』  
さう云はれて、小兎はもう間違〜して了ひました。で何も云ふことが出來ないで下を向いたところを、蛇はばくりとその小兎を呑んで了ひました。  
また、その翌日の事でもあります。一羽の雛ツ子が、池の傍の乾いた砂原で、頻りに砂浴びをしてゐました。そこへいつ忍び寄つたものか、例の蛇がきらきら光る眼をしてその傍へにちり寄り、氣味の悪い低



い聲で云ひました。

「君は骨が柔かくて旨さうだね。砂浴びがすんだらそろそろご馳走にならうか。」

「な、なんですつて？」 雛ツ子は飛び上る程驚いて叫びました。が、直ぐに氣を静めて、落ち着いた聲で云ひました。

「冗談云つちやいけませんよ。ぼくはかう見へたつて人間ですよ。ほら、よくごらん下さい。人間と同じ二本の足で立つてるでせうが……」

「へへへ……」 蛇は氣味の悪い程低い聲で笑ひました。「だが、人間にしちやアおかしいね。

二本の足で立つてるところは成る程人間らしいが、そんなら人間のやうな二本の手もあるだらうね。あるんならちよつと出して見せて貰ひたいもんだが……」



雛ツ子は、それでもうぐうの音も出ません。ぼくりと蛇の爲めに呑まれて了ひました。

蛇は元來が狡る賢い奴ですから、相手が何んと辯解しようと思つてその辯解に誤魔化されるやうなことはありません。直ぐに相手の辯解を見抜いて了つて、困つてゐるところをばくりと呑んで了ふのであります。ですから、羽のある鳥だの、足の早い獣たちは、蛇のゐるこの池から離れて段々遠くの方へ旅に出て了ひました。で、今この池の近くに殘つてゐるものと云つては、蛙ぐらゐのものとなりました。蛙は、足が遅くて遠くへ逃げて行くことが出来ないう許りか、この池を離れてはどうしても生きて行くことが出来なかつたからであります。

蛇は、獸だの鳥だのが居なくなつてからと云ふものの、今度は蛙ばかりを覗ふやうになりました。迷惑なのは蛙です。蛇に見付けられたが最後、片つ端か

ら喰べられて了ひます。

が、その蛙の中にも一匹智慧のある蛙がありました。今度蛇に出會つたら、うまく云ひくるめてやらうと思つて待ち構へて居りました。

と、それとも知らぬ蛇は、或る日、ひまつこりその智慧のある蛙に出會ひました。

「やア蛙さん、いとこでぶつかつたね。今日は朝からおながが空いて困つてたとこなんだ。」

蛇は、その蛙を見るより早く云ひました。そしてべろりと赤い細い舌を出して口甜すりをしました。

が、智慧のある蛙はびくともしませんでした。今日こそ取つちめてやらうと思つたもんですから思はず反り身になり、かねて用意してゐた煙草をばくりと吸つて煙を吐き出しました。

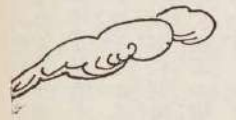
「蛇さん、君は眼をどこにつけてるんだね、君はひとさへ見れば蛙だなんて云つて喰べることを考へて





るが、しつかりし  
てくれなくちや困  
るよ。」

蛙はわざと落ち  
着き拂つて、煙草  
の煙をむやみにぶ  
か〜ふかしまし  
た。蛇は自分が馬



鹿にされてると思つたので、むか〜ッと腹を立てました。

「へえ、君は人間のつもりかね。だがどこから見ても僕が今まで喰べ  
てゐた蛙と違つたところが無いぢやないか。」

「馬鹿云つちや困る。」蛙は負けずに云ひました。

「僕は人間と同じに二本の足で立つてゐる。そして、足よりも短かい  
二本の手がある。それはかりぢやない、顔つきだつて、他の獣だの  
鳥と違つて人間をつくりぢやないか。聲だつて人間の赤ん坊とそ  
つくりの聲で鳴くことが出来るんだ。」

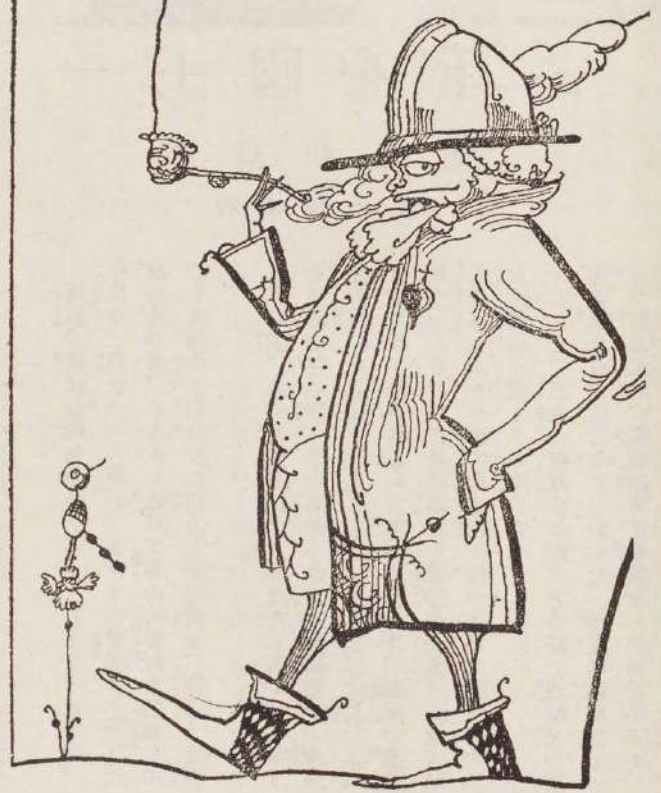
さう云ひながら、蛙は、ぎやアぎやア云つて鳴いて見せま  
した。

蛇は、おやおやと思ひました。そして呆氣に取られて  
ぼんやりしてゐると、その蛙は如何にも哲學者かなん  
そのやうな思慮深い、その上伶俐さうな顔をして、  
のそりのそりと歩き始めました。

その姿を見ると、蛇はもう手出しすること  
も出来ません。もしかすると、これは  
本當に人間ぢやないかしらんと思

つたからです。

で、蛇がさうやつては  
んやり考へ込んでる間に、  
その蛙は悠々と自分の家へ  
歸つて参りました。そし  
て、それからと云ふもの蛙  
と云ふ蛙は皆んな、どこと  
なく人間らしい格好になつ  
てその顔つきまでがいやに  
澄まし込んで、思慮深さう  
になつたと云ふことです。  
その上、夏の初め頃になる  
と一齊に聲を揃へて、  
人間の赤ん坊らしい  
聲で、ぎやアぎやア  
鳴き立てると云ふこ  
とです。(をばり)







## 一 王國を争ふ

小島政二郎

岡本歸一畫

諸君、僕はお馴染のエチエン・ヂエラールです。今度、我フランス軍が、ロシアの首都モスコに攻め入つて、さんく負けて雪の大原野を退却しつある途中で出逢つた恐ろしい事件を、語らうと思ふ。

兎に角、あの時の戦は、これまでにない大敗北でその前の年の秋に五十萬からあつた我軍勢が、翌年の春には、四萬しかなくなつてしまつてゐた。で、ナポレオン陛下は急いで本國に歸つて、新兵の募集にとりかかつた。その新しい軍勢が到着するまで、退却軍はエルベ河の此方岸で待つてゐることになつた。無論、僕もその中にゐた。

しかし、正直に白状するが、その時の我騎兵の狀態と來たらお話にならなかつた。部下の輕騎兵がポルナにゐた時、僕は初めて檢閲をしたのであるが、

その時の有様には、思はず涙が出た。あの立派な部下や、美しい馬、それが今見るもみじめな有様になつてゐるのを見ては、胸が張り裂けるやうな氣持がした。

「しかし、氣を確かに持て！ 成程、君等は大打撃を受けてはゐる。が、まだこゝに、旅團長が残つてゐるぞ。」僕は心の中で皆の者に向つて云つた。

そこで、僕はすぐその損傷を補ひ直してやる工夫を始めた。さうしてやつと残りの人員で、二大隊を編成することが出來た時、突然騎兵隊の各隊長達は悉くフランス聯隊總本部に集合して、來るべき遠征補充軍の編成に従事すべしと云ふ命令が來た。

で、或日、僕は愛する部下と別れて、一人馬を打たせて歸途に就いた。アルテンブルヒの手前まで行くと、道が二つに別れてゐて、南の方の、静かな方を行つてもいゝのだと聞いたので、その方へ行くとやがて森の中へはひつた。この森は、大變廣く續い

て、様々な樹々の緑の、長い間權の木ばかり眺めて來た僕には、なつかしいものだつたし、美しく思つた。しかし、この森の中を抜けてゐるうちに、どうも僕の心を傷ける面白くないことがあつた。それは森の中の村々の人達のそぶりなのだ。言葉の調子も氣に入らない。僕達佛蘭西人は、今まで獨逸人達とは非常に仲が宜かつたのだ。今までの六年間にでも僕達が彼等の國を少しは自由に仕過ぎた時もあったが、彼等はそれについて別に我々に惡意を抱いたことは決して無かつた。僕達は獨逸人と云へば親切にしたり、また彼等とても僕達には快く附き合つてくれてゐたので、獨逸の國は、僕達にとつては、第二の故郷と考へてゐたのだ。それが、今はどうもさうでない。人々の様子が、腑に落ちないことばかりだ。旅人に行き逢つて、僕がこつちから挨拶をしても、返事もしやしない。

村の人々は僕が近付くのを知ると、わざと見ない



振りをして、ふいと顔をそむけてしまふ。  
或村の中を通つた時など、村人達は道端にかたまつて、がや／＼、よくは聞えなかつたが悪口を云つてゐたらしい。女子供の目の中にも、明かに輕蔑の色のあるのを僕は見逃さなかつた。僕にはどうにも不思議に思へてならなかつた。

かうした面白くない現象が一番はつきりして来たのは、アルテンブルヒの十哩程手前のシエモリンの村まで来た時だつた。僕はそこまで来ると、喉が乾いて来たので、それにピオレットにも水を飲ませてやらうと考へて、と或宿屋へはひつた。すると、その宿屋の主人は僕のはひつて行つた姿を見ても、立ち上りもしない。いつもなら愛想を撒き散らす女中までが、まるで銃剣のやうな眼付をして僕を睨めてゐるのだ。その上に、僕が、戸口に近いテーブルに集つてビールを飲んでゐた四五人の村人達の方へ向つて、

「オイ諸君、一緒に飲まうぢやないか。」  
と云ふと、皆知らん顔してそつぽを向いてゐる。その中の一人が、  
「オイみんな、一緒に飲まないかとさ。チの字のお客様かよ。」

かう答へながら、右の肩でせうら笑ふ風を見せた。すると、みんなは云ひ合せてやうに、ビールのコップを飲み干して、高々と笑ふのだ。どう考へても、その笑ひは、いい意味を含んだ笑ひではなかつた。僕はこの人を小馬鹿にしたやうな彼等の行動か、どう云ふ處から來てゐるのだらうかと、馬の手綱を引きながら、胸の中で、幾度も繰り返して考へて見た。

二

その村を出はづれて、ふと見ると、途中の木の幹に、ありありと、チの字が刻り込んであるのが目に



留つた。僕は朝から今までに、幾度となくかうして木にチの字が刻り込んでゐるのは見てゐたのだが、

あの宿屋でビールを飲んでゐた男達が、あんなことを云ふまでは、別に何でもないことだと思つて、氣

にも留めないでゐたのだつた。丁度その時、向うの路から一人相當に立派な服装をした男が、馬に乗つて通りかゝつたので、僕は道端に待つて會釋した。

「貴方、甚だ失禮ですが……」  
と僕は木の幹を指して、

「このチの字の意味を御存じではありませんかしら。」

その人は、とても奇妙な風をして、そのチの字と僕の顔とを見比べてゐた。

「貴方。」と、ぶつさら棒に呼びかけて、そして、かう云ふ



のだった。

「これはナの字ぢやありませんね。」

かう云つたかと思ふと、僕が重ねて訊ねようとす  
る間も待たずに、いきなり馬の腹に拍車を蹴込むと  
一目散に逃げて行つてしまつた。

僕は、一時呆氣にとられて後姿を眺めた。それで  
も、別にその男の云つた言葉を、深く怪しみもせず  
どん／＼進んで行くうち、ふとピオレットの頭が横  
を向いた時、僕の目に計らずも、その手綱の先の金  
具に深くはつきりナの字が刻み込まれてゐるのが映  
つた。このナは、陛下のマークだつた。して見ると  
あのチの字は、何かこのナの字に反対なものを現し  
てゐるのに相違ない。

僕達がゐない間に、獨逸では何事が起りかけてゐ  
るのではないだらうか。今まで眠つてゐた巨人が、  
むく／＼と起き上らうとしてゐるかのやうな、國全  
體の呼吸が分るやうな氣がして來た。そしてその考

へと、逢つた人達の顔付を思ひ浮べると、確かなも  
ののやうにも思へて來た。

これはよく注意しなければいけない。佛蘭西へ逸  
早くこの話を聞かせなければならぬ。かう考へる  
と、一層早く新馬を求めて、新らしく強い十箇大隊  
の兵馬を、我指揮の下に置きたいと熱心に思はずに  
はゐられなかつた。

ピオレットをいたはり進ませながら、僕の頭はそ  
れらの考へで一杯だつた。

この時には、僕はもう林を出て、廣い見渡す限り  
の道を走つてゐたのだつた。道端には、澤山の薪が  
山のやうに積んであつた。

三

僕が丁度そこを通りかゝつた時、ふいに鋭くバリ  
バリと云ふ音がした。くるつと振り返つて見ると、そ  
の薪の間から一人の人の顔が出てゐる。その顔は、



僕の目を呼んでゐる。熱さうに赤くなつて、興奮し  
た感情が、顔一面に引き釣れてゐた。何だか見た顔  
だ、と思ふとすぐ、さつき一時間ばかり前に、僕に  
話し掛けたあの人であつたことに氣付いた。



「こつちへ入らつしやい。」

彼は聲を忍ばせて呼んだ。

「こつちへ、もつとこつちへ！　そこで宜しい。馬から降りて、さあ、錠の革紐を繕つてゐるやうな風をしてゐて下さいよ。どこからか間諜が見てゐるかも分りませんか。こつちを見てはいけませんよ。」

彼はせつかちな口調で、強く云つた。そして周囲を見廻した。

「若し僕が貴方を助けようとしてゐるのを見られたら、僕は殺されますからね。」

「殺される？」　僕はハツとしてそつちへ顔を向けてしまつた。『誰に？』

「チュグンド團に。リユツォーの夜警兵に。あなた方佛蘭西人は、丁度火薬庫の上に住んでゐるやうなものですよ。それに、もうマツチさへ擦られてゐるかも知れない。」

手間どりました。さあ、リユツォーの夜警兵だけに、是非氣をおつけになるやうに。」

「盗坊ですか？」

「いえ、いえ、獨逸でも一番強い兵ばかりです。」かう彼が答へた『さあ、早く行つて下さい、早く。僕は、大變危い位置にゐるのですから。では、さよなら。』

そして彼の男は、茂みに顔を隠してしまつた。

僕は馬を走らせながら、今別れた男の話より、その顔へた喉にしわがれた聲や、おど／＼した様子、右左と絶え間なしに配る目の恐怖が、いつまでも胸にこびりついてゐた。命を冒して僕の爲に計らつてくれた男が、無事であることを祈つてゐる時、今來た路に當つて、遠い銃聲と、人の叫びとを聞いた。僕は、やられたな、と咄嗟にビクツとした。人の叫びと聞いたのが耳のあやまりだつたらうか。誰かの獵の鐵砲の音だつたらうか。——さうでない氣が僕には打ち消すことが出来なかつた。

「それは初耳です。」　僕は錠の革をいぢりながら尋ねた。『そのチュグンド團と云ふのは何ですか。』

「それは、秘密團體で、丁度あなた方が、露西亞から追ひ出されたやうに、獨逸からあなた方を追ひ出してしまはうと準備してゐるのです。」

「ちやア、あのチの字はその爲ですね。」

「え、それは、彼等のマークなのです。これは、さつき村はづれでお逢ひした時云ふのでしたが、僕は人に知られるのが恐かつたのです。それで、まづあの林を先廻りして、馬を匿して置いて、僕もここに匿れて待つてゐたのです。」

「それはどうもお氣の毒でした。有り難うございませう。」　僕は彼に厚く謝して、『今日、貴方のやうな義侠心に富んだ方に逢へて幸ひでした。』

「いえ、僕は佛蘭西軍に救はれたことがあるのです。僕は貴方の皇帝にも親しく會つたこともありませう。あゝ然し、もう早くいらつしやい。少し話しが

#### 四

この事があつてからは、僕はしじゆう前後左右に注意を怠らず、野原は走り、身を隠せるところは馬をいたはり／＼、ゆつくり進んだ。まだこれから行手に、五百哩も獨逸の國土を踏んで行くのだと思ふと、心配な氣も起つたが、兎に角、餘り考へ過ぎまいと自分の氣持を引き立てた。

獨逸人は、僕には非常に親切で、優しい國民で、劍の柄を握つて向つて來るより、煙管を銜へながら打ち解けたがるやうな國民だと思つてゐた。彼等に勇氣が無いと云ふのではなく、彼等は親切で、淡泊で、誰とでも好んで親しく交るやうな性質を持つてゐると信じてゐた。が僕は、僕の觀察眼の不足を後悔しなければならなかつた。獨逸人はその表面の親しげな裏には、カスチリ人や伊太利人よりも、もつと執念深い、もつと力強い、惡魔のやうな恐ろしい性質が底に流れてゐるのだつた。　(つゞく)



童 心 句 野 口 雨 情 選



神奈川 原田小太郎  
よしの葉つばにお月様がうつゝてる

秋田 近藤恭太郎  
親馬も小馬もはしるつゝじはら

そば賣がそばに来てハイ一休み

秋田 森田松之助  
こまかあめこぬかのやうにとんでくる

夜の田にあやしい鳥がないてゐる

東京 宮内 清二  
○つばくらめおつこちさうにとまつてる

評、つばくらめ曰く『大丈夫々々々』  
つばくらがごみをくはへてとんで来た

東京 小 林 一 路  
◎向日葵を脊にして寫眞撮りました

評、すらくとしたよい童心句です。

熊ノ蜂フーワリフワリ藤の花  
兵庫 大島 知 恵 子  
にはとりがみんなで犬をながめてる



東京 石山一翠  
さくろの實微笑んでゐてこぼれそう

東京 河英太郎  
○櫻ンぼ露でお顔がぬれました

評、手拭でふいておやり。

東京 牛丸 一 男  
をしどりが小川の岸ですーいすい

お月様雲の間ですき見した

東京 八重 經 草 笛  
お月様なにを探して歩いてる

英城 内田みわ路  
○親竹よなぜに子供を垣の外

評、ほんたうに困つた子供だね。

可愛いなさるがおしはるして居るよ  
青森 龍谷 ちや子

電球にたかつて落ちた子供蠅  
甲府 中田 正 男

白ばらへ蝶々の親子蜜すいに  
甲府 北村 やす子

神奈川 綿 貫 静 子  
雨の夜どぶで蛙がギア〜

東京 小澤 スミエ  
草原でバツタの母さんお米つき

山形 松田ひろし  
お猿さん屋根を動かし見せてゐる

京都 吉田 榮 三  
猫さんが肴をみつつけにこ〜顔

愛知 森 ぼ たる  
井戸をのぞけば顔と若葉がうつつてる

臺北 濱谷 キクエ  
雨の中蛙がピヨコッと坐つてた

東京 高 木 實  
せのびする五月の空の鯉のぼり

埼玉 新 井 定  
つみ草に行つてふてふとおにごっこ

千葉 朝 倉 道 雄  
春日和むしろの上ではり仕事



大阪 里川としは  
おひなさま桃の花びらもつてゐる

くものすにやせたお月さんがかゝつてる

蝶々がおひるねしてゐる草の上  
東京 河邊 寸 子

お馬さんもすこし馬草おあがりよ  
青森 小 林 安 子

大阪 中 村 宏 文  
蝶々に夢をたのんでにがしたる

電線の燕子のシヤツボ晝の月  
東京 高橋 吉之助  
夜がふけて空をあふげば星いくつ

飛び過ぎていなごそれ見ろ川の中  
福島 新 田 藤  
かみなりの渡つてにげた虹の橋

そらなるぞおへそをかくせ稲光  
埼玉 丸山 富美子

山路を姉さん一人で歸つてく  
神奈川 石川 雪花





# 日本童話選

立石美和

水島爾保布盛



## はじめがき

西洋はちろん、すぐ隣りの支那や朝鮮の歴史を讀んで居ても、きつと、私達日本人には、何處か勝て落ちない、何かはつきりと、のみ込みにくい、變な所が出て來ます。何處か理窟の異な所がある。

理窟だけではない。感情、義理だの、人情だのを取り扱つた、物語や御話の事になると、尙や、妙にそくはない所が出て來る。

私達の様に、西洋の人に近い教育を受けて、十冊本を讀めば、六冊までは外國の物を讀んで居る者にさへさです。でも、もつと生のまゝな日本人、小さい人達に取つて、外國の語が果してびつたり、その心に響きあつて居るでせうか？

—そんな筈はない！—

私は、いつもさう一人で考へて居ました。

私達は、あんまり自分の國のものを、粗末にして來はしませんでしたか？そして、事實は？私達國には、粗末にして、話だけしかないのでせうか？今、忘れられかけて居る様に、忘れて終つてもいい、物たげしかないのでせうか？それ程、新しい時代の子供達に、縁起いものしかないのでせうか？現代の、小さい人達の心を、樂しませるだけの、豈

……さて、物語を初めませうか……

## しやうぢき狼

山の奥では、おそろしい人くひ狼が、たくさん住んでゐました。

その中で、たつた一匹、たいへん正直な狼がゐましたが、あんまり正直なので、いつも仲間にだまされて、おもしろい物を、たべる事が出来ませんでした。

あるとき、もう一ト月も、なにもたべなかつたので、たいさうお腹をすかせて、人里へ下りて來ました。

そして、けふこそは、うまい人間の子供でも喰つてやらうと思つて、子供のおさうな家を、さがして軒の下へしので行きました。

ちやうど、その家では、いまお母さんが、子供をねかせてゐるところでした。

『さあ〜、泣くんちやありませんよ。ほら〜

かな空想や、美しさや、高い香ひに欠けた、貧しい國なのでせうか？

い、え！い、え！私は、これからさきの話で、そんな筈はない事を立証に證據立て、見せます！

……等な事には、自分を粗末にしたがる、私達の國にも、少ないけれど、見識のある學者や、眞面目な篤志家が居て、ほろびかけたものを、やつとこゝまで、支へて居てくれるのです。わづか五里か十里四方の小さな郷の話を調べる爲に、二十年もの長い間、苦心をつづけた方さへあります。

その方達の、力を借りた事は申迄ありません。それに、私の讀者には、親しい宮の、「根來先生」や「妹」の中に出て來る、あの「お祖母」の口から、繰り返し傳へられた話も加へて、こゝに、今にも死にかけて居た數百の、小さい、日本の姿が見出されました。

可愛い日本の姿よ！待つて被居い！いま、美和が、新しい、生々とした命を注ぎ込んで上げますから……つやくした、柔らかない絹で造つた、美しい感情の着物を着せてあげますから！ふくよかな、蕪扇の氣息を蘇生らせて上げますから。

讀者よ！何といふ名譽にみちた仕事でせう！私を許して下さい。私を助けて下さい。そして私にそれをやらして下さい。私はけんめいに努めます！



い、子だから、お黙りして、ねんこするんですよ。」  
お母さんは云ひました。

「やんく、やんく、やあん  
えんえん、……えんく」  
子供は、なか／＼泣きやみま  
せん。

そこで、お母さんは云ひまし  
た。

「何うしてお黙りしないの！  
そら！こわい／＼！狼が  
来ましたよ！そんなに泣きな  
きすると、狼に、やり／＼し  
て終ひますよ！」  
戸の外で、それを聞いた狼  
は、のどを鳴らしてよろこびま  
した。

「これはうまい！ひさしぶり  
で、人間の子が喰  
へるぞ！」



さう思つて、よだれをたらし乍ら、いまに呉れ  
るか、いまに呉れるかと、首をのばして待つてあ  
りました。

すると、泣いてゐた子供は、狼  
にやられては大變だと思つて、す  
ぐに泣きやんで、こわさうに、お  
母さんに抱きつきました。

そこで、お母さんは、子供のお  
せなかを叩き乍ら云ひますには、  
「あ、あ、い、子、い、子！坊  
やはこんなにい、子だもの、何う  
して、何うして、人くひ狼なん  
かに、やるものでちゆか。いつま  
でも、く、母ちやんの、だいに  
の坊やよ！」

戸の外で、それをきいた狼は  
がつかりして、ポロ／＼と涙をこぼしました。  
「あ、情ない！それではやつぱり、あの子にも

らへないのか。」

さう云つて、ペコ／＼のお腹を抱へて、泣きな  
がら、山奥へかへつて行きました。

なんと、正ちきな狼ではありませんか。

### 猿とがま

ある時、がまが、河原であ  
ぐらをかいてゐると、そこ  
へ、山からお猿が下りて來  
ました。

猿は、一つがまにからか  
つてやれと思つて、

「がまどん、がまどん、お前  
は大さうかしこさうな顔をして  
空ばかり眺めて居るが、明日のお  
天気でも、わかるのかね？」  
と、たづねました。

がまは、何を猿めが生いきなと思つて、



「猿どん、猿どん、お前は、大さうキョロ／＼し  
て、河原を歩いてゐるが、何うだい、いくらか魚  
は捕れたかね？」

と、さかさまに、からかひました。

山では、はしつこい猿も、なる程、魚  
をとる事ができないので、くやしがつて、眞赤になつて怒りました。

そして、こんどこそは、がまを、  
へこましてやらうと思つて、  
「がまどん、がまどん、お前は  
たいさう大きな口をあいて、上  
を見てゐるが、たまにははた餅で  
も落つこちてくるのかい？」  
と云つて、からかひました。

すると、がまは、ケロ／＼と笑つて、  
「さうだとも！僕は、餅なんか喰ひつけてゐる  
んだ。なんなら、お前にもごちさうをしてあげや  
うか」



と云ひました。  
くひしんぼうのお猿どんは、これをきくと、もう喧嘩のことなんか忘れてしまつて、

「がまどん、それはほんとうか、何うか僕にも喰はせて呉れ！」と、頼みました。

そこで、がまは、お猿をつれて、やつて来たのは村で一番の、お金持ちの家でした。

お金持ちの家では、けふ赤ん坊が生れるといふので、さつきから、ベタンコ！ベタンコ！と、お餅をついて、いま生れるか、もう生れるかと、まつてゐる所でした。

がまは、なにやら、コン／＼と、お猿に耳うちをしてをいて、自分は、ひとり、もつくり、も



つくり、赤ん坊を産む、お嫁さんのねてゐる、お部屋の下へ、もぐりこんで行きました。そして、

「オギャア！ オギャア！」と、大きな聲を出して、赤ん坊の泣きまねをしました。

これを聞くと、臺所で、餅をついてゐた人達は、大よろこびで、

「そら赤んやんが生れた！」と云つて、一どきに、座しきへかけ上つて来ました。

その間に、はしつこい猿は、大急ぎで、白ごと、餅を盗んで、ドンドコ／＼山の上へ逃げて行つて終ひました。

後から、がまも、のそ／＼這ひだして、盗んだお餅を、猿と半分わけするつもりで、山の上へあがつて行きました。

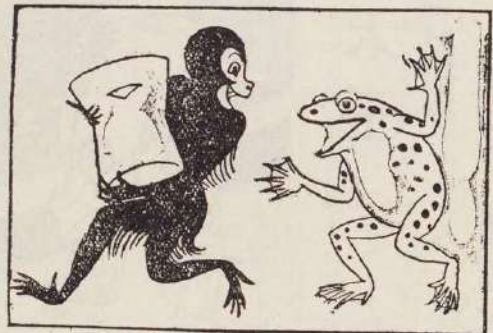
山の上で、とくいさうに待つてゐた猿は、がまの顔を見ると、

「がまどん、がまどん、お餅を半分わけすると云つても、多い方と少ない方ができて、なかなかむづかしいから、いつそ、こゝから、これをころがして、早く取つて喰べたものが、徳つて事にきめようよ。」

と、自分につごうのいゝ事を云つて、いきなり、臼を山からつき落しました。

臼は、ゴロ／＼ゴロ／＼と、ころがつて行きます。

猿は、ピヨイ／＼ピヨイ／＼と、木から木へ飛び移つて、臼よりも早く、谷底へはやまわりをして待つてゐました。



そして、ころげ落ちて来た臼を、うけとめて、中を見ると、これは大變！臼はからつぽで、中

のお餅は、何處かへ落ちてしまつたと見えて、何もありません。

それで、猿は、また大いそぎで山の上へかけ上りました。

見ると、がまが、あぐらをかい、大きな口をあけて、さもおいしさに、お餅を喰べてゐるところでした。

そして、お猿に、からかつて云ひました。

「猿どん、猿どん、お前の餅は、臼の中にあつたでせう。僕の餅は木の根っこに、引つかつてゐましたよ」ですつて。

(次巻では、「天狗をだました子供」と云ふ面白いお話を張ります。)





# 頼光の四天王

—太刀打の剛者、卜部季武—

川崎 春二

羽鳥 古山 畫

四二  
 『前回の権様』源氏二代目の大将源満仲は、少納言秋忠らの讒言によつて罪せられようとした。が、その子頼光が鎌倉にゐたので、うっかり満仲を殺すことも流すことも出来ない。頼光を京都に呼寄せてから、親子を一緒に罪に行はうとした。その時、頼光、園一の家來渡邊綱は用事で京都に上つてゐたので、綱をも亡きものとして後の面倒をなくさうとした。で、単独な計略を用ゐて綱をからめ捕つたけれど、剛力無双の綱は引立てられる途中から、綱住のまゝ、疾風のやうに逃げて、捕手の武士達の鼻をあかせてしまつた。

一  
 師走のうす白い半月が西の山に沈みかけて、星空をわたる枯風がわけてつめたい夜更けに、鎌倉の頼光の館の門をたたく一人の男がありました。

普通の旅人のやうでもあり、姿をやつした武家のやうな恰好でもありません。

「お頼み申す〜……」

「どなたぢや〜」

びつくりしたやうな番士の聲が門扉の中から阪鳴りかへしました。

「お身内の渡邊殿からの使者でござるで——ご開門をおねがひまうす」

「どこからのご使者であらうと、この夜ふけに門を開くこととはなりませんぬ。明朝にお越し下され」

「いや〜、御家の一大事、至急の使者でござる。明朝まで待つことは出来ませぬ。」  
 「うむ、御家の一大事？ しかし

渡邊殿のご使者なら、吾らにもすこしは聲に聞き覚えがある筈だが一體お名前は何と申されるか。」  
 今度は番士の頭らしい、違つた聲がかう聞かへすのでした。

「そのご不審はご尤も。——が、拙者は渡邊殿の郎黨ではあつても東國に參るは只今がはじめて。渡邊莊をあつかふ大秦忠太と申す者にござる。多分、若殿、頼光公にもお見知り置かれる筈、お取次下され。」

「では、しばらくお待ち下され。」

二

やがて鐵の鎖を打つた嚴重な門扉が半ば開かれ、二人の逞ましい武士が現れました。

「おう、これは、まことに太秦どの。」

「匹田どにおはしたか、お久しぶりでござる——」

「遠路のご使者、ご苦勞にござる。さあ、ご案内申さう——」

先に立つたのは匹田乗正といふ六孫王經基以來の源氏の老臣で、もう一人は片瀬小次郎といふ若武者でした。

明るく灯のともされた大廣間に案内されると、間もなく頼光は血氣の若武者を三四名従へて立現れしづかに着坐されました。

太秦忠太は平伏して、渡邊綱からの書状を差出しました。  
 それは——満仲公が悪少納言在原秋忠等のために計られて朝廷か



謀反の疑ひをかけられ、一族の者は皆檢非違使の役所にあづかられてゐる。くはしいことは、使者によく申合めてあるから、それに就てお糺しありたい——といふ簡單なものでした。

頼光は讀み終ると、それを側近の不敵な面魂をした若者に渡ししました。若者は一目見ると、眼を怒らし髪の毛を逆立て、しまひました。

續いてそれを讀まれた四田以下の家來達も、皆面に朱を注いで怒りの色をあらはしました。「殿、この上は一刻もはやく關東の軍勢を率ゐて都に攻め上り、悪人ばらを斬り拂つて大殿の無罪の證しを立てねばなりませんまい！」

かう言出したのは最初の若武者でした。

けれども、頼光は顔色一つ動かさず、

「いや、六郎、はや、まいぞ！」

まづ、太秦が口上を聞かう——と、落着きはらつて尋ねるのでした。

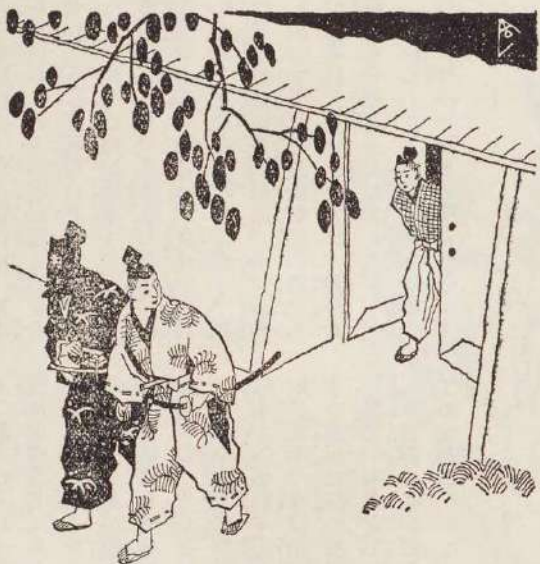
「申しあげます。……悪人どもが大殿や御一門の者の罪を決定するのは、若殿が東國にゐられるからで、若殿を京都に呼び寄せて捕へてから、思ふ存分の罪を行はうといふ考らしいとのことにござります。と申して、今東國勢を催して都に攻め上りましては、人質同様になつてゐられる大殿をはじめ御一門の方々の御生命が危うござ

りませう。さうしてゐる中に、朝廷からは若殿に都にのぼるやうと、命令があるに相違ござりませぬ。朝廷の命令に従はなければ、悪人ばらに重ねて悪名を被せられませう。されば若殿には、何處か安全な場所にかくれてゐて、大殿の無實の罪の晴れるまでは、朝廷の命令を受けとらないやうに致されるが、上策ではござりませぬか。これは主人渡邊綱、藤原仲光殿等の意見にござります……。」

「さうぢや、父上が敵の手の中にゐる今の吾等には、それ以外に取るべき手段はないであらう——遠路の使ひご苦労であつた。さあ、別室に退つて太秦を休養させよ。」

頼光は、それから更に家臣達と

相談をこらすのであります。



その翌る朝、頼光は下部六郎季武、片瀬小次郎友信、平三郎元國の三名だけを連れて、

何處へともなく鎌倉を立去つて仕舞しました。

次の日に、は案の定、朝廷からの呼出し狀が鎌倉の頼光の館に参りました。

しかし、そこにはもう留守居の

匹田乗正だけしか居りません。「主人は生憎、昨日からこの地方の政治の様子をしらへに出かけてしまひました。何うぞ主人が歸るまでお待ちを願ひ申上げます。」

乗正はかう言つて、朝廷の使者を頼光の館に止め置き、毎日相摸の海でとれる魚や、武藏野で獲る山鳥などの御馳走を致しました。

鎌倉を脱け出した頼光は、その頃既に相摸馬入川の住人、平吉秀の館にそつと入つて知らぬ顔してゐたのでした。吉秀は平三郎元國の父親であり、相當に勢力もありましたから、一番安全なかくれ家と信せられたのでした。

また、他の勇士達をば秘かに京都に上らせ、多田城をあづかつて



ある藤原仲光、藤原保昌や、京の街に匿れてゐる渡邊綱等と力を合せるやうにと言付けたのでした。それから幾月か過ぎて、あくる年の春がめぐつて來ましたが、馬入川の吉秀の館には、喜ばしい訪れもありませんでした。たゞ、満仲等は檢非違使の役所から、親類にあたる近江守源俊朝臣の許にあづけられたといふ便りが、幾分か頼光らを慰めるだけでした。それにしても、早く頼光を探出して満仲の一族を一度に罰しよう



と、悪人ばらは一生懸命になつて國々を探索してゐたのでした。ところが何といふ不仕合せか、頼光は桃の花が咲き出した頃からふと、熱病を病み出し、とう／＼大病になつてしまひました。六郎や小次郎や平三郎等の生命にもかへる程の看病も、その驗しが見えず、今は殆ど死を待つばかりの重病に陥つたのでした。頼光が病氣をしはじめた時から平吉秀の心がだん／＼變りかけてゐました。

ある夜、平三郎が呼ばれて父親

の座敷に行く、兄の吉國、吉時とが三人で待つかまへてゐて、「其方の主君頼光は、いよ／＼天から捨てられたのだ。京都方の探索がきびしい上に、頼光公が亡くなつたなら何としても、かくし通すことは出來ない。今の内に、京都へ駕で送り届けてしまふ方がよい。それこそ、吾家の一族が滅びるか、厚い恩賞を受けて子孫が繁昌するかの境なのだ。其方も、父や兄達の意見に反対はあるまい。たとへば、贊成しないと言つても最早、それ／＼の手配りは終つてゐるのだから仕方がない。其方には大事な主君かも知れないが、諦めて貰ふ外はない……」平三郎は心臓が止まる程驚きま



した。しかし、もと／＼賢い若者でしたから——今更、反對しても無駄である。それよりは、同意すると見せかけて六郎と小次郎を遁がし、京都へ上る途中で主君の親を取り返して貰はう——と覺悟を決めたのでした。「其方が同意して呉れた以上は總

出來てゐるのだから——」  
「お父上、あの二人は却々手強い奴でござります。家人達を多く死傷させたおまけに、遁げられてしまふやうなことがあつたら大變です。それよりか、私が驅し討ちに斬つてしまひませう。」  
流石は

て安心だ。では、六郎と小次郎とを直に討たせてしまはう。用意は

吾らが弟ほどある！  
兄の吉國、吉時はかう讃めそやしました。  
けれども、何うして平三郎が主君を賣り、兄弟のやうな仲間を斬りませう。小次郎と六郎とをその夜の中に、安々と遁がしてしまひ、自分はその場に腹を切つて死骸となつてゐたのでした。

四

ト部六郎季武と片瀬小次郎友信とは、たとへ一時のことでも頼光を見捨て、遁げるなら、いつを斬り死した方がましだと思つたのでしたが、それでは却つて主君を取戻す機會を失くしてしまふことになると考へたので、涙をのんで平



三郎の頼みを承知したのでした。吉秀等親子は、早速朝廷に使者を立てると同時に、重病の頼光を嚴重な駕に乗せて京都に向ひました。——その總勢は三百餘騎、鎌倉の殘黨たちでは何としても奪ひ返せさうにも見えませんでした。しかし、六郎と小次郎とは三島の宿にかくれて、手ぐすねひいて待ち構へておりました。

三島の宿と下部六郎季武、これには前に、溯つて一つの話があるのです。

頼光がはじめて東國に下る時、何せ源氏の若大將の初めての下國なので、その仕度はまことに美しく花々しいものでした。それに、

五六人の老臣の外は殆ど若武者だけを選びすぎたものです。京の街々では、若い源氏の家來達が美々しい衣装や大小をひけらかして歩きまはり、出發の日を待ちこがれるといつた有様でした。

それらの若武者達を見て、じつと涙ぐんでゐる一人の老武士がありました。その體の恰好、眼の輝き、七十歳位には見えても血氣時代の武者振りを思出させるに十分でありました。

これぞ滿仲公の老臣、下部次官季國でありました。——季國には六郎季武と呼ぶ、たつた一人の息子があつたのです。この六郎は、十三才の時には五人張りの強弓を引き、四尺無反の太刀をば小鞭の

やうによく使ひ、荒馬に乗つて京の街中を押しまはり、氣の弱い公卿や、京武士を驚かしたものでした。従つて下部六郎の名は、京中に鳴り響いたものでした。ところが六郎は、妙な癖があつたのです。それは喧嘩の仲裁が大好きなことなのです。幾ら體が大きく力があるといつても、十三やそこらの子供だと思ふので、喧嘩組の方では六郎の言ふことをなかく聞かない。すると腹を立て、今度は自分が喧嘩の相手になつてしまふ。大力の上に、生れつき太刀の使ひ方が素敵もなく上手と來てゐるのだからたまりません。忽ち相手は斬殺されてしまひます。十五才の時までには十人許りも、荒武者を

殺してしまつたのでした。父親の次官季國は、今にどんな亂暴な眞似を仕出來すかも知れないと、大そう心配して、「大人しくなるまで京の街へ決して入つて來てはならぬ——」と固くいましめて勸當してしまつたのでした。それから

は、京の街に荒武者六郎の姿は見えなくなつた。けれ共、父親の心はどんなに淋しかつたかわからなかつたのです。恰度その年で、六郎が姿を消してから四年経つてゐました。父親の心では、「六郎も今年は十八才、頼光公の東國下りには美しく着飾つて第一番にお供が出來るものを——」とかう思つて先立つものは涙ばかりでした。

下部次官は遂々、我慢出來なくなつて渡邊綱を訪れたのでした。「これは下部殿、ようこそ見えられた——」

「貴殿は、今度若殿の東國下行には先導を承はるさうで、お目出度うござる……」

「六郎殿もをられ、ばなわ——」それを言はれると、季國はもう老眼からばろ／＼と涙をこぼしてしまふのでした。

「實はそのこととお願ひに參つたのちやがな、渡邊殿、拙者もはや七十才、明日の生命もわかりませぬ。心までからさし意氣地なくなりました。せめて、あの六郎を若殿の手に加へて此の眼をつむりたいのちやが——」

「ご尤もでござる／＼。」

「八の時には東國の方にゐるとも言ひますのちや。六郎奴を貴殿におねがひ申したい。貴殿の外にお願ひする方がござらぬので——」

「承知いたしました。必ず拙者が六郎殿を尋ね出して、若殿の無二の方人としてお付け申しませう。今度都に歸る時分には、立派な六郎殿をお連れ申すでござらう。」

「その一言を聞けば、もう拙者は今こゝで眼をつぶつても心残りはござらぬ……」

五

「ご尤もでござる／＼……」渡邊も涙をためておりました。綱は東國へ下る途中、宿場々々





「さあさあ、手をあげられい。」  
綱は六郎の手をとつて、嬉し涙を流しました。  
「貴殿を探し出せなかつたなら、拙者は京へ歸つてお父上次官殿に合せる顔がなかつたのぢや。有難い……」と、綱は六郎の手を押しいたゞく様にしました。  
「あまりの懐しさに、若殿の行列を道端の木かげから見えて泣きました。しかし勤當の身の止、今更幼友達の晴れやかな姿を羨むこともなりませぬ。いつそ、遠くへ行つて目をつぶつてをらうと隣村へ行つてかくれてゐました。ところが、渡邊殿が拙者をしきりにお尋ね下さるとのこと、かくれ通してしまふは、御志に對して相すまぬと存

じ、このやうに耻をしのんで参りました。」流石の荒武者も聲をのんで泣きました。  
「若殿も何のやうにかお喜び下さらう。」  
かうして、綱は落ちぶれ果てゝゐた卜部六郎を頼光の前に連れ出したのでした。そして衣服大小から旅費まで與へられて、一旦京都に歸り、父親に面會して勤當を宥して貰ひ、再び東國へ頼光を慕つて来て、それからすつと頼光の手足となつて忠誠をばげんで来てをつたのでした。  
だから、六郎にとつて三島宿は放浪時代の故郷で、そのあたりの壯士たちは、皆六郎の舊い友達でした。



で六郎らしい若者の噂を聞く度に人をやつたり、自分から出掛たりして探しましたが、なか／＼六郎に逢ふことが出来ませんでした。やがて伊豆の國府、三島宿に着いた時、如何にもそれらしい若者の噂を聞き込みました。そこからは箱根の難所にかゝるので、三四日人馬の足を休めましたから、今度こそはと思つて、いろ／＼と手をつくして探らせましたが、今度は、その若者が急にゐなくなつてしまつたといふので、綱はまた大そう落膽しました。  
明日はいよ／＼三島の宿を立つといふ日の暮方のことでした。  
綱がじつと考へ込んでゐるとこ

ろへ、一人の郎黨が来て、  
「今、怪げな若者が訪ねて参りました。名を尋ねても答へず、たゞ渡邊殿にお目にかゝればわかると語り申してをります。顔容は立派ですが、風體の悪い大男でござります。如何いたしませう。」  
これを聞くと、綱は躍りあがらひばかりに喜びました。  
「その者を丁寧に案内いたせ！」  
間もなく、垢じみた着物をまとひ、大太刀一本落しざしにさし、破れ笠を傾けて耻かしさうに這入つて来ました。  
「渡邊殿、耻をしのんで参りました！卜部六郎季武でござります。」  
若者は笠をとつて跪きました。  
「六郎殿、よくぞ訪ねて参られた





# 大發明家チソンの

廣瀬龍太郎

平澤文吉書

五二  
(前編) 發明家の王と云はれるエヂソンも、小さい時は、皆んなから馬鹿だと思はれてゐました。たゞ、お母さんだけが、エヂソンの氣質に面白い所があるのを知つて、この子は將來、キツと偉い者になるに違ひないと思つてゐました。そして、エヂソンの心を勵ましてやりました。

## 一、かあい、新聞

さうかうしてゐる内に、エヂソンも十三才になりました。  
或る日の夜、エヂソンはお母さんに向つて、「お母さん、私も何時までもブラ〜と遊んでゐるわけにも行きませんから、何か錢儲けなしたいと思ひますが、いかゞでせうか。」と云つて訊ねました。  
お母さんは、衆々から、小さい子供がお金の事などでコセ〜と働くのは大嫌ひな性でしたから、  
「いえ、そんな事はする必要はありません。家では、お前に働いて貰はなくてはならない。立

派にやつて行けるのです。お前はそんな苦ツたれた心を起さずに、しツかり勉強なさい。」と云つて、許しませんでした。

併し、エヂソンは、何んとかして、働いて自分自身の手で勉強がして行きたかつたのです。又、自分で儲けたお金で、電氣や化學に關する道具を買つて、それで實驗がして見たかつたのです。

エヂソンは、泣くやうにしてお母さんに頼んで、ヤツと許して貰ひました。

エヂソンは、先づ最初に、新聞賣り子になりました。

「ゆうかん！ ゆうかん！ 夕刊は一錢！」と、聲を暖らして呼び歩きましたが、こんな事では、幾らも儲ける事が出来ません。そこでエヂソンは、色々とお考へて、一つ、のい、事な思ひつきました。それは、「新聞を發行する」と云ふ事でありました。その時、エヂソンは十四才でありました。十四才その少年で、どうして新聞などが發行出来ませう。

エヂソンは先づ、ニューヨークと、デトロイト間を走つてゐる鐵道の會社へ行つて、その汽車の一室を借りうけました。その室へは、僅かばかりの活字や、簡単な印刷機械を据へつけて、まづこれで、發行所が出来上つたわけです。それからエヂソンは、自分で原稿を書き、自分で印刷なし、おまけに自分で賣る事になりました。

新聞の大きさは、ハンケチほどありまして、たうか、エヂソンはこの新聞に、「ワイクリー・ヘラルド」と云ふ名前をつけました。

こんな小さな新聞でしだけれども、體裁はなかくよく整つたもので、その頃始まつた南北戦争の記事やら、經濟界の事情やら、或ひは三面記事など、あたりまへの新聞と少しも變りませんでした。鐵道の驛長達は、皆んなエヂソンを眞實にして呉れて、色々な新しい新聞タネを取つて置いてくれました。

「おや、君の讀んでるのは、なんの號外だ。」

「號外ぢやないよ、これでも新聞だよ。」  
「新聞？へえ、小ツほけな新聞だなア。なんと云ふ名前だ？」  
「ワイクリー・ヘラルド。」

「ぶつ...名前だけは馬鹿に立派だな。それで何かい、その中にはお伽ばなしでも書いてあるのかい？」  
「いや、どうして。なんでも發行人は十四才の少年だと云ふことだが、なか〜しツかりしてゐる。その少年は、自分で記事を書いて自分で印刷をし、自分で賣り歩くのださうだ。まア、讀んでみたまへ。さう馬鹿にしたものぢやないよ。」

こんな御梅で、エヂソンの新聞は、汽車の乗客仲間に大へんな評判になつて、飛ぶやうに賣れました。お蔭でエヂソンは、お金を澤山儲ける事が出来ましたが、それで幾々欲しいと思つてゐた、化學の實驗用具を買ひました。エヂソンは、その實驗用具を例の汽車の中の一室に備へつけて、新聞の發行の合間々々に、化學の研究をするやうにな



りました。  
その頃、エチソンのお友達に、オリバアと云ふ少年がいました。オリバアは、エチソンのお手傳ひをして、新聞を賣り歩く役目をしてゐました。オリバアは、その當時の事を思ひ出して、次のやうに語つてゐます。

『僕は、エチソンに頼まれて、新聞を賣り歩く役目をしてゐた。エチソンは、金銭の事にはひどく無頓着なので、僕は随分困つた。例へば、僕が、新聞の賣り上げ代をエチソンに渡すと、エチソンは、『やア、有難う』と云つて、數へもせずに、ひよいとポケットの中へ入れてしまふ。僕が、『エチソン君、金だけは勘定して受けとつて呉れたまへよ』と云ふと、エチソンは、『なアに、丁度あるよ』と云ふばかりで、一度だつて數へて見た事になかつた。

エチソンは、その頃、化學の研究に夢中になつてゐた。僕は、將棋が好きだつたものだから、エチソンに、『將棋をしないか』と云

ふと、彼は直ぐに、『うん、やらう』と云つて、僕と將棋を差しはじめる。ところが、エチソンは、將棋をやりながらも、心では化學の實驗の事ばかり考へてゐるのだ。だから、一寸も身が這入らない。僕は、あんなに選り合ひのないことは無かつた。エチソンのポケットには、何時も化學の本が二三冊這入つてゐた。』

二、がちやアーン!

お金には困らない、好きな化學の研究は出来る——先づこの當時は、エチソンにとつて幸福な時代でありましたらう。ところが或る日のこと、思ひがけない不幸が見舞つて來ました。

その日、エチソンは例の通り、汽車の中の實驗室に閉ぢ籠つて、熱心に研究をしてゐました。丁度その時、汽車は曲り角のころへ來たと見えて、ガタ／＼と左右に揺れるはじめました。エチソンが、『ひどく揺れるな』と思つてゐる途端、後の方で、ガチアーン

と云ふ、何か物が墜ち落ちたやうな音がしました。  
『おや……』と思つて振りかへつてみると、さア大變! 實驗室の棚から、劇薬の燐素の罐が墜ち落ちて、床の上で屑々となえおが つてゐるのです。

エチソンは吃驚して、直ぐさま自分の上衣を脱いで、叩き消さうとしましたが、どうして、消えるところが益々ひどく燃え擴がつて來ました。

『困つたなア、困つたなア……』  
流石のエチソンも、うろ／＼してゐました。すると、丁度折よく其處へ、汽車乗込みの車掌がやつて來ました。車掌は、この場の有様を一目見るなり、直ぐに自分の室へ引き返して、バケツに一杯水を入れて持つて來ました。この水のお蔭で、幸ひ火事は大事にならずに済みました。併し、困つたのは後始末です。この車掌は、ふだんから、エチソンの評判のいゝのを妬んでゐましたので、何か事があつたらやつつけてやらうと待ち構へてゐた。



のです。  
そこで、この事件が起きて來ました。車掌

は、これはいゝ口實が出來たと云はんばかりに、意地の悪い笑ひを浮べました。その顔を見たエチソンは、『こりや確な事にはならんぞ……』と思つてゐました。

案の條、汽車が次の驛へ着くと、車掌はエチソンに向つて、  
『君、こんな危險な物は、汽車では一刻もお取りする事は出來んの。さつさと出て行つてくれたまへ。』  
と云つて、エチソンの取事も待たずに、實驗用具を始めとして、印刷機械、活字、機梅子、木箱、エチソンの消物から帽子に至るまで、残らず窓から抛りだしてしまひました。



ブラウトホームに、うづ高く積まれた荷物を前にして、エヂソンは全く途方に暮れてしまひました。怒めしうな顔をして、いつまでもく、汽車の發着を眺めてをりました。

『ウイークリー・ヘラルド發行所』並びに『エヂソン化學實驗所』は、かうして無残に閉きつぶされました。エヂソンは、一時がっかりして、もう新聞なんかは止めてしまはうかと思ひましたが、又、思ひ返して、今度は自分の家に事務所を置いて、前通り發刊する事になりました。

エヂソンは、自分の家で印刷した新聞を持つて、停車場へ賣りに行きました。新聞は相變らずよく賣れました。

### 三、九時になつたよ

エヂソンは、毎晩八時頃、停車場から家へ歸つて参ります。それから大急ぎで飯を食べて、勉強にとりかゝるのでした。この晩の勉強の時間が、エヂソンにとつて一番楽しい

時でありました。

エヂソンはその頃、電信機械の研究してゐました。(註、電信機はエヂソンが生れる前に、既に發明されて、實用にも使はれてゐました。)エヂソンは、針金や、鐵板を買つて来て、自分で電信機械を作りました。そして、お友達達のハリイ君の家の間に、電線を引つづつて、お互ひに色んな事を通信してゐました。

エヂソンのお父さんと云ふのは、身の丈が六尺以上もある、頑丈な人で、今まで一度だつて、病氣にかゝつた事はありませんでした。

お父さんは、何時でも口癖のやうに、『人間は、早起き早寝をしなけりやいかん。晩は九時になつたら、どんな事があつても寝なくちやいかん。かうすれば、何時でも、丈夫であられるのだ。』と云つてゐました。従がつてエヂソンも、晩遅くまで勉強する事は出来ませんでした。九時の時計が鳴れば、直ぐに寝なければなら

ませんでした。これはエヂソンにとつて、何よりも辛い事でありました。

エヂソンは、毎晩停車場から歸る時に、その日の新聞を持つて来ます。お父さんは、大きな老眼鏡をかけて、鐵燭の火の下で、熱心にその新聞を讀みます。

『さア、勉強するのは今だ。』エヂソンはかう思つて、父親の向ふ側に眼かけて、本を讀み始めます。

ところが、お父さんは、決して時間の事を忘れてゐるのではないのです。時計がそろそろ八時半頃になつてくると、お父さんは、チヨイ／＼と顔をあげて、時計の方を見ます。いよ／＼九時近くなると、お父さんは、右の眼で新聞を見ながら、左の眼では、時計の針を眼んでゐます。

チン、チン、チン……  
時計が最後の九ツ目を打ち終るや否や、お父さんはガタリと大きな音をたて、立上つて『さア、アルワア、九時になつた！』と、云ひます。エヂソンは、そのお父さん

の『さア、九時だよ』と云ふ聲を聞くと、身體中に冷水を浴びせかけられたやうな氣持がしました。

『お父さん、もう少し……これ！』

エヂソンは、なまけない聲を出して、お願ひするのでした。併し、お父さんは、何んとも答へずに、エヂソンの傍へ近寄つて来て、ふツと鐵燭を吹き消してしまひます。眞暗になつた室には、たゞ蠟臭い匂ひが鼻を打つばかりでした。エヂソンは仕方なく、本を抱えて、自分の寢床に潜りこまねばなりません

でした。  
ですから、エヂソンは折角電信機械をこしらへても、充分にそれを試して見る事が出来ません。これにはエヂソンもつづくづ困つて、なんとかい、工夫は無いかと考へました。

たうとう終ひに、エヂソンは、素的な名案を思ひつきました。  
或る晩の事です。エヂソンは、何時もより一寸遅く、停車場から歸つて来ました。

『やア、お歸り、アル。今日は少し遅いぢやないか。』  
お父さんは見るなり聲をかけた。

『え、歸りにハリイ君の所に寄つてゐたもんですから、遅くなつてしまひました。』

『さうか。それならい、けど……』

暫くしてから、お父さんは又云ひました。  
『それから、アル。今日の新聞は？』

すると、エヂソンは如何にも困つたやうな顔をして、  
『それに就いて、弱つた事が出来たんです。歸りにハリイ君の所に寄りましたら、ハリイ君のお父さんが、一寸今日の新聞を貸して置いてくれつて云ふんです。だから僕、置いて来ました。』

『さうか。ちや仕方ない、明日讀む事にして……だが、あ、やつて、毎日讀んでゐると、新聞の無いのは何んだか物足りないやうな氣がするね……』  
お父さんはかう云つて笑ひました。  
その言葉を待ち構へてゐたやうに、エヂソン

は、  
『ちやアお父さん、い、事がありますよ！ハリイ君と僕ん所には、電信が、つてゐるでせう。だから一ツ、電信で今日の出来事を聞いて見ませう。』

『電信で？ そんな事が出来るかい？』  
『出来ませうとも！ その爲の電信ぢやありませんか。お父さん、見てゐて下さい。』  
エヂソンは、顔色が輝やかしながら、早速電信機械を動かしました。

間もなく、カタ／＼、カタ／＼と音かしてハリイの所から電信が、つて来ました。  
『お父さん、これがモールス信號つて云ふんです。』

エヂソンは得意さうにかう云つて、その記號を普通の文章に直して、父親に渡しました。  
『うむ、なかくよく出来たものぢやな。なんだと、『ユーロン驛附近で、貨車の覆置』ぢやと……ふむ……』  
お父さんは、眼鏡をかけて、讀み始めました。ハリイの所からは、後から／＼と報知



を返つて来ます。エヂソンの方からも、いろんな通信をしました。  
『成功々々。お父さんは上機嫌です。もう九時半になつてゐるのに、未だ寝るとは云ひません。』

こんな事も云つてやりました。  
もちろん、エヂソンの作つた小さな機械ですから、新聞の詳しい記事などは、とても傳へられません。エヂソンは前以つて、その日の主な出来事を略記して置いたのでした。

『アル、お前の電信機械も、馬鹿にしたものぢやないね。』

お父さんは、かう云つて、何時にない御機嫌でありました。こんな態様で、すっかり通信の終つたのは、かれこれ十二時近くでありました。

『おや、これは大層だ！ オツカリ寝るのを忘れてしまつた。早起き早寝は健康の基さア、アル。寝ろんだ。』

お父さんはかう云つて、急に慌てたやうにエヂソンを追ひたつてゐるのでした。

と云ふ事になりました。

エヂソンは大さう喜こんで、毎晩、蠟燭の光りを頼りに、物理や化学の書物を讀みました。そして、後には、世界に名高い發明家になつたのです。

よく、入々は、

『エヂソンは天才だから、あんなエライ發明が出来たのだ……』

と云ひます。併し前月號でお話ししました通り、エヂソンは決して、生れつきから、ズバ抜けて相巧だつたのではないのです。たゞ両親から受けた丈夫な身體と、どんな困難にも屈しない勇猛な精神とをもつて、一歩一歩と道を進んで行つたのです。エヂソン自身の言葉を借りて云ひますと、



エヂソンは、それから後、二三度新聞を忘れて来て、その毎日に、電信機械を試す事が出来ました。エヂソンが、こんな謀を使つて、人を欺したりする事は、決していふ事ではありません。眞似ては不可ない事です。私が、この事を此處へ書きましたのは、決して、『目的を達するためには、どんな事をしたつて構はない……』と云ふ意味ではありません。たゞ、エヂソンが、どんなに物事に熱中しやすい心を持つてゐたか、と云ふ事をお知らせしようと思つたのです。エヂソンの熱心さは、決して羈屑を燃したやうな一時的の物ではありませんでした。揃きあげた餅のやうな、粘り強さを持つてゐました。

『我れに、寝食を忘るゝほどの大事業を興へよ。』

と、云つた人があります。

この格言は、一面に於いて、我々が物事に對しての不甲斐なき、意氣地なきを、のこりなく表はしてゐます。大事業は幾らでもあり

『天才とは、よく努力し得る者の事である。』  
と云ふ事になります。  
大體では、エヂソンが今までの苦しい生活を終つて、始めて電信機と電燈の發明を完成し、全世界を驚かしたお話をいたしませう。(つゞく)



ます。たゞ、それに對して熱中するだけの強い心が、我々には缺けてゐるのです。  
『恰度、ブルドックのやうに、或る一つの物に嚙りついたら、もうどんな事があつても離れない。手を切られても、足を切られても、首を切られても離れない。』  
私は、かう云ふ強い心が欲しくて堪りません。

それから後、エヂソンは、毎日のやうにお父さんに向つて、  
『どうか、夜、もう少し勉強させて下さい。』  
と云つてお願ひしました。

初めの内、お父さんは中々お許しになりませんでした。併し、後には、エヂソンの身體が非常に丈夫であつて、夜遅くまで勉強してゐても決して身體を悪くしないと云ふ事が分つたので、  
『では、十二時まで勉強してよろしい。』



# 美しい菓子箱

水谷まさる

岩岡とも枝畫



ハリイ、ヤママラ……  
 彼はもう四十年もアメリカにゐる。髪にはたくさん白髪ができて、顔には皺が深くきざまれた。還ましかつた筋肉は、すっかりゆるんで、歩く足どりさへ、ともするとよろけ勝ちである。彼はもう六十を

三つ四つ越してゐた。  
 彼は日本人である。然し、日本のことはほとんど忘れてしまつた。  
 日本を出るまでに過した少年時代のこと、まるで前の世のことであるやうに、記憶のなかでぼやけてしまつた。  
 然し、彼はべつに日本のことを思ひ出す必要もなかつた。なぜなら、日本には血のつづいた人は一人もゐないからである。

と云つて、アメリカにだつて血のつづいてゐる人は、一人だつてゐやしない。彼はほんとうの一人ぼつちである。

若い頃は、身體一つを資本にして、アラスカあたりへ出稼ぎをして、かなり財布のふくれたこともあつたが、好きな酒に身をもち崩して、たうとう老年になつても樂なその日が送れなかつた。

かてて加へて、十年前に軽い中風を病つたので、めつさり衰へてしまつた。そして、日傭ひに出ることさへできなくなつた。

ただ、彼は唄が上手であつた。四十年の間には、アメリカでも、いろいろその時々、流行歌が唄はれたが、彼はそれをよく覚えてゐて、踊り場や、秘密な地下室の酒場などに行つては唄ふのであつた。そして、わづかばかりの錢を貰つて、どうやら日を暮してゐたのであつた。  
 けれど、唄が上手だからと云つても、べつにみんな

なから、やんやと喝采されるほどのものではなく、「おい、おい、ハリイ、古ぼけた蓄音機みたいな唄は聞きたかないんだ。さあ、さあ、邪魔つけどだから出て行つてくれ！」などと、氣障な若いヤンキイから、にべもなく追ひ立てられるやうなことも度々あつた。

さて、それは初夏のことであつた。

ハリイの身のうへには、いい日がめぐつて來なかつた。來る日も來る日も、たいした貰ひがなく、ズボンの隠袋はいつも軽かつた。けれど、なにしろ時候がいいので、屋根裏の安宿でなくても、公園の片隅のベンチのうへで、夜を明かすことができた。それだけは、ハリイにとつて好都合であつた。いくら安宿だと云つても、宿賃はかかるから、それだけが助かるわけである。

ある夜、ハリイがベンチに腰をかけて、腕組みをしながら、考へこんでゐると、どこか近くで、しき



りに呻き聲が聞えて来た。

ハリイは、「おや！」と思つて、聲のする方を、月明りで透かしてみた。けれど、正體はわからない。そこで、彼は立ちあがつて、よろめきながら、近づいて行つた。

扁杉の蔭に、黒いものがうごめいてゐる。それが呻き聲をたててゐるといふことが、すぐにわかつたので、彼は扁杉の枝を押し分けて進んだ。

見ると、それは子供である。

「おい、奴さん、どうしたんだ？」

「お腹が痛いんだよう……」

その子供は、半分泣き聲で云つた。そして、草原をころがりまはつた。

ハリイは、いつたいが心のやさしい男である。目の前に、苦しみ悩んでゐる子供を見ると、自分のことのやうに同情するのであつた。

「よし、よし、ちつと我慢せよ。今、薬を買つて来

てやるからな。」

さう云ひながらも、ハリイはズボンの隠袋に手を入れて、指先で錢をいちぢりながら、いくらあつたかなと數へてゐた。どうやら、薬は買へさうなので、すぐに、ぎこぎこした歩きつきで、その場を立ち去つた。

十五分とたたぬうちに、ハリイは、薬屋から引き返して来た。アイスクリームを盛る蝶引きの紙のコップを貰つて来ることも、忘れなかつた。彼はそのコップに公園の水飲み場の水を汲んで、薬といつしよに、さつきの子供にさし出して云つた。

「さあ、お薬だ！」

子供はすつかり、疲れてゐた。腹痛と戦つて、もう呻き聲も出ないらしく、身體を弓なりに曲げて、うつ伏すやうに坐つてゐた。けれど、ハリイの聲を聞くと、頭をあげて、

「ありが……たう……」と云つて、この見知らぬ人



の救ひを感謝しながら、水といつしよに薬を飲みく

だした。

「すぐ、なほるぞ。もう大丈夫だ！」

ハリイは、子供のそばに坐つて、顔を覗き込みながらさう云つた。

二

なるほど、ハリイの言葉通りに、ぐんぐん薬の効目が表はれて、子供は元氣になつた。

「おぢいさんがゐなかつたら、ぼくは死んでたかも知れないねえ。」

子供は、ハリイの手を取つて、心からのお禮を述べた。

ハリイは、やくざな、老人の自分が、かうして人を助けることができたので、すつかり満足してゐた。おまけに、助けた相手が、純真な氣持で、ひたすら感謝をしてくれるので、なんとも云へない愉快を感じ



じてゐた。だから、やがてその子供が、  
「おちいさん！ お薬の代を取つて下さいよ！」と  
云つた時も、

「いいんだよ、いいんだよ。」と、手を振つてそれを  
制めた。けれど、ほんとうに隠袋の底をはいでし  
まつて、一仙の銅貨も残つてゐないのであつた。  
それがまた、子供を驚かしたのである。

「この人は、なんな立派な人だらう！」

子供はさう思つて、目をばちばちさせた。けれど、  
どう見直しても、裕福らしくない。服もよれよれだ  
し、帽子もひどい。公園をホテルにしてゐる浮浪漢  
らしい容子である。それなのに、薬代はいらぬと云  
ふ。夜おそく薬屋へ駆けつけてくれて、そのおかげ  
で癒つたのだから、法外の値段を吹つかけてられても  
仕方がないとあきらめてゐたのに、……と考へて來  
ると、この人こそもしかすると、語に聞いてゐた天  
使ぢやないかしら？ だが、それにしても、日本人

の老人に、假りの姿を現すといふのもおかしい……  
かうして、子供の心は、すつかりハリイに惹きつ  
けられ、ハリイを慕つた。

「ぼくね、今日はよけい新聞が賣れたから、ハツト  
ドッグを二つ食べて、アイスクリームを飲んで、そ  
れから砂糖菓子をたくさん食べたの……さうしたら  
急にお腹が痛くなつてね……」

子供の言葉には、すこしも、よそよそしいところが  
なかつた。そして、そんなことをきつかけに、子供  
は身のうへ話を初めた。それに依ると、子供はトム  
と云ふ名前で十四歳。もとは西部にゐたのだが、繼  
母にいちめられたので、

「ようし！ 今に見ろ！ 偉くなつてやるから……」  
と云ふやうな大望を抱いて、家を飛び出して來たの  
であつた。それから新聞賣子となつて、艱難な生涯  
に入り、やつぱり公園をホテルにして、おぼつか  
ないその日暮しをやつてゐるといふのであつた。

ハリイは、聞いてゐるうちに、トムが可愛くて仕  
方がなかつた。なにもかも打ち明けて自分を慕つて  
くれるトムが、なんとなく肉身のやうにも思はれて  
來た。こんな氣持は、一人ぼつちのハリイには、ま  
つたく初めてである。ハリイは、妙に胸がわくわく  
して來た。そして、トムが話し終つた時、急にトム  
を抱き寄せて、そのよごれ返つた額に接吻をした。

その時、ハリイの頬を温かい涙が流れて、トムの  
顔にばたばたと落ちた。トムもそれが涙であること  
を知つた時、不思議な力が腕に籠つて來て、強く強  
くハリイを抱きすがり、すがりついた。そして、聲  
の伸びたハリイの頬へ、接吻をするのであつた。

「ね、ぼくのおちいさんになつて……」  
トムは、ハリイの耳のそばで、低かつたけれど、  
強くきつぱりと云つた。

「あ、なるとも、なるとも……だがな、このおちい  
さんはやくざ者だぞ。貧乏だぞ。なんにもできない

んだぞ。それでもいいかい？」

「そんなこと、どうでもいいや……」

「さうかい、ほんとうかい？」

「さうさ。ぼくは、おちいさんの氣持が好きなんだ。  
ほんとのこと云ふと、おちいさんが薬代を取らない  
と云つた時、ぼくはおちいさんのことを、天使かと  
思つたんだよ。」

「たいへんな天使だな……」

ハリイは、力なげに苦笑した。

「いいや、ほんとうだよ。」

トムは、目を輝かして云つた。  
やがて、ハリイの昔話も出た。トムが大きくな  
つた後の成功話も出た。草のうへに並んで坐つた二  
人は、まるで夜の更けるのを忘れて、夢中になつて  
話しつづけた。

月光は煙つて、静かに二人を照し、草の葉に明る  
く流れてゐた。あたりには甘い若葉の匂ひが、充ち



溢れてゐた。二人は、まるで、ここが公園の片隅で  
はなくて、天國の片隅であるやうな気がした。

三

次の日から、ハリイは唄をうたひに、トムは新聞  
を賣りに、めいめい別々になつたが、夜になると公  
園へ歸つて来て、顔を合せてゐた。そして、木蔭の  
草のうへに坐つて、いろんな話をしては、静かな眠  
りについた。だが、ハリイの収入はよくなかつた。  
トムの方がずつとよかつた。それで、トムは、ほと  
んど毎日のやうに、なにかしら、お土産を持つて歸  
つた。

初めのうちは、それを苦にもしなかつたが、だん  
だんハリイは、それを心苦しく思ひ出した。と云つ  
て、自分は買つて來たくとも、まるで買へないので  
ある。

ハリイは、トムの親切に堪えられなくなつて來た。



やさしくされればされるほど、妙に心が重く沈んで  
しまふ。

六六

「おちいさん、どうかしやしない？ この頃はすこ  
し顔色がわるいよ。」

トムが心配して尋ねると、

「いや、どうもしやしないよ。」

ハリイは眉をしかめてしまふ。

トムは、困つたものだ、きつと病氣にちがひない  
と思つた。

だが、ある晩、ハリイは、どうしたのか、すばら  
しく立派な菓子箱を持つて歸つた。

「さあ、トム、お土産だよ。今日はね、思ひがけな  
いところで、たくさんお錢を貰つたんだよ。」

さう云ふハリイの顔は、ほんとうに、うれしさう  
であつた。

「よかつたね、おちいさん！」

トムは、目を光らして、箱に見入つた。

「これ、チョコレートだろ？」

「さうだよ。さあ、うんと食べるがいい。」

「ありがたう！」

トムは、おそるおそる箱の蓋を取つた。なかには  
銀紙や金紙に包まれたチョコレートが、行儀よく並  
んでゐた。

「すてきだ！」

トムは、ほんとうにうれしさうであつた。そして、  
舌なめずりをした。

「ちや、食べるよ。」

その一つをとつて、トムはおいしさうに食べた。

目を細くして、びちやびちやと舌の音を立てて……

だが、その時、いつ忍び寄つてゐたのか、一人の  
男がふいに現れて、

「こらつ！」と云つて、ハリイの腕を捕へた。それ  
は、短かい棒を持った巡査であつた。

「どうも済みません……！」



ハリイの聲はふるえてゐた。  
トムは、びつくりして、この異常な有様を見あげてゐた。

二三の間答の末に、ハリイは、自分がたしかにこの菓子箱を盗んだことを白状した。

「とにかく、警察へ来い！ 餘罪についても調べなくちやならない！」

ハリイは、その時、トムに手をさし出した。そして、力をこめてトムの手を握りしめながら、

「わたしのことは忘れておくれ！ だが、わたしが生れて初めて、この菓子箱一つを盗んだことだけは、お前が、よく知つてゐてくれるね！」

と云つた。

トムは、その言葉で、ハリイが自分のために、自分を喜ばせようがために、盗みをしたことを、はつきりと知つた。

「わかつてます。わかつてます。おちいさんは、わ

たしにはやつぱり天使です！」

さう叫びながら、トムは涙を流してゐた。

トムとしては、ハリイのいぢらしい氣持（もちろん正しくはないであらうが）に、ほんとうの肉身の愛を感じたのであつた。

「さあ、早く来い！」

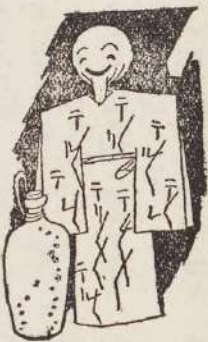
調査の手にひかれて行つたハリイの、後姿は哀れであつた。

よろめく足どり……うなだれた首……

トムは、草のなかに顔を伏せて、いつまでも泣きじやくつた。

菓子箱は調査が、抱へて行つてしまつたので、影はなかつた。ただ、トムがむいたチョコレート包装紙の、一枚の銀紙が草のうへに光つてゐた。

(をばり)



# てりく坊

西川喜平

水島 爾 保 布 畫

梅雨になつて、毎日ジメ／＼降りつゞいてゐる雨が、中々やみま

せんでした。  
降つたり、晴れたりするのだが、いつもの、梅雨時の空なのに、今年はどうしたのか、この一と月ばかりは、少しのはれ間もなく、降りつゞいてゐるので、川は水が出て、橋が流れたり、堤がくづれたりして、折角に植えつけた、稲の苗が流れると云ふので、何處の村も大騒ぎになりました。

そこで、雨のやむい、工風はないかと、村中の人が集つて、相談をしました。

「こんなに降りつゞくのは、これまでにないことだ。ひでりなれば雨乞ひをするのだが、雨をやませるのは、むづかしい事だ。」

と大勢で、いろ／＼考へてゐますと、その中の一人が、

「いゝことを思ひついた。あのてりく坊主を、村中で一軒に一つづゝこしらへて、雨のやんで、

いゝ天氣になるやうに、お祈りをしてはどうだらう。」と、云ひました。

これを聞いた村中の人は、「ナルホドこれはいゝ考へだ。わけもない事だ。早速てりく坊主をこしらへやう。」

と、村中の人達は、紙でてりてり坊主をこしらへました。

てりく坊主の大きいのや、小さいのが、村中の家の軒先に、ズラリ／＼と吊り下げられました。



そこで、村中の人は、氣をそろへて、

「てりく坊主さま、どうぞい、お天氣になりますやうにお願ひいたします。このお願ひをお聞き下さいませすれば、お禮には澤山お酒をさし上げます。」と、一生懸命にお祈りをして願ひました。

スルトその日の中に、雨がパツタリやんで、雲の間から、太陽の光りが、ウスクさしたので、サア村中の人は大變な騒ぎで、

「雨がやんだ。」  
「天氣になるぞ。」  
「ソレ日がさした。」

と、まるで氣が狂つたやうに、躍り上つて喜びました。

そこで村中の人はお酒を、てり

てり坊主の頭からかけて、お禮を云つて、川へ流しました。

その中にいつまでも、軒先にてりく坊主が、ブラリ〜と吊り下げられてゐる家がありました。

それは、村中で名代の權十と云ふ男の家でありました。

權十の名代になつたのは、酒好きの上になまけ者なので、隣り村までも、評判のわるい男でした。

村の者は、權十に向つて、  
「權十さん、お前の家の、てりてり坊主さまはどうしたのだ。うつちやつてをくと罰があたるせ。」と云ひますと、權十は平氣な顔で、

「ナニ罰などあたるものか、てりてり坊主だつて、紙でこしらへた

人形だ。」

「ソナことを云つて、このあひだは、一生懸命におがんでゐたではないか。」

「あの時は、酒がなくなつても、水が出て買ひに行くことも出来ないので、早く水が引くやうにと、おがんだのだ。ところが、い、天氣になつて見ると、紙の人形に、酒を飲ませるのは勿體ないと、てりく坊主の代りに俺が飲んでしまつた。」

「勿體ないとはお前のことだ、てりく坊主さまをだました罰でおた〜りがあるぞ。」

「ナニかまふものか、てりく坊主には酒の代りに、水でも飲ませてをけば澤山だ。」

と云つて、村の人の云ふことを取り合ひませんでした。

それから幾日か、權十の家のりく〜としながら、權十の酒を飲んでゐるのを見てゐました。



てりく坊主は、軒の下へつり下げられて、風の吹くたびに、フラ

梅雨が明けてから、間もなく、夏の土用になりました。

今まで降りつゞいたせいとか、今度はまた、雨が降らなくなつて、毎日〜空を見ても、太陽がキラキラ光るばかりで、雲の影も見えませんが、田の水は干しあがつて、井戸や川の水も涸れさうになり、田や畑のものはしをれて枯れかゝりました。

また村中の心配はありません。このまゝ幾日も過ぎたならば、田畑のものはとれなくなり、大變な事になると、村中で相談をして、大勢で、雨乞ひに出かけることになりました。

そこで村中の人がそろつて、古くから龍が棲んでゐると、云ひ傳へられてゐる、山の上の池へ雨乞ひのお祈りをしに行きました。



権十も、大勢と一緒に山へ登りましたが、腰に酒樽を下げて、酒を飲みながら行きました。権十は酒に酔って、いゝ心持ちになつて、ブラ／＼行く中に、いつか村の大勢と放れて、一人きりになりました。権十は、もう樽の酒も飲みつくして、咽喉が渴いたので、水でも飲みたいと、四邊を見ると、いつ道を間違へたか、今までまるで見たこともない、山奥へ来たことに気がつきました。見渡すかぎり、木も草もない岩山で、見上げるばかりの大きな岩が、前にも、後にも立つてゐて、その形が鬼のやうなものあれば、大入道のやうなものもあり、それが今にも動き出しさうに見えるので

権十は慄へ出しました。それに、あたりの岩へ、カンカン照りつける太陽の光が、キラキラとして、目も眩むばかりでした。「コレハ大變な所へ来た。この山の中は、こんな恐ろしい所があるとは、知らなかつた。はやく歸らう。」と、元来た路へ行かうとしたが、今までなんともなかつたのが、急に頭から照りつける日は笠をとほして、身體は焼けるやうになり、踏んで行く道の、岩や石も熱く焼けて、草鞋も焦げつくばかりなので、権十はもう一と足も動けなくなりました。「ア、情ないことになつた。考へて見ると、これはてり／＼坊主さまの罰かも知れない。このあひだ

村の者が、今にてり／＼坊主さまの、おたゞりがあるぞと云つたがその通りだ、てり／＼坊主さま、どうぞ御勘辨を願ひます。これから家へ歸りまして、お約束の通りお酒を澤山にさし上げます。」と、手を合せて、おがんでおました。スルト、頭の上で、雷の鳴るやうな恐ろしい音がして熱い／＼風が吹いて来たので、権十は驚いて見ると、前に立つてゐる、大入道のやうな岩に、タワツと二つの眼が開いて、ギラ、ギラツと光つて睨まれたので、アツと云つて逃げやうとするトタン、大きな口が、バクツと開いて、その口から、火のやうな息を、フツツと吹きかけられたので、権十は頭がぐら／＼



として、倒れてしまひました。やがて権十は気がついて見るとそこには、大きな岩もなく、木の生ひ茂つてゐる元の山道でありました。

古い傳説に、常陸の國の深山に「日和坊」と云ふものがゐて、雨の時には姿を見せず、晴れた天氣の日に、現はれると云ふ事があります。また支那には「早母」と云ふ神があつて、年中ひでりをつゞかせやうとしてゐると云ふ話もあります。昔からてり／＼坊主(またてり／＼坊主)と云つて、紙でこしらへた人形に、晴れを祈るのもこれらの傳説から、出来たのではないかと思はれます。(をばり)





童謡

野口雨情選

陽の光り

風にのり  
飛んですべつて  
遊んでる  
五月 六月  
初夏の  
空はゆらゆら

河鹿なく夜

逸見 子鳩

コロリ河鹿の  
なく夜さは

ホレ なく夜さは

石もほんろり

白いとよ

ホレ 白いとよ  
コロリ河鹿の

草刈りお馬

村山俊太郎

かつぼく お馬

朝明け お馬

この橋 かつぼかつぼ

お渡り お馬

草刈り お馬

つゆぬれ お馬

此の橋 渡つて  
かつぼく おいで

竹の子

上田 弘一 (東京)

おやぶで  
竹の子生れたよ

セッセッセ サラリコセ

向ふ通るは

どこの子さ

おやぶへ竹の子

みに行く子

まい／＼つぶろが

遊んでたら

雀の子供に

だまつてな

セッセッセ サラリコセ

つのだして  
こつちみて怒るから

暗い藪のふくろ

土屋 静文 (岐阜)

お背戸の竹藪

暗い藪

今夜もふくろが

ほうほうほう

お背戸の竹藪

暗い藪

毎晩ふくろが

ほうほうほう

川から

石倉 正雄 (東京)

川から

水を

汲んできて

青い  
繪の具を

とかしたら

野山が

青く

なりました

松

野村 滋 (愛知)

竝木の松は

さびしから

夜になつても

一人です

風がふいても

一人です

雨がふつても

一人です

竝木の松はさびしから

なせなせかすむ

うーすい雲が

流れるからさ

おぼろお月さん

あらあら消えた

黒い雲が

流れたからさ

仔馬

柳瀬まさし (和歌山)

ねんね

ねむの花は

赤い花よ

仔馬は窓から

ながめてる

ねんね

ねむの花は

ねむの花は



おぼろお月さん  
笠原 椿火 (東京)



ねむる花よ  
仔馬は母あちやん  
待つてゐる

西瓜

武田 幸一 (福岡)

西瓜島の  
ころ／＼西瓜  
お月ながめて  
ころ／＼ねてる  
西瓜ころ／＼  
いつまでねてる  
葉をかぶつて  
朝までねてる  
明けりや島の  
ころ／＼西瓜  
露でお顔を

洗うて起さる

梅に鶯

吉川 行雄 (山梨)

梅に鶯  
啼いて見な  
ホーホ ホケキヨとナ  
ホーホ ホケキヨとナ  
あつちの小枝で  
啼いて来ちや  
こつちの小枝で  
啼いて見な  
梅に鶯  
夢を見な  
ホーホ ホケキヨとナ  
ホーホ ホケキヨとナ  
あつちの小枝で

啼いて来ちや  
こつちの小枝で  
夢を見な

雨の日

石川 雪花 (神奈川)

親鳩子鳩  
傘貸そか  
お寺の屋根に  
雨が降る  
ぼつぼつほと  
飛んどいで  
親子つれづれ  
飛んどいで  
親鳩子鳩  
傘貸そか  
お寺の屋根に

雨が降る

お寺の塀

酒井 朗 (兵庫)

長い一丁のお寺の塀は  
白い壁だよ  
日がよくあたるよ  
黒い泥あと並んでゐるよ  
あれはゴムまり  
ぶつけたあとだよ  
今日も一人で  
ゴムまり投げて  
くろい投げあと  
九つつけたよ  
西瓜の晝寝  
小山えうじ (神奈川)  
西瓜は畑で

ごろりとお晝寝

お晝寝よ

ごろり轉りや

枕がはづれます

はづれますよ

西瓜は何時まで

ごろりとお晝寝

お晝寝よ

ごろり寝返りや

お月様出ます

出ますよ

いたちご

ほうせん花

村山俊太郎

お庭のほうせん花は  
いつ實がはせる

はせろ はせろよ

ちよろりこ いたち

ちよろり ちよろりこ

ほうせん花は はせた

はせたその實を

いたちが 拾つた

拾つて いたちは

ちよろりちよろりにげた

にげて いたちは

子供とたべた

ほほけた

たんぼぼ

土屋 静文 (岐阜)

たんぼぼ

ほほけた

ホウホウホウ

たんぼの  
あせ道

お寺の塀



ホウホウホウ  
ほほけた

坊主の

ホウホウホウ

虹の橋

萩原 輝星 (東京)

夕立からりと  
霽れました  
霽れてみ空に  
虹の橋  
いつの間にやら  
知らぬ間に  
誰がかけたや  
渡るやら  
あれ／＼鴉か  
渡ります  
山から山へと  
渡ります





# 捨てる神があれば

久米正雄

岡本歸一畫

折柄、秋。

さうでなくとも、心わびしい秋。まして捨てられた身には、ひとしほ物のあはれの泌む秋。しかも、はや夕暮です。日の光がよわくと薄れると、ざわくと風立ちました。

その聲を聞くと、なせともなく心せかれて、いつまで石の上に腰をかけて項垂れてもゐられませんでした。

雅道はイラ／＼と立ち上つて、どこへ行くといふ的もなしに、もと来た方へ、フラー／＼と歩き出しました。心のうちは、懐にある僅かばかりの金を路用にして、何百里と隔ててゐる京の都へはどうして歸つたらよからうと、そのことばかりが往來してゐました。その合間には、今宵の宿を早くとりたいたいものだ、最後まで、自分を見捨てなかつた二人の家來に、寒い思ひ、

四



ひもじい思ひをさせてはならぬ、と考へられました。

いつか主従三人は、浅い小川のふちに來て立つてゐました。きれいな水です。雅道は、ふと足が冷してみたくなりました。足を冷すと、心が冷えてくれるやうな気がしたからです。

快い冷たさが、踝のあたりまで浸しました。ヒタ／＼とそこらを、手に持つてゐる鞭の尖で、いたづらに小粒な砂を突つき、歩いてゐました。

すると、一ヶ所、やはらかい砂の感じが、そこでだけ堅くトンと來ました。人情、思はず鞭の





尖に力を入れると、ガツチリと堅い手ごたへ。目を近づけて見ると、瓶らしい。手で、砂を掻きわけると、ハツキリ瓶の口があらはれました

「フン、秋の夕暮に、人の骨か。」

縁起でもない、そこを離れようとした時、ふと明けてみる氣になつて、蓋を拂ふと、意外も意外、山吹色の黄金が、ピツシリ一杯に目を射ました。

「あ！」と、思はず驚嘆の聲が喉を低く洩れました。ハツとして、振り返へつて見ると、幸ひ従者は二人とも氣がつかぬらしい。

急いで、こつそり衣の袖を絶つと、雅道は、音のしないやうに、瓶の黄金をすつかりそれに包んで、シツカリと腹へ結び附けました。

勘定をする暇がないので、ハツキリとは分りませんが、瓶の大きさから云つても、まづ十年やそこらは食ふに困らぬぐらゐの金高があつたやうに雅道は心竊に當りを附けました。

「なんにしても、有り難いことだ。あのまま、陸奥守に附いて下向して、二年三年とままつてゐたところで、とてもこれだけの財産の出来よう譯がない。全く人の運といふものぐらゐ分らぬものはないなあ。」

俄に雅道は、元氣が湧いて来るのを感じました。が、氣取られぬやうに、前と變らぬ面持を装つて、ヒタ／＼と水をわたり返して、従者の方へ近附きました。

「お前達、わしにもやつといふ思案が附いたから、もう案じてくれずともよいぞ。わしとして



も、この有様で、おめ／＼と京へは歸りたうない。今、あれこれと昔友達を數へて行くうちに、越後守が、昔心易うしてゐた貞重殿であることを思ひ出した。越後なら、ここから京へ戻るよりは道程も稍近い。今日は最早暮れ初めたこと故、まづ程近いところに宿を求めて、明日から日數をかさねて越後へわたり、貞重殿の力を借りて何とか身の振り方を考へることにしようではないか。」

それを聞くと、

「よい時に、よいお友達をお思ひ出しになりました。が、越後とはなあ……。」と云ひさして、

一人の従者がもう一人の従者を顧みると、

「選りに選つて、遠い國にお友達をお持ちでござりますな。もう少し近いところに、お近附はゐられませぬか。」

「わしもそれを思はぬではないが、生憎なことに、近い國には知るべがトント無しぢや。」

「いたし方がござりませぬ。どこへなりと、お供いたしまする。」

五

途中的ことは略します。

雅道が、越後守の館をたづねると、貞重は快く一間へ通して、





「あなたは、藤原隆資について、陸奥へくだると聞いてゐたが、どうして今頃こんなところへ來られたのですか。」と、まづ聞きました。

「いや、それには實に口惜しい話があるのです。まあ聞いて下さい——」

雅道は、それからそれへと今までのことを話して聞かせました。聞き終つた貞重は、

「實に驚いたな。隆資はそんなに腹黒い男かね。」と、同情を表してくれました。「まあ兎に角暫く私のところに入らつしやい。そのうちには、何とかまた仕返しの出來る時も來るでせう。」

「ありがたう。——どうか暫く面倒を見て下さい。」

「しかし、これは私事だが、あなたが陸奥守の一の家來でないといふことになる、私には大當てちがひが生じて來た。」と、笑ひながら貞重が云ひました。

「大當てちがひ？」

「うん。」

「何だね。」

「實は、この國の海上二十里ばかりのところに、佐渡ヶ島といふ島があるのだ。その島から、金が出るといふ噂が昔からあるので、本當か嘘か、ためしに掘らしてみたいと思つてゐるのだ。が、私一人では、力が足りない。で、あなたにも金を出してもらつて、十分掘らしてみたいと思つてゐたのだ。——しかし、そんな譯では仕方がない。」と、心残りしく、そつと溜息を吐きました。



雅道は、少し笑みを含みながら聞いてゐましたが、  
「それは面白い思ひ附ではな  
いか。どのくらゐ金の要るこ  
とか知らないが、少しづらゐ  
なら、陸奥守の一の家來でな  
くなつたつて、私に出せない  
ことはない。一たい、どのく  
らゐ要るのですか。」

「多ければ多いほどいゝには  
違ひないが、さしあたり七八  
十兩もあれば澤山だと思ふ。」  
「そんなら喜んで出させても  
らふ。」

かう云つて、雅道は例の黄  
金の中から百兩だけ出して、  
貞重の前へ並べました。貞重  
の喜びはどんでなでしたらう。







こんなことから、二人の仲はますます親しくなつて行くばかりでした。雅道は、なまじひに隆資の一家來となつて陸奥の國へ下らなかつたことを、今は却つて喜んでゐるから。今は一の家來どころか、貞重の客分として手厚い持成を受けて、楽しい月日を送つてゐました。従つて、二人の従者達も一時の不幸が後の仕合せになつたと云つて喜んでゐました。ところが、運が向いて來ると、人間はどこまで幸福に恵まれるのでせう。貞重と二人で始めた佐渡の金掘りが、その後間もなくうまく當つて、金北山といふ山から、ザク／＼金が取れ出しました。

間もなく、貞重の任期が満ちて、京へ歸ることになりました。その時、雅道も一しよに、久々に都へ歸りました。

貞重は、すつかり金も出來たし、これを機会に、役人を辭する決心をしました。それを聞いた雅道は、

「あなたの後を、私に譲つて下さい。」と頼みました。

「譲るのは譯はないが、役人なんてものは、あなたのやうに金のあるもの、することぢやありませんよ。」

「え。でも、一生の思ひ出に、一度國守になつて見たいと思つてゐるんです。」

「さう、そんなら一度だけやつてごらん下さい。」

かういふ譯で、とう／＼雅道は、貞重の後釜になることになりました。

六

ここは、美濃國不破の關所。

櫻が満開です。その下を、陸奥から京へのはる藤原隆資の行列が、續いてゐます。

關所へかゝる、關所の役人が、例の關所切手を讀み上げます。それにつれて、行列の人数が一八一人通つて行きます。

「藤原隆資殿。」

「ハア。」

「通りませう。」

聲に應じて通る隆資の傍に、妻と娘とが引ッ添つて行きます。目敏くそれを見咎めた役人が、

「これ／＼、名を呼ばぬものは通つてはならぬ。」と目角を立てました。

しかし、隆資は落ち着き拂つて、

「いや、お通し下さるとも仔細はござらぬ。こちらは妻、こちらは娘。」

「いや、たとひ妻子であらうとも、許しを與へぬうちは、通ることなりません。お戻りなされい。」

止むなく妻と娘とは、不承不承に、もと來た方へ引き返しました。

「源家直殿。」

「ハア。」







困つてしまつて、  
 『では、關の長にお目通り致したい。』と申し入れました。  
 『暫くお待ち下さい。』  
 やがて、そこへ姿をあらはしたのは、隆資にとつては全く思ひ設けぬ雅道。隆資は、あつと目を見張りました。  
 これだけで、雅道にとつては、復讐は十分でした。で、何も云はずに、素直に隆資の云ふことを叶へて、妻子二人を通してやりました。



「通りませう。」  
 切手順に、行列の人々は次から次へと讀み上げられて、雑兵小者に至るまで、通つてしまひましたのに、かんじんの隆資の北の方と姫君とだけは、切手に名がないために通ることが叶ひませんでした。

隆資は國守の勢で掛け合つてみましたが、國の掟は曲げられぬと云つて突ッ放されました。國守ともあるものが、妻子の名を書き落すなどとは不注意千萬と思ふ方があるかも知れませんが、これは不注意ではなくて、國守の妻子は切手に名を書かずとも、通つても誰も咎めぬ習慣になつてゐました。それ故、習慣に従つて名を書かなかつたのでせう。で、隆資は、そのことも云つて争つて見ました。しかし、やつぱり掟の前には習慣はござらぬと撥ねつけられてしまひました。



家

鴨 (推薦)

東京河合英太郎

かけだせ かけだせ

家鴨の子  
田圃の畦路



細い路

もうもが来るぞよ

こはいぞよ

そら〜かけだせ

家鴨の子

押すなよ畦路や

細いぞよ

かけだせ かけだせ

家鴨の子

小 狐 (推薦)

大阪兼松竹夫

こんこん

一人子か 一人子か  
こんこん  
小山の小狐は  
こんこんないて  
夜をあかす 夜をあかす

虹の橋 (推薦)

朝鮮河野牧草

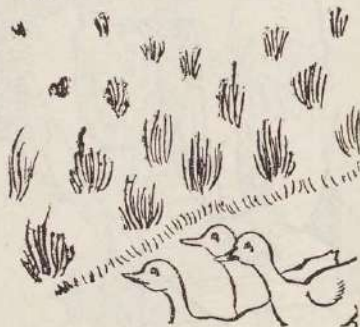
雨こんこやんで

虹の橋かゝつた

森から山へ

弓のよにかゝつた

家鴨



小山の小狐は

こんこんないて

日をくらす 日をくらす

こんこん

小山の小狐は

親のない子か



つんく／＼燕  
虹の橋渡れ

消えない中に  
急いで渡れ



雨こんこやんで  
虹の橋かゝつた

三日月さん (推薦)

高知植田良實

三日月さんよ

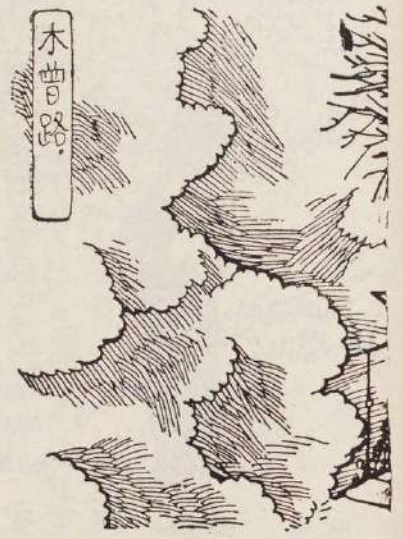
今晚は

うちの姉さんは ござうしてる

三日月さんよ

今晚は

町の工場は 遠いのよ



三日月さんよ  
夜なべです  
母さんしんみり 話します

三日月さんよ  
十二です

ひこりて汽車にも 乗れまする

木曾路 (推薦)

岐阜伊藤益平

釣り橋ゆする

ユサユサゆする

山道ボカボカ

つゝちが紅い

お馬がきたよ

山道きたよ

ユサユサゆられて

釣り橋わたれ



# 山へ歸る日

岡崎六郎

川上四郎畫



弓子ちゃんの生れた家は、乗鞍山の麓の谷合で、賑かな町へ行くには、峠を二つばかり越さねばなりませんでした。弓子ちゃんは、そんな山奥で、お父さまとお母さまと弟の定吉さんと四人で、静かに、楽しく暮して居りました。ところが、弓子ちゃんが七つの時でした。或る秋の日、三つになる弟の定吉さんを背負て裏の藪に、栗を拾ひに行つて居りますと、お母さんが、太さう蒼い顔をして



思せき  
きつて、  
向ふから  
飛んで來

「さあ、早く〜。お家へ歸りませう。お父さまやんが、お前にすぐ逢ひたいと仰るから。」

と云ふが早いか、弓子ちゃんの手を握つて、ぐんぐん無理やり引張つて、前に來た道を引返しました。

定吉さんは、弓子さんの背中で、驚いて泣き出しました。何が何やら、弓子ちゃんは、見當がつきませんでした。何が何やら、お母さまは、家へ着いた頃は、目を

せんでしたが、お母さまは、家へ着いた頃は、目を真赤にして、泣いておいでになりました。土間の處

には、よその小父ちゃんが、二三人棒のやうに突立つて、何やら、静に話し合つて居りました。弓子ちゃんは、奥へ、お母さまの後になつて隨いて行つて、

六疊の間の襖を開けますと、不思議ではありません

か、平常も丈夫なお父さまが、仰向けになつて、仕事着を着けた儘、布団の上に、寝て居られるのです。

「お父さまは、御病氣になられたのだ。」と弓子ちゃんは、はつと氣がつきました。枕元に弓子ちゃんは坐らせられて、お父さまの青い顔をじいつと見つめて居りますと、お母さまは膝を立て、お父さまの耳の處に口を寄せて「お父さん、お父さん」と夢を醒

ます様に呼びますと、今まで、すや〜と睡つて居りましたお父さまは、ぱつちり目を開いて、あたりを探す様な目差をされましたから、お母さまは、

「弓子が歸りました。弓子が、こゝに居るのが見えますか。」と柔しく訊ねますと、お父さまは、弓子ちゃんの顔をじつと、みつめましたから、弓子ちゃんは、

「お父さん！」

と呼びかけますと、お父さまは、唇を微かに動か

しになつて、ほつゑまねるのが見えました。やがて



お父さまは、お疲れになつたか、また元通り眼をつぶつてお了ひになりました。それから、二度と、目をお醒ましにはなりませんでした。

その後、弓子ちゃんのお家には、お父さまの姿は見當りませんでした。定吉さんとお母さんとの三人喜しは、それから始まりました。

お母さまは、お父さまが死なれてから、毎日、大根や、里芋や、人蔘の籠を背負つて町へ出かけて、それをいくらかの錢にしては、家へ急いで戻るのでした。弓子ちゃんはその留守中は、定吉さんをおんぶして、村の學校へ行くのでした。

學校のお友達は、誰とはなしに、弓子ちゃんのお父さまは、崖から落ちて死んだのだと云つて囃しました。弓子ちゃんはその噂を聞かたびに、くやしくて、獨りで花壇の前で泣くのでした。

お父さまが、亡くなつてから、一二年過ぎた秋のこと、お家の前に枝を一杯ひろげて居た二抱えもあ

九四  
る樫の木を、よその何處かの小父さんが来て斬り倒して持って行きました。その翌年、畑の柿の木の實は、み盛な、外の人が来て採って行きました。弓子ちゃんも、なんだか淋しくてなりませんでした。それから幾年か過ぎました。

弓子ちゃんが、五年生になつたばかりの頃、お母さまは、ある日、弓子ちゃんを町へ連れて行くことになりました。赤い脚絆をつけた可愛らしい弓子ちゃんとお母さまが二番目の峠に着いた頃は、丁度お晝になりましたから、松の根株に腰を下して、背負つて居た糞當を開きました。目の下には、清々しい田圃や畑が幾枚も續いて、遠く一杯に擴つて居りました。そして、遙か向ふに、虫の様に澤山の家が群つて見えました。製絲場の煙らしいものが幾本か天に上つて居りました。弓子ちゃんも、あまり美しい眺めでありましたから、  
「まあ、綺麗ッ。」と、思はず叫びました。すると、

側のお母さまは、向き直つて云ひました。

「弓子ちゃん。今度、あなたは、大人になるまで、あの町に住むやうになるのですよ。」

弓子ちゃんは、あまり、變つた事を急にきかされて、吃驚り致しましたが、考へて見ると、嬉しい様にも、悲しい様にも思ひました。懐しいお母さまや定吉さんに別れるのはつらいことでしたが、あんな賑かな町へ行くことは、楽しい様にも思ひました。でも矢つ張り、お母さまの許を離れることは、情ないことだと思つて、熱い涙が頬に傳はるのを感じました。

二

弓子ちゃんが奉公することになつた家は、町のお金持の酒屋でありました。白壁の酒倉は幾棟も並んで居りまして、大勢の若い衆が、鼻唄うたひながら威勢よく働いて居るのでした。そんな大勢の中へ、





いれられた弓子ちゃんは、初めは、大海の小舟の様に怖いと思ふ一方でありましたが、その内、だんだん人にも馴れて来て、賑やかなのが、却つて楽しく思ふ様になりました。弓子ちゃんのお役目は、照ちやんと云ふ、旦那さまの赤ん坊をお守りすることでした。ですから、弓子ちゃんが、赤ん坊をおんぶして、街に、子守唄を歌つて歩く姿を見受る様になつたのです。

弓子ちゃんにとつて、町へ来てから、一番不思議で、一番倦まない面白いことは、ラヂオを聴くことでした。御主人様の家には、十四と十二になる二人のお嬢さまが、居りましたから、お嬢様達と、お座敷で、青い目をしたお人形「だのニッソーン」赤とんぼの唄をラヂオで聴く時は、本當に有頂點になるのでした。また繪本を見せて頂いたり、お人形並べをしたりする時は、夢中になつて、淋しいお山のお家のことを忘れがちになりました。でも、獨りで

扱つて遊んだことが、ありくと眼に浮んで來るのです。

「弓や〜、遊んで居るのちやないのよ。こつちへ来ておむつをお洗ひ……」

弓子ちゃんは、はツとして背後を振り返ると、奥様が縁の上に立つて、自分を呼んで居るではありませんか。弓子ちゃん、すぐ、お嬢さま達の側から立ち上らねばなりませんでした。



それから、四五日たつて、或る日、赤ん坊の照ち

居る時、ふとすると、お山のことが思ひ出されて、お母さまや定吉さんの顔が、頭の中に影のやうに映つては消えたり致しました。そんな時は無精にお山のお家が戀しく思はれて、酒樽の蔭で、前垂に顔を埋めるのでした。さうすると、後から、肩を掴める大きな手がありました。

「やア、お弓ちゃんが、泣いて居るツ、あはツ〜。」と云つて荒々しく嘲ふ聲が聞えるのでした。

それは、酒造の若い衆でした。なぐさめてくれるどころか、そう云ふ調戲ひをされるとき、弓子ちゃん、心から勤めの辛いことが思はれ、たゞ「お母さん、お母さん。」と呼びかけて、肩に波打たせるのでした。

つゝじが、お庭の築山に咲く頃になると、お嬢さま達と、つゝじの花片を糸に繋いで遊びました。そんな時も、どうかすると、弓子ちゃんは、去年まで、故里の裏山に咲く紅い山つゝじを、弟の定吉さんと

やんを乳母車に乗せて、弓子ちゃんは、停車場の方へ遊びに行きました。美しく着飾つた人々が澤山、汽車に乗つたり下りたるすることが、どんなに珍しく面白いことでしたか、日の暮れるのも知らず、弓子ちゃんは、停車場の欄に凭りかゝつて、ぼんやり佇んで居りました。そして、赤ん坊が、乳を欲しがるときも忘れてしまひました。夕燕は、電信線の上をかすめて、南へ飛んでゆきました。

「あらツ、まあ、こんな處に居つたの。本當に探したわ、馬鹿ね。弓やは、こんなに晩くまで遊んで居るなんて、照ちやんが、泣いて居るんちやないの。ね。照ちやん、弓やは馬鹿、さあ、早くお乳を上げませうねい。」

そう云つて照ちやんを乳母車から抱き上げて居る奥様が、すぐ側に立つて居るではありませんか。弓子ちゃんの驚きと恐れとは、どんなであつたでせう。



奥様は、一體やさしい方でしたけれども、其の晩は家へ歸つても、こはい目をして見せました。

「お前は、夢を見てゐるのだから困るのね。お乳の時は屹度、歸つて来なくちやいけないのよ。」

弓子ちゃんは、黙つて疊をみて、坐つて居りました。奥様は、未だ言葉を續けました。

「わかつたの、わからないの？」

弓子ちゃんはうなづきました。

「わかつたら、氣をつけてね。今夜は、部屋へ下つてお休み。」

弓子ちゃんはその晩、煎餅のやうな布団の中に蟋蟀のやうに小さくくるまつて、寝て居ると、枕もとに、お母さまが、此方を向いて笑つてお出になります。

「あゝ、お母さままだ。お母さま！」

と呼びかけ様としたとたん、弓子ちゃんは夢から醒めたのでした。

んが、可愛いくてたまらなくなりました。そして誰よりも大事にしようと思ひました。やがて、夏休みが来て、田舎では一番楽しい干蘭盆が近づきました。すると或る日、弓子ちゃん宛に一本の手紙が配達されました。裏を見ると、なつかしいお母さまからの便りではありませんか。うれしくて踊る胸を押し鎮めて、封を手早く切つて見ますと

その後は、たつしやで働いて居ると思つて居ります。

わたしも定吉も無事ですから御安心下さい。

こんどのお盆は、亡くなられたお父さまの七年忌にあたりますから、奥様に二三日お暇を頂いて、歸つてお田なさい。定吉も、待つて居ります。では、身體が大切に。さようなら。

奥様に宜しく

母より

弓子さまへ

弓子ちゃん、この手紙を受取つてから、早くお

弓子ちゃんは、まだ小學校の五年生でしたから、前は、奥様のお許を貰つて、學校へ通ひました。

それでもお家の仕事忙しい時は、學校を休まなければなりません。それが何より辛いことでした。

翌日、先生に「昨日は、どうして休みましたか」と訊かれた時、どう答へて良いのかわかりませんでした。

外のお友達は、缺席をしても、お腹が痛いとか、風をひいたとかこそ申しますけれども、用があつて

休みましたと答へる人は、あまり有りませんでした。

或る日、弓子ちゃんは、悪いとは思ひましたが、あまり人前で、氣まりが悪いので、つい、先生の前で、

お腹が痛うございましたと答へて了つたのでした。

併し、二度と、嘘は申すまいと、後悔しました。

もうこちらの町へ来てから、大分日が経ちました。段々なれるにつれて、背にいつもおんぶして居る照ちや



如死



盆の来る日を、指折敷へて待つて居りました。後三日、翌日と云ふ日になつた時は仕事も手附かず、お母さまの事や、峠の道やが頭に浮んで、そは／＼して居るばかりでした。いよ／＼盆の十三日が来ました。今日は、久し振で田舎へ歸ることの出来る日です。思ひ切つて、朝起きをして、女中さんに髪をとかして貰ひました。やがて、美しい桃割が出来上りました。それから晴衣をつけました。鏡の前に立つて見ると、田舎から来た時とは、全く打つて變つて見違へる様に美しい娘さんになつて居るのに、自分もびつくりする程でした。奥様や女中さん達は、『まあ綺麗ですこと、お嫁さまのやうだわ。』なんて云つて下さいました。弓子ちゃんは、『ほんとうに私さうなつたのか知らん。』なんて、自分を疑つて見たりしました。奥様からは、定吉さんへお土産と云つて、まんじゅうの菓子袋を頂きました。もう用意が出来ました。手拭は四角に折つて、

帯にきちんと挟みました。お土産の入つた風呂敷は斜に背負つて、紅緒の下駄を履きました。『それ、扇子がない。扇子を持つておいで。』そう云つて奥様は、扇子を腰にさしてやりました。『洋傘は持つたね。ちや、忘れものはないね。』弓子ちゃんは、嬉しいやら恥かしいやら、變な顔になりました。『では、奥様、これから行つて参ります。』『道を遠へずに行くんですよ。』みんなは、店に立つて見送りしました。弓子ちゃんは、振り返つて二度お辭儀をした後は、背向きになりました。小さい背中に鼠のやうに風呂敷を背負つた姿が、だん／＼遠くなつて行きました。じり／＼照りつける夏の陽の下に、小さい赤い洋傘は、電信柱の下で、くる／＼輪を描いて居りました。

(をはり)



童謡

野口雨情選

(子供篇)

春の雨 (賞)

朝鮮 河野 青雨

しとしとふる雨  
春の雨  
あやめはさいて  
ぬれてゐる  
さくらはちつて

葉がでてる  
しとしと長雨  
春の雨

桑の若葉 (賞)

千葉 石塚 (高二) 正

きれいに晴れた  
雨上りの空  
すい／＼つばめも  
とんでゐる  
桑の若葉も竹の葉も  
風と一しよに  
ゆれてゐる  
僕は愉快に  
なつちやつて  
大きな聲で口ぶえを  
かいつばいふいて見た

冬の道 (賞)

前田 義照 (高二)

風が吹く度  
木の葉ががさり  
私が歩けば  
又がさり  
がさり／＼の  
日暮道  
一人ぼつちで  
行きました  
か／＼しこかへる  
埼玉 島村あさ子 (高四)

してました

かへるはげち／＼

どなたが

か／＼はだまつて

おこりがほ

その中大雨降つてきて

二人はけんくわを

やめました

山道

埼玉 原島 (高四)

昨日通つた  
山道は  
竹やぶ小やぶの  
さ／＼の中  
さびしい／＼  
やまの中



ひとりりでだまつて  
行きました

やぶのつり橋

北海道 谷  
(孝次  
十五才)

くものつり橋  
かけてある  
やぶからやぶへ  
かけてある  
くもがするする  
わたつてる  
僕もわたるか  
つり橋を  
僕がうっかり  
思つて見たが  
細くて細くて  
わたれない

風もないのに  
ゆれて居る  
これではだれでも  
わたれない  
やつぱりくもの  
つり橋か

つばめ

石川 刀禰  
(高成)

お空は広いよ誰ものす  
とんと燕の中がえり  
白いチョッキを空にむけ  
さかさにお日さん  
みつたつけ  
お空は広いよ誰ものす  
とんと燕の中がえり  
黒いお脊なを地にむけて

さかさにお家を  
みつたつけ  
お庭はせまいよ僕一人  
とんと燕の物語  
さかさにさかさに  
見たお日さん  
夕べの夢ににてゐたと  
お庭はせまいよ僕一人  
とんと燕の物語  
さかさにさかさに  
見た家は

朝鮮馬

朝鮮 山本 力

小鈴シャン／＼  
お馬のくびで

野みちとつとと  
朝鮮お馬  
煙がとんでく  
ほか／＼と  
白い着物に白い露  
長いきせるで  
ほか／＼と  
煙草すつてる  
おちいさん  
お馬にのつて  
とつとつと  
かへる  
かへるが  
鳴いた  
こゝろこゝろ

小川のふちで

こゝろこゝろ  
水をのみ／＼  
ないてゐた

ほたるの祭

埼玉 石渡  
(房吉  
尋五)

祭だ 祭だ  
山まつり  
ほう／＼ほたるの  
山まつり  
こちらでびつかり  
また一つ  
びつかりきへたり  
山祭

青葉の小舟

埼玉 清水富五郎  
(尋五)

さら／＼小川の流れ水  
小舟をそろつと流さうか  
大波小波で  
ゆれるでしよ  
大風小風で  
ゆれるでしよ  
青葉の小舟に石のせろ  
夕日をのせて  
流しませう

赤いビーズ

白いビーズ

鍋谷 將子 (新澤)  
みいちゃんからもらつた



赤と白のビーズ  
このビーズなんにしよ

はてな はてな  
みいちゃんの真似して

ゆびわをこさそう  
赤いビーズを  
まんなか  
白いビーズを  
そのわきに  
ぐるりを赤に  
しませうよ  
できたら  
ほんとに  
きれいだわ  
ねえちゃんの  
石のゆびわのやうだ  
まつと／＼  
こさそう  
ビーズをつないで  
こさそう





# 大石主税

三島霜川

羽鳥古山畫

【前回の梗概】元禄十四年三月十日、豊野内匠頭は、吉良上野介を傳つた爲め、江戸の愛宕下、田村右京大夫の邸で切腹をさせられました。そして、お家は隠岐（たやされ）お城はお上に召上げられて了ひました。内蔵助は、主税の知らないうちに、「復讐」の同盟を作りました。そして、家族一同、浪人になって、京洛の山科へ移りました。

内蔵助は、放蕩を始めました。そして、妻を離別して、但馬、豊岡の實家へ歸りました。主税だけは、父の許に殘つておりました。間もなく、父は、主税に、その本心を打明けた。そして、主税は始めて、「復讐」の「連鎖」に加へられました。

おひ〜「事をあげる日」が迫つて来ました。内蔵助は、一日も早く、江戸に下るやうにと、「同盟」の人々から迫られました。そこで、主税は、父よりも一足、先に江戸に下ることになりました。さうしてそれとなく、母のところへ「訣別」に行きました。

主税は「垣見左内」と名を懸えて、江戸名物の砂埃に、口のなかな、ジャリ〜させながら、敵の動靜を探つたりしてゐるうちに十二月十四日―討入の日がやつて来ました。

## 九、討入

いよいよ、討入の日が来ました。

「十四日には、本所、吉良の邸に、お茶の會がある。」と、大高源吾が、たしかに、それを突止めて来ました。しかも、吉良の邸の、そのお茶の會に行く、「茶の師匠」四方庵宗遍から、それを聞いて来たのです―これほど、確なことはない。

その前日から降出した雪―江戸には稀らしい大雪は、夜になつても、ドン〜降りつゞいておりました。その雪を踏分けて、吉田忠左衛門や原惣右衛門などが、四五人、「討入の打合せ」に、石町三丁目、小山屋彌兵衛の裏店へやつて来ました。そして、バサ〜と傘から雪を落す音が、いく度か、静に、門口に聞えました。

小野寺十内は、内蔵助父子と一緒に、この裏店にゐました。で、内蔵助を始め、五六人の重立った人

が、恰ど、「むじん」の參會でもしたやうに、気軽に、ヒン〜と、相談をつゞけました。しかし、もう、問題は、すべて、かんたんに、片づくやうな事ばかりになつてゐました。

主税は、潮田又之頭、近松勘六、大石潮左衛門等と一緒に、次の間で、消えかゝる炭火を見つめながら、黙りこくつてゐました。誰か、上野介に、一番槍をつけるか―といふやうなことを考へながら。

あくる朝、雪は、カラリと晴れました。その日は内匠頭の命日でした。

『御命日だぞ。泉岳寺へお參詣しよう。』

と、内蔵助は、討入のことなど、ケロッと忘れてゐるやうに、「朝のお早う」に顔を出した、主税に、さう云ひました。さうして、朝飯を済ますと、父子は、足駄をはいて、泉岳寺へ出かけました。

芝浦、品川の海は、あほ〜として、雪晴の日に輝いてゐました。近くには、白い鷗も浮いてゐまし



た。遠くには、房州の方の山も見えました。出船、入船の白帆の影も動いてゐました。

「一イ、二ウ、三イ、四ウ……」

と、主税は、泉岳寺の石段を登る時に、鶴の数をかぞえて見るほど、無邪氣で、のんきでした。

諸士のうちにも、内匠頭の募参をする者が、たくさんありました。そして、大がいの者は「急に、上方へ行く」と、云つて、めい／＼、家財道具を買つて、家賃米代を拂つたりして、それ／＼に、きれいに、いろ／＼の始末をつけました。さうして、日暮頃から、めい／＼「討入装束」の風呂敷包だけを持つて、家を出て、本所・林町の堀部安兵衛の宅と、相生町の前原爲助の宅と、それから、兩國矢の倉の堀部彌兵衛との宅をさして、集つて行きました。内蔵助は、小野寺十内と、二人だけ、駕籠に乗つて、まづ、堀部彌兵衛のところへ行きました。主税は、又之亟、勘六、瀬左衛門、藤左衛門等と一緒に、歩

一〇六  
いて、これも彌兵衛のところへ行きました。彌兵衛の家では「門出の祝」と「最後の別れ」とかねて、酒宴が始まりました。それが、十二時過ぎまで、つゞきました。

彌兵衛は、七十幾つといふ大老人ですから、その間に、一と寝入りしました。主税は、十五の少年ですから、退屈をして、こくり、こくり、居眠をしました。この人たちは、九ツの鐘の鳴るのを聞いてから、兩國橋を渡つて、林町の安兵衛のところへ出かけました。さうして、そこで、すつかり、身支度をして、火事装束の討入姿になりました。

主税は、そこでも、ぐう／＼薪を立て、一と寝入り、やりました。どん感か、大たんか、内蔵助も、ちよつと呆れて、鋭い眼をして、主税を睨みつけました。

「主税／＼。」

「はッ。」

と、主税はムク／＼と起上がつて、眼をこすりました。

「もう、支度をして可いぞ。」

「はッ。」

と、云つて、主税は、静に、そこに集まつてゐる人等の様子を見回しました。

——少しも、慌てません。そして、あらためて、父の顔を見て「まだ、大丈夫ぢやありませんか。」と、いふやうな顔つきをしました。

内蔵助は、その、どん感と思はれるほど、落ちついた様子が氣に適りました。しかし、黙つて傍を向いて了ひました。

すると、小野寺十内が、「まだ少し間があります。眠ければ、





もう少し、お眠りなさい。」

と、取做すやうに云ひました。

「いえ、もう、眠くはありません。」

と、主税は、サクリと——瓜を割ったやうに云ひました。

「この場合に、眠られるといふは、さてく丈夫な魂です。」

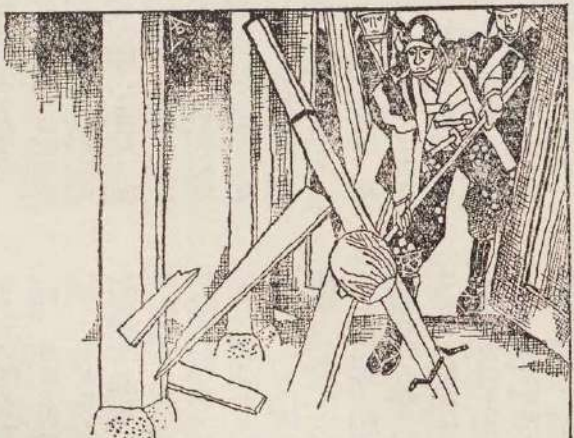
と、原惣右衛門は、心から、感ふくしたやうに、さう云ひました。

主税は、それを開流して、傍へ行つて、支度にかかりました。まづ、着ごみへ領帷子を着て、淺黄の下着に、紅裏の黒小袖、緞子のたッけ袴、紅白縮緬のしごきに、緋錦の裏を打った黒羅紗の火事場羽織——それに、白のなまし皮で、縁が取ってありました。そして、白木綿の後鉢巻に、髪の亂をおさへて、これも、白のなめし皮で縁を取った、兜頭巾をかぶつて、紅白、縮緬の袴——この行粧は、内藏助

「い組」とか、「ろ組」とか、いふやうになつて、組、

三人は、形と影とのやうになつて働き、決して、離れてはならないことになつておりました。そして、「い」から、「せ」までが内藏助の東組、「り」から、「た」までが主税の西組になつておりました。さうして、「合圖」も「號令」も、すべてが軍隊のやうに、組織られておりました。

こゝに、主税についてゐた小野寺十内が、その夜の模様を、京都にある其の妻のところに書いて送つた手紙の「うつし」があります。「討入」の模様は、よく解りますから、讀んで見て下さい。



十四日の日暮に、

内藏助殿と二人、駕籠に乗つて宅を立出で、堀部彌兵衛方に

行て、九ツ頃(十二時)まで、物食ひ、酒飲みて語り、それより、林町、堀部安兵衛方に

行きて、こゝにて勢揃し、七ツ過ぎ(三時すぎ)に打立ちて、

敵の方へ押寄せ候。その間の道、十二三町もあるところにて候。昨日(十三日)降つたる雪の上に、曉の霜を置き、氷りて、足元もよく、火のあかりは、世間を輝かりて、提灯も松明も灯さねども、有明の月芽えて道、紛ふべくもなく、敵の

屋敷の、辻まで押しつめ、こゝより、東西へ、二

から、足輕の寺坂吉右衛門まで、幾らす一様でしたが、袴だけは、大がいの者が、鎖の入った白木綿を用ゐて、非常に嚴重な身ごしらへでした。さうしてめい／＼自分の名をかいた「袖印」をつけました。——よく、羽織の襟に名をかいた繪がありますが、あれは嘘です。

主税は、西組、二十三人の大將でした。で、白の采配を持ちました。印籠には、氣つけ薬、矢立には筆墨の用意までしました。さうして、腰には、「信國」の名刀、十文字の鎗を持つて、吉田忠左衛門と小野寺十内とに「補佐」られて、吉良の邸の裏門に向ふことになりました。

總勢、四十七人。それが、二列になつて、押出しました。もう、四時に近い頃のことと、落ちかゝる月が、しろ／＼と、冴えておりました。

吉良の邸に近くなると、東組と西組と、二隊に別れました。その隊のうちに、三人が、一組になつて



十三人づゝ、二手にわかれて取りかけ、屋根門と塀より乗込み申候。(これは、表門の方のことです) 親子、一方へは、向はぬ事にて、われらは西へかかり、幸右衛門(兼子)は、東へ向ひ候。源吾(十内の甥。幸右衛門の兄)幸右衛門、その他、二三人、彼是四五人、一度に屋根を一番に乗り、屋根の上より飛下りざまに、高聲に名乗りて、直に玄關へかかり、戸を蹴破り、押込み、番人三人、廣間に寝てゐたるが起きて立向ふ。一人を、幸右衛門、高股を切つて落し、斬伏せ直に奥へ切つて入候。その床に、弓、立てならべあるを、幸右衛門、奥へ切入りさまに、弓の弦を、バラ〜と、切拂ひて通申し候。由にて、これは、かねて、敵の方に弓を射る者、多しと聞き候ゆえ、定めて、内外より弓にて防ぎ候まゝ、その心得すべしと、おのゝ、内々、云合はせたる故に、敵、何方よりか起出でて、後ろよりか射らるべきかと心づきて

弦を切りはなして通りたるならん。よく心づきたるとて、軽きことながら、その砌り、人々感じ申候。是ほどの間を合はせ候こと、親心の、うれしさ、そもじ(そなた)共に、悦び申さるべく候。金右衛門(岡野。十内の甥)は、十文字をよく、使ふゆえ、手ごろなるを持ちて、廣場に勝負して、多勢をあしらへとて、屋の内へ切入る人数にては、なく、新門とて小門のあるを守らせて置候。案の如く、こゝに出合ふものを突伏せ申し候よし。源吾(大高)は、大太刀とて、薙刀のやうなるを持ち、下に、紅、両面の下着を着て、上に、黒、両面の廣袖の小袖を着申し候。出でたち、わきて、いさぎよく見えたり。これも、當の敵を討取つたり(中略)西の手(組)は、大石主税を伴ひ、介添(補佐)役に、忠左衛門と、われら、参り候。この手はかけやを以て、三村次郎左衛門、三ツ四ツ、扉をたゞき打破り、どつと押入り、すぐに、上野介隠居

の玄關へ、斬入り申し候。その勢、天魔破旬も、面を向くべからずと思はれ候。押入つて、門の右の長屋の前にて、二人出合ひたる男、先へ出で候を、われら一槍に突殺し、後より出でたるを間喜兵衛、突伏せ申し候。喜兵衛は門を守り、われらは、北の方の裏口へ参り、土屋主税(隣屋敷の旗本)殿へ、垣越に云ふやう、「故の淺野内匠頭の浪人ども、亡君の仇を報せんがため、今宵、吉良家へ推参せしなり。御隣家へは、忽致さず候らへば、御屋敷を御守り居らるべく」と、言葉をつがひ、その所を守り、出合ふ者を二ヶ所にて、二人、突伏せ申し候。一人は、片岡源五右衛門、見てゐて、二十内殿、あそばしたり(よくなされた)と、ほめ申し候。一人は、大石瀨左衛門、見てゐて、その男の倒れざまに、念佛申したるまで聞き申し候。二人ながら、證據のある事にて、老人の罪作りとや申すべき。皆、槍での

ことなれば、刀には手もかけ申さず候。小野寺十内は、健槍を持つてゐたのでした。「討入」は、ざつと、こんな有様でした。上野介の方でも、小林平八郎、島井利右衛門、清水一角、大須賀治部右衛門、左右田孫八郎、齋藤清右衛門など、上杉家の方から「附人」になつて來てゐた勇士は、皆な、よく働きました。しかし、いつも、三人と一人の戦であり、また、身支度も、嚴重でありませんでした。それに、てんぐ、ばらばらに防いだので、片はしから、バタ〜、殺されました。さうして、しばらくの間に、討死が十六人、深痕を負つた者が十九人も出來て了りました。しかし、地に、もぐつたか、天に登つたか、何處を探しても、かんじんの上野介の姿が、影も見えませんでした。四十七人の人たちは、氣を揉みました。そして、操りました「上野介殿を討滅らして了つては、これ



までの辛苦が水の泡だぞ。あくまでも探せ。夜が明けても、探せ。」

と、云って、皆なが、それこそ、血眼でした。

大石瀬左衛門は、座敷々々を、探し廻つてゐるうちに、逃げおかれて、まご／＼してゐる、吉良家の侍を一人、取ツつかまへました。

「こら、上野介殿の寢所へ案内しろ。しなければ、命を申受けるぞ。」

と、おどしつけました。

「はい、御案内致します。」

そいつは、ブル／＼、探へながら、上野介の「寢所」へ、案内しました。

その室は、八畳ばかりの廣さがありましたらう。

入口は、二枚戸になつて、外から「ツボ」をさすやうになつてゐました。圓行燈が、ボンヤリ、灯れて刀掛には、ちやあんと、刀が、かけてありました。そして、絹布の夜具蒲團の床が、へてありましたが

人の影もありませんでした。

瀬左衛門は、ツツと入つて、蒲團のなかへ手を入れて見ました。まだ、温味が残つてゐました。

「ム、床を脱け出してから、まだ、たんと、時間が経つてゐないぞ。」

と、思つて、瀬左衛門は、部屋の、あつちこつちを調べて見ますと、疊の端が一所、少し浮上がつてゐました。

「はてナ。」

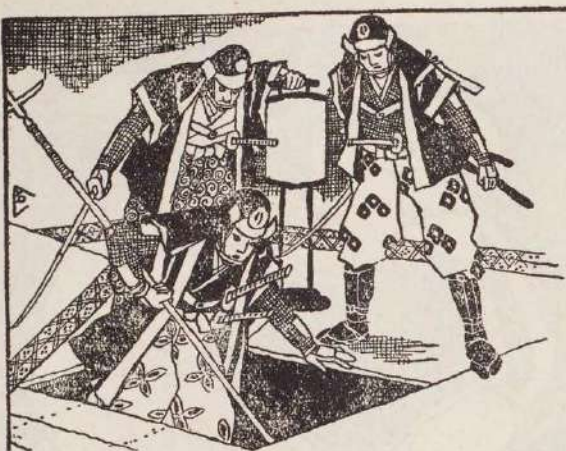
と、瀬左衛門は、ツツと、寄つて、その疊を踏みつけて見ました。少し、ブク／＼して、疊の下が、穴にでもなつてゐるやうに思はれました。

瀬左衛門は、ハツと、胸を躍らせながら、疊を、引ツぱがして見ました。はたして、そこに真ッ暗な穴がありました。

そこへ、主税を真ッ先きに、三四人の西組の者がドヤ／＼と、入つて來ました。そのうちに、「陽明拳

者」の木村岡右衛門も、まじつてゐました。

「御覽なさい、こんな隠穴があります。」



と、瀬左衛門は、

「こゝに、

ツツきり

上野

介が居

る」と

いふや

うに、

息をは

づませ

て云ひ

ました

「隠穴ですか。」

と、主税は、ツツと立ちよつて、隠穴を覗いて見ました。しかし、奥は、真ッ暗で、何も見えませんでした。

木村岡右衛門は、圓行燈を持つて來て、奥の方を照らしました。それでも、奥の方が、よく解りませんでした。五六人の諸士は、互に、顔を見合はせてこの不思議な隠穴に、氣を吞まれたやうになりました。そして、誰、一人として、飛込むで見ようとする者がありませんでした。

「これは、抜穴でしょう。上野介殿は、此處から抜けて出られたに違ひない。わたしが、飛込むで見ましよう。」

と、さう云つたと云ふと、主税は、ヒラリと、身を躍らせて、隠穴へ飛込みました。

瀬左衛門を始め「あッ」と、呆れて、また、互に顔を見合はせました。

(つゞく)

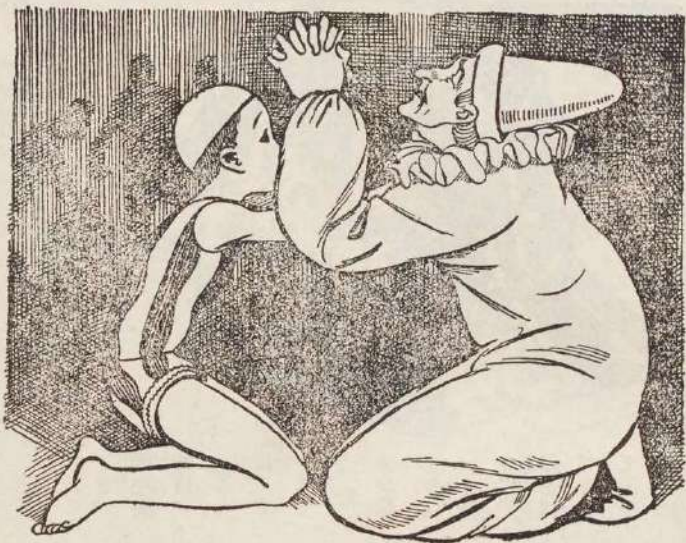


# 少年輕業師

三井 信衛

岡本 歸一 畫

## 四



「お父さん、僕ですよ。ポオニイですよ。」  
杖を握った父ジャッゲエの右の手に、力一杯噛み  
つくやうにして、ポオニイはさう叫びました。それ  
を聞いてジャッゲエは、思はずよろ／＼としかけま  
したが、倒れぬやうに、確りと杖で身を支へ、  
「何だつて？ ポオニイ……」とさう唸るやうに言  
つたのでした。

「お父さん、僕です、ポオニイです。」  
二年の昔に、遠いアメリカにつれられて行つたそ

の悲しさ、歸らうとして歸れなかつたそのもどかし  
さ、その一伍一什を詳しく語らうとしても、只再會  
の喜びにポオニイは、僕です、ポオニイです」と  
しか、聲が出ないのです。

「え？ポオニイ、お前はあのポオニイか、わしの可  
愛いポオニイだつたのか……。」

ジャッゲエはびくびくと、臉と眉を激しく動かし  
ました。お、若しもジャッゲエに目が開いてゐた  
ならば、懐しい我が兒の顔を二年振りに、まじ／＼  
と見ることも出来たでせうに！ 彼はまるで盲ひた  
その目を開かうと躁るやうに、幾度も／＼びくびく  
と臉を動かしてゐるのです。

「お、ポオニイ、わしは、お前の顔を見ることも出  
来ない。見たいと思ふと、い／＼や見られないのだと  
思ふと、わしはもう死ぬやうな苦しい思ひだ、ポオ  
ニイ、ポオニイ、二年ぶりに戻つて來たわしのポオ  
ニイ、せめてお前の顔に觸らせておくれな……。」

ジャッゲエは腰を踞め、その二つの手で、ポオニ  
イの柔かな金髪や紅い唇や又鼻を、幾度も／＼撫  
でるのでした。つぶれた二つの目からは、しと／＼  
と涙が光つて落ちました。

「お父さん……」ポオニイの聲も哀しさうでした。  
「……どうしてお父さんは、盲目になんかなつたの  
です？」

「お前の行方が知れなくなつてから間もなく、わし  
は重い眼病にかつたのだ。さうして日に／＼、何  
も見えなくなつてしまつたのだ……それから此の曲  
藝團に雇はれて、道化者となり、毎日々々笑つたり  
道化たりして暮してゐるが、わしの心は、もう張り  
裂ける程の悲しさで一杯になつてゐたのだ。」

「お父さん、決して心配なさつてはいけません。僕  
は何時まで、お父さんの傍にゐますし、それにい  
／＼お醫者に頼んで、目の快くなるやうに治しても貰  
ひませう。そしてお父さん、僕はお父さんと一緒に



この曲藝團で暮りたいのですが、頼んで下さいませんか。』

「いゝとも。二人はいつでも一緒に暮さうな。わしは目が見えないので、随分お前の世話になることもあるだらうが、どうぞ我慢をしておくれ。』

しみじみとジャッゲエは言ひました。ポオニイは又エリユウドを、父の前に紹介して、その身の上を詳しく語つたのでした。そしてその日から二人はこの曲藝團に入り、少年軽業師となつて暮すことゝなつたのでした。

## 五

軽業小屋がはねると、ポオニイとエリユウドとは、そのがらんとした舞臺に出て、そこで様々の軽業を習ひました。ポオニイの方はアメリカにゐた時、紐育の曲馬團に出され、いろ／＼な危い藝當をしたこともありましたから、その練習も、さして難しい譯

でもなかつたのでした。

が、エリユウドの方は、全て素人でしたので、先づ身體の骨格を柔かくするために、いろ／＼な運動を、つゞけさまにさせられ、その上一日に何回となく、酢を飲ませられました。それは骨格を軟くするためでした。

少しでも藝の憶えが悪いと、びし／＼と容赦も何もなく、太い根太の鞭で叩かれます。薄暗い舞臺の真中で、エリユウドは幾度聲を出して泣いたこととせう。だが彼には、軽業に出るといふことに、一つの望みを繋いでゐたのでした。それは恰度ポオニイが父の居所を見つけたやうに、エリユウドの父が曲藝團のピラを見て、そこにわが兒の名を見つけ、尋ねて来てくれるかも知れない……思へば果敢い望みであるかも知れないが、さう思ふと何處からか不意に、『おゝエリユウド』と云つて、父が現れるやうな氣がしてならないのです。

三月ばかり経つて、ポオニイとエリユウドは、いよ／＼舞臺に立つことになりました。三月前に初めてこゝへ来て、人垣を押しながら眺めたこの舞臺に立つやうになつたのかと思ふと、ポオニイもエリユウドも、何となく恐ろしいやうな、又得も言へぬ不思議な心地さへして來ました。

大きな鏡の前に立つて、ポオニイとエリユウドは、軽業の服をつけてをりました。今日初めて二人は、見物の前に出るのです。

『さア、ポオニイ、今度は鈴をつけるのだよ。そら、今度は、三角帽子をかむつた。』

ジャッゲエはポオニイの側に佇んで、見えない目を手さぐりに、次から次へと様々の衣裳を、わが兒の手に渡してやるのでした。ジャッゲエがポオニイに會つてからは、だんだんと元氣が回復して來て、その年さへも、若くなつたやうに思はれました。

『あゝ、僕にもお父さんがあつたなら……』

二人の仲睦い様子を眺めながら、エリユウドは一人で、さう呟いてゐたのでした。彼がかうして、身に紫と赤との軽業服をつけ、何丈の高いところで危い藝をするのも、みんなお父さんと會ひたいがため……でも、果して父はエリユウドの名を見て、遙々巴里のこの町まで、尋ねて來てくれるかしら？ いや果して父は、生きてゐるのかしら？——さう考へてくると、又エリユウドの身には力が抜けて行くやうにさへ思はれます。

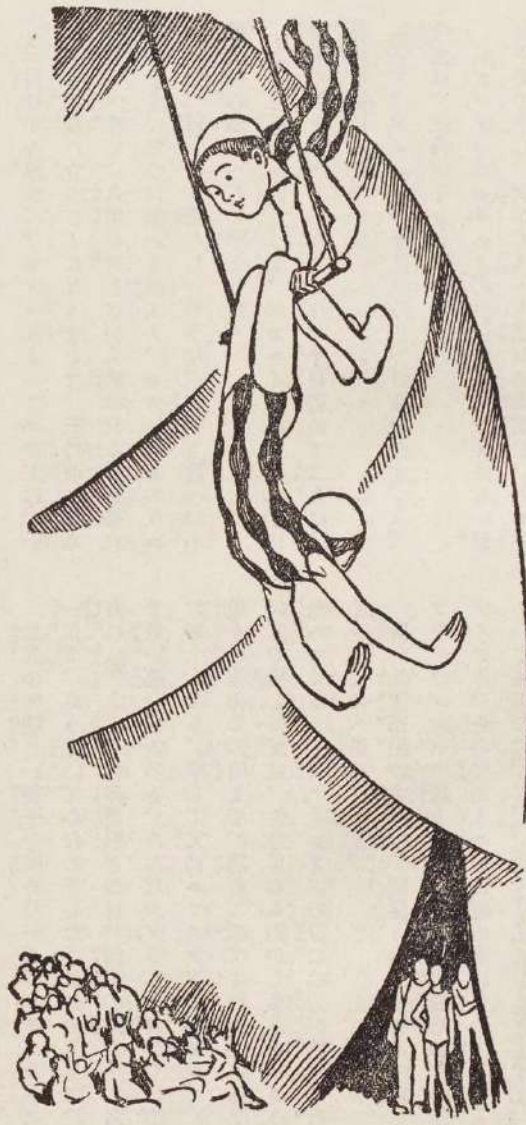
廣い仕度部屋の中では、網渡りのメリオリイや、フラフラダンスの踊り手や、一人一脚藝當のアコンダイフや、その外の人々が皆鏡の前に立つて、けんめいに刷毛で、顔に白粉をなすりつけてをりました。がらん／＼と鈴の鳴るたびに、それ等の人々が、次々に出て行つて、やがてポオニイとエリユウドの番がやつて來たのです。

『さア二人とも、出番だよ。』



青い道化服——忘れもしないあの青い道化となつたジャッゲエが、又介添への人に手を曳かれ、二人の先に立つて舞臺へ出ました。二人とも揃ひの紫と赤との服をきた美しいポオニイとそしてエリユウ

ドの姿が、華やかな更紗の布を開いて舞臺に現れると、しばらくは見物の拍手で、ジャッゲエの口上もよくは聞きとれない程でした。樂隊と共に、ポオニイとエリユウは、天井から



釣り下つた一本の綱を持つて、するすると昇つて行きました。それから、綱の途中で倒立ちをして、今度は一飛びに、それから三間も向方にある、天井から下つた鞆繩に飛びつきました。

ポオニイが鞆繩の上に倒立ちとなり、エリユウドは同じ鞆繩の棒切れに足をかけて斜めに身體を下げる／＼と輪を回して、そのまゝで廻りました。

廻りながらエリユウドが、ずつと遙か下の舞臺を眺めると、そこには何千と知れない見物人が、まるで模様やうになつて、彼の目にうつりました。

幾度もその輕業をしてゐるうちに、血が頭にのぼつたせゐか、少しも耳は聞えなくなりましたが、激しく拍手してゐる見物の手の動きだけが、閃めくやうにはつきりとエリユウドの目に、映るのです。『もしやあの中に、お父さんが來てゐるはしないだらうか。』

藝をしながら、エリユウドはそんなことを考へま

した。その何千といふ見物の一人々々に、彼はまるで一つ／＼目を注ぐやうに見渡しました。その目が又一方に落ちると、そこには青い道化の服を着た、盲目のジャッゲエが、ちいつと見えない目を、遙かの上に注いで、わが兒ポオニイの身を氣づかふやうに、首をあげてをりました。

あゝ、どうしたと云ふのだらう、ちやうどこの時のことです。鞆繩の綱が、凄まじい音をたて、ぶつとりと切れてしまひました。とたんにポオニイとエリユウドは、三丈の高さから、まつ逆さまに舞臺の堅い三和土の上に落ちて行つたのです。……

六

初めての晴れの舞臺に、何といふ哀しい事が起つたのでせう！幸ひにエリユウドは何處一つ怪我もなかつたけれど、舞臺に落ちたその刹那に、ふとポ



オニイの方を眺めると、ポオニイは、二目も見られない程の大怪我をして、もう絶命してゐたのであります。

得も云へぬ恐怖の喚き聲が、周囲の見物から、海瀟のやうに起りました。さうして幕は閉されました。暗がりの舞臺の上で、起き上つたエリユウドが、ふと向方を見ると、青い道化のジャッゲエが懸命にポオニイの身體にとり縋つて、狂ふかと思はれるばかりに、

「おゝ誰だ、お前は誰だ、ポオニイか、それともエリユウドか……！」さう金切聲を揚げて叫んでをりました。

その有様を眺めたエリユウドは、ふゝに身につまされて、涙が咽喉から込み上げて来たが、思はず彼はジャッゲエの手を確と掴んで、しかも必死の苦心をしながら、ポオニイの聲色を使つたのです。お、この憐れな盲目の老人が、もしポオニイの死ん

だことを知つたならば、もうきつと氣は狂ふてしまふに違ひありません。幸ひジャッゲエが盲目であつたから、エリユウドは飽くまでポオニイになり切らうと、深く決心をしたのです。

「おゝ……お父さん！」

ポオニイそつくりの聲で、かう叫びながらエリユウドが駆けて行つた時、大勢の輕業師が一樣にエリユウドを見て、不思議な顔つきをしました。直ぐにその譯を皆は察してしまひました。そして一樣に聲を揃へ、

「ジャッゲエさん、安心しろ。落ちたのはお前さんの息子ぢやない。エリユウドが落ちて死んでしまつたのだよ……」

と叫びました。固よりジャッゲエは、エリユウドをも我兒のやうに可愛がつてはをりましたが、死んだのがポオニイでなかつたと知ると、やつぱりその盲ひた二つの目の邊りには、抑へても抑へ切れぬ喜

びの小皺が、微かに曇られてゐるのです。

「ポオニイ、よく無事でゐてくれた。」ジャッゲエは強くエリユウドを抱きました。その目からはポタポタと涙が落ちて、それがエリユウドの頬に幾たびも振りかゝりました。

「わしは……わしはな、お前が落ちたのかと思つて何んなに心配したかわからなかつた。お前が若しも死ぬやうなことがあつたなら、わしもきつと哀しさのために、死んでしまふに違ひがない……」

ジャッゲエの聲を聞いてゐると、涙は幾筋もエリユウドの頬を傳つて、紫と赤の輕業服も、涙でしとくに濡れました。何と云ふ哀れなジャッゲエ老人！しかし、その老人の今の言葉を聞くと、もうエリユウドには、本當のことが言へなくなつてしまひました。本當を告げることは、此の盲目の老人をば死に導くのと少しも變りがないのです。エリユウドは飽くまでも、ポオニイになり切らねばならないと、

いよ／＼固く決心をしました。

「あんな三丈も四丈もの高いところから落ちて、どんなにお前は恐かつたらう！」ジャッゲエは猶もひしと彼を抱いてゐます。

「おゝ、ポオニイ……だが、エリユウドは全く可哀想なことをしてしまつた。何といふあの子は、不仕合せな子供だつたらう……」

自分の子の死んだことも、又今ポオニイの死骸がその直ぐ側を運ばれて行つたのも露知らず、ジャッゲエはさう言つて、「エリユウドよ、安らかにお眠りよ。」と聲を限りに祈つてをりました。

この輕業の座頭も、居合すたくさんの人々も、その顔に袖をあてゝゐない者は、誰一人もなかつたのでした。

「ねえ座頭！」

ジャッゲエは座頭のギゼエルに向つて、絞られるやうに言つたのです。





ん！」とさう叫ぼうとしかけました。……と、ジャッゲエは、つと決心したやうに、エリユウドが死んだと物語りました。

「あゝ……」

狂ふやうに泣く父！ 聲を忍ばせて泣いてゐるエリユウド！ そのとき又調子外れの樂隊が高く鳴り出して、拍手の響きがごう／＼と聞えてをりました。泣きながらエリユウドはジャッゲエと共に、長き漂泊の旅路に出たのでしたさうしてもう再び、父と會ふ日は來なかつたのでした。

(を はり)

「まことに勝手な話ですが、どうしてもわしはこのボオニイに危い輕業をさせて、暮すことは出來なくなつてしまひました。お願ひです、私は此奴と一緒に、辻藝人にでもなつて暮す方が、すつと／＼安心するのです。どうかお暇を下さいまし。」

「おゝ、ジャッゲエ、そんならお前の思ふやうにおし。だがエリユウド……いや、ボオニイ、お前の方は何うだね？」ギゼルは訊きました。

「僕も……」エリユウドはけんめいに聲を遠へて答へました。「僕も一緒に、行きたう存じます。……お父さんと一緒に……」

「さうか。そんならお行き！」

「ボオニイ、さアわしと一緒に、何處までも行くのぢや。」

ジャッゲエは立ち上つて、骨張つた右の手をエリユウドに出しました。

「さア行かう、ボオニイ……」

「えゝ……」

エリユウドはジャッゲエの手をとり、右手にボオニイのバンショを抱へて、輕業小屋をぼつ／＼と出て行きました。二人が長い廊下を出ようとしたとき、一人の背丈の高い立派な紳士が、慌しく輕業小屋の中に入つて來ました。

「おゝ、一寸お尋ねしますが……」紳士はジャッゲエに向つて言ふのです。

「私はエリユウドの父親です。今まで十年の間行方を探してゐたのです。何處にゐるのでせうか、會して貰ひたい……」

「え……！」エリユウドは思はずさう叫びかけて、又必死にそれを抑へました。今若しこゝで親子の名乗りをしたならば、この憐れなジャッゲエに、本當のことを知らさなければなりません。それにしても今日の前に尋ねて來た、永いあこがれの懐しい父の姿！ エリユウドはもう耐らなくなつて、「お父さ



# 蟬と谷の水

三木 露風

さらさら流れる谷の水  
山へ行く道 橋がある  
渡れば蟬がないてゐる  
夏の日 涼しい風がふく  
山にこもつて音がする  
あれは松風 峰の風  
岩を傳ふて流れてる



水にぬれては咲く花よ  
かあい、白い苔の花  
あゝ苔の花 かたまつて  
青い苔の花の母  
下に生へてた細い草  
しいしいなくのは小い蟬  
むかふでなくのはみんなよ  
さらさら小水の音もする



川上 四郎 畫





# 世界童話欄



い、話でありながら、餘り知られてゐない話や、書き直せば立派な話になるといふやうなものか、胸を求めて紹介することがこの欄の仕事です。編輯部の内、齋藤 佐次郎、久米然一、雨氏が主として擔當いたします。一人や二人の力では、到底巧くは参りませぬから、童話の好きな方々の御助力をかがひます。殊に日本話に力を入れて紹介したい希望です。第一回は不用意のために十分に行きませんでした、追ひくによくする積りです。

## 鶯 姫 (日本)

小さな川が村の中を流れてゐました。夕方になるとこの川のふちへ、きれいな娘が来て、洗濯をしました。ほんとうに優さしい、美しい娘なので、村の人達は何處の娘さんだらうと、不思議さうに見ましたが、誰も娘を知りませんでした。

やがて、日の暮れ方になつたので、娘はいつもの通り川べたへ来て洗濯をはじめました。白い手を水にひたして布を洗つてゐる姿は、露のやうでした。娘は洗濯をしながら、眼をうたつてゐました。その聲が、また何ともいへない、幽らかな聲でした。娘は洗濯を終つてしまふと、

立ち上つて歸りかけました。数かげで見てゐた若者も、急いで後からついて行きました。娘は、山の方へ歩いて行きました。草を別けて、さびしい山の方へと行くのです。もうその頃には、日はとつぷりと暮れてしまつて、山の頂には盆のやうなお月様が出ました。若者は驚きました。「山の上にはおはなは無い筈だが、一體どこの家の娘だらう」と思つて不思議でなりません。でも、暫く行く内に小さな霧

家がありました。その家の前まで行くと、娘は立止つて中へ入らうとしました。その時、ひよつと振返ると、見知らない若者が立つてゐるものですから、娘はびつくりしてしまひました。若者も、きまりがわるいものですから、

片づいて氣持のいい家でした。若者は圍爐の前に坐つて、家の様子を見てゐましたが、娘の外には誰も人がないやうです。「あなたは、お一人で、こんな淋しいところにおゐるのですか。」若者は、不思議でならないやうに尋ねました。「ハイ、娘は一言さういふ切りで、うつ向いてゐました。あくる日になると、娘は若者に向つて、

立つて見たり、坐つて見たり、外を歩いて見たりしてゐましたが、娘はなかく歸つて来ませんでした。その内に、若者は草笥のことが氣になつて来ましたが、見てはいけなと云ふものは、却つて見たくなるもので、娘から禁じられてゐる草笥の中が、見たくて、たまらなくなつて来ました。とうとう若者は、草笥の前に立つて、一番上の引出を開けてしまひました。

て、一番下の引出を開けました。と、そこそ一面の田でしたが、稲はもうすつかりと伸びて、重たさうに穂が垂れておりました。若者はそれ以上引出を開ける元どほりにして、恐る／＼娘の歸るのを待つてゐました。やがて、娘は歸つて来ましたが、しかし、娘は草笥の引出を開けたことをすつと知りました。「まあ、あなたは、開けてしまつたのですか、あんなに申上げて置いたのに。」と、娘は怒めし



『道にまよつた者です。どうぞお泊め下さい』と、いひました。何にも知らない娘は、ほんとうと思つて若者な家へ入りました。『小さな家ですが、中はきちんと』

『ちよつと外へ行つて参らねばなりませんから、お留守居をおれがひいたします。ちよきに歸つて参りますが、どうぞその草笥だけはあけないやうになすつて下さい。』といひました。若者は、娘の出て行つた後で、一人で留守番をしてゐましたが、山の中の一軒家のことですから、退屈でたまらなくなりました。







うにいひました。  
 若者は何といつて、あやまつた  
 らいのかわからないうで、たゞ悲  
 しきうにうつ向いてゐました。  
 『もうかうなつては、何にも彼も  
 おしまひです。あなたとは何時ま  
 でも御一緒にゐたかつたのですが  
 もうこれで、永のお別れです。ど  
 うぞお達者であらして下さい。』  
 涙は泣きながらいひました。  
 と思ふと、何處かで、  
 赤いホケキョー  
 と、一瞬暗いたのがきこえまし  
 た。その暗聲は、山にこだまして



魔の方へ下りて来ました。と、  
 途中に大きな洞穴のあるところが  
 あります。そこまで来ると、人の  
 話し聲がしました。不思議に思つ  
 て見ると、白い着物を着た二人の  
 お爺さんが、将棋盤に向つて将棋  
 をさしてゐます。  
 金は立止つてよく見ました。  
 『仙人といふのはかういふ人なの  
 かしら』と思ひました。二人の仙  
 人は平氣で将棋をやつてゐます。  
 金はもと／＼将棋の大好きな男  
 でした。とう／＼そこへしやがみ  
 込んでしまひました。

悲しきうに響きました。  
 若者がふと気がついた時には、  
 もう娘も、家もありませんでし  
 た。若者はたゞ一人しよんぼりと  
 草の上に坐つてゐたのでした。  
 若者は、はじめ夢からさめた  
 やうに、立上つてすこん／＼と  
 村の方へ歸つて行きました。  
 村の人達は、歸つて来た若者を  
 見て、びつくりして、  
 『今まで何處にゐたのか』と尋ね  
 ました。そして、  
 『お前さんがゐなくなつてから、



間もなく勝負はついたと見えて  
 二人の仙人は、と思つてやうに、  
 そこにあつた籠から、棗の實を取  
 出して喰べました。金はお腹がへ  
 つてゐたので、自分も棗の實を  
 もらつて喰べて見たいと思ひま  
 した。  
 『すみませんが、私にも一つ下  
 さいませんか。』と、恐る／＼金が  
 いひました。  
 すると、一人の仙人が、  
 『喰べない方がよからう。お前  
 ちの喰べるものではないから。』と  
 いひました。  
 さういはれると、金はまず／＼  
 喰べて見たくなりました。金が餘  
 りたが、いふものですから、と  
 う／＼仙人は一粒くれました。  
 さつそく、口に入れた金は、そ  
 のおいしい味にびつくりしまし  
 た。成る程、仙人達の喰べるも  
 のは違つたものだと思ひしまし  
 た。しかし、金はふと自分の姿

紅燈祭 (支那)

支那では一月の十三日から十七  
 日までの五日間、紅燈祭といふ  
 お祭りをやります。いろ／＼の色  
 の提灯に、灯をつけてお祭りをす  
 るのです。このお祭りは、丁度そ  
 の紅燈祭の日のことでした。  
 貧乏な樵夫の金の家も、その晩  
 は紅燈祭のお祭をすることに  
 なつてゐました。しかし、貧乏な  
 金のことですから、お祭だとい  
 つてもお休みにするわけにも行か  
 ないので、何時もの通り斧を持っ  
 て山へ行かなければなりません  
 でした。



金の家には、男の子と、女  
 の子と、二人の可愛い子がゐて、  
 お妻さんと四人で、仲良く暮し  
 てゐました。  
 金が山へ行かうとすると、後か  
 ら二人の子供が追ひかけて来て、  
 『お父さん、今夜はお祭ですよ。  
 忘れずに早く歸つてね。』といひ  
 ました。  
 金は、い／＼と／＼とうなづい  
 て、子供達の頭をなでました。  
 山へ行つた金は、いつもより早  
 く仕事をしまつて、薪を背負つて

に気がついた時、びつくりしてし  
 まひました。金は、白髪のお爺さ  
 んになつてしまつてゐたのです。  
 金が泣き出したさうな顔をしてゐ  
 るのを見て、一人の仙人がいひま  
 した。  
 『それ御覽、だから喰べてはいけ  
 ないと云つたではないか。お前は  
 棗を喰べたために、あの時から  
 五百年経つてしまつたのだ。そこ  
 にある斧を見るよ／＼わかる。お  
 前が持つて来た斧は、すつかり朽  
 ちてしまつたではないか。』  
 成るほど、仙人のいふ通り、金



が持つてゐた斧は、柄が朽ちてし  
 まつて、又金は一ぱいの鎧に變つ  
 てしまつてゐました。  
 金は、これは皆な夢ではないか  
 と思ひました。夢であつてくれ  
 ばい、とれがひました。兎も角も  
 一刻も早く自分の村へ歸つて見れ  
 ばわかると思つて、急いで山を下  
 つて、自分の村へ歸りました。  
 ところが、その村も、跡方もな  
 くなくなつてしまつてゐました。山も  
 川も、少しも前と變りません。し  
 かし、今までのやうな粗末な百姓  
 家は、軒もなく、立派な家々が軒  
 を並べて、道行く人も、きたない  
 百姓姿は一人もなく、きらびや  
 かな装をした人達が往き來をし  
 てゐます。  
 この町でも、今日は紅燈祭の  
 お祭と見えて、家の軒ごとに、  
 美しい立派な提灯が下つてゐま  
 す。御覽なさい。丁度向うから行  
 列の一隊が来ます。男や、女







金は、その間に先づ白い窓の方から外を見ました。昨夜見た、あの美しい町が、手にとるやうにはつきりと見えます。昨夜の賑はひにひき代へ、今日は、眠ったやうにひっそりしてゐます。

「こんな町は見たくない。」金は、獨り首をうつて、今夜は「黒い窓」を開けて見ました。

お、見えました。見えました。金の住みなれた村が見えました。金の家では二人の子供が外へ出て父親の歸りを待つやうに山の方を切りと見てゐます。

金は堪えられなくなり、「死なな、早くお願ひです。早く私を昔に返らせて下さい。子供たちが待つてゐるのです。」

金は泣いてゐました。涙は間もなく出来上つて、それを飲んだ金は、忽ち昔の通りの人間に返りました。



金は、死に厚くお禮をいつて、再び鶴の背に乗つて下界へ向つて飛びました。

村へ着いたのは、もう夕方でした。駈けて、自分の家の前まで行くとき、そこには金のお妻さんと二人の子供が、さも待ち望しやうに立つてゐました。

「お父さん、ずるぶん歸りがおそいのれ。もう夕方ですよ。早く私のお提灯に灯をつけて頂戴れ。」と子供がいはひました。

その日はまだ紅燈祭の最後の夜

お姫様 (ロシヤ)

大昔のこと、ある王様夫婦が住んで居て、デミトリイといふ王子と、マリヤといふ女王との可愛い二人の子供がりました。

小さいお姫様は、何ういふものか、大變兄さんの、王子が好きだつたのです。そして、兄さんの王子も、それは、妹のお姫様をかわいがりました。

いつでも、お姫様がむづかつて乳母も、侍女も、何うする事も出来ない時でも、兄さまが、舞へ来て



踊りはいい、娘だ、れんれんよう！

娘やが大きく、なつたならイザンの御所へ、舞にやるイザンはやさしい、王子さまと、仲よく暮らさせよう

さう云つて、王子が、自分で

手に作つた子守歌を、自分勝手な節をつけて、うたひさへすれば、いつの間にか、むづがりやお姫様も、うとくと、氣持よささうに、寢入つて修ふのでした。

月日がたつて、王子もお姫様も大きくなりました。

ある時、兄さんのデミトリイ王子は、お友達のお友王子を訪れて行つて、イザンと一しよに、森の中で、狩をしたり、時を作つたり、本を讀んだりして、三日の間、仲よく遊び暮らしました。

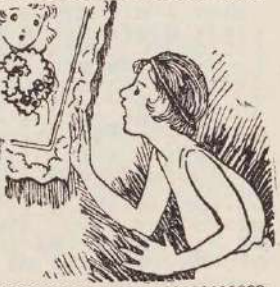
別れ際に、今度は、デミトリイ王子が、僕の方へも来てくれたまへな」と頼みました。

「いいとも、僕はすぐに、君の所へ行くからな！」

「あ、きつと、まつてらよ！」

仲のいい友達は、約束をして別れました。

兄さんの王子が、歸つて来ると仲よしのお姫さまは、自分の肖像



畫を、兄さんに贈りました。兄さんは、よるこんで、それを、自分の部屋にかけて置きました。

間もなく、デミトリイ王子の後を追つて、イザン王子が訪れて来ました。

イザン王子が、お友達を頼むがせつともりで、わざと、案内を頼まかに、デミトリイ王子の部屋へ入つて来た時、ちよと、デミトリイ王子は、うとくと畫を覗いてゐました。

イザン王子が、マリヤ姫の肖像

畫を一見見ると、忽ち、心が狂つて終ひました。こんな美しい姫がこの世の中に居るのなら、何うしても、自分のお嫁に欲しいと思ひました。

そして、この部屋にかつてある所を見ないと、デミトリイ王子の悪人に異ひないと、かんちがひして、急に、仲のいいお友達が、にくくて堪らなくなつて終ひました。

だ、イザンは、物もいはずに、眼の刀を抜いて、デミトリイを突き殺して終はうとしました。

けれど、何うして、そんな事を神様が、おさせになるものでせうか？ デミトリイは、その時、眼をさまして、驚いて立ち上りました。

「イザン！ 君は、何うしようといふのだ？」

「殺すのだ！」

「何んで？」



「この姫は、君の悪人だらう。」

「これか、これは僕の妹だよ。」

「妹！ なぞ、なぜ、今まで僕に話して呉れたかつたのだ？ 僕には、この女なしでは、一日も生きて居られない！」

「いいとも、妹と結婚し給へ！ したら僕等二人は、親友で、そして兄弟になれるんだもの！」

イザン王子は、よろこびの餘りデミトリイ王子を、抱きしめて、強くキッスしました。そして、間もなく、二人の間に、結婚式



の準備が初められました。イワンは、早速、船へ歸つて、式の用意にかかりました。デミトリイ王子は、妹の姫の旅の用意を急ぎました。それは、大昔のロシアでは、結婚の日に、お解さんの家を訪れて、家族の人達と會はなければならなかつたからでした。



石使ひ達と一緒に乗つて居ました。王子が乗つて居たのです。王子は、沖へ漕ぎ出して、陸地も山も見えなくなつて、ただ、暗い海が、だぶんと、暗い波の音を立て、居る所へ来た時、乳母が、お姫様に云ひました。

「お窮屈でせう！ お召物をおまきになつて、少し横におなり遊ばせ！ きつと、お樂になりませうから。」

お姫は、乳母の云ふ事をきいて、その通りにしました。そして、横にならうとした時、乳母は、お姫の眞白な肩を、軽く叩きました。すると、お姫は、忽ち、小さな灰色の鴨に姿を替へて終つて、羽根を擴げて飛び上ると、そのまゝ、すうと沖の方へ飛んで行つて終ひました。

……そこで、乳母は、お姫様の



着物を自分の娘に着せて、お姫様にしめて終ひました。

けれど、乳母の娘は、只の下女だつたので、少しも品がなくてそれに、マリア姫の美しきとは、駁べものにならない様な、女だつたので、美しい着物も、少しもにあひませんでした。せいたくなく黄色の上着も、だぶんと、わくちやになつて、だらりとぶらわくちやに居ました。

小さな、可愛い、縞珍の女靴は無理にはいては見ましたが、足が

痛くて堪りませんでした。短かい袖口から、縞赤な、荒々しい手やひちが、むき出しになつて、おそろしい様さへ見えるのでした。

併し、船は、間もなく、イワン王子の住んでゐる國の海岸へ着きました。

船が着くと、待ち兼ねてゐたイワン王子は、眞先に飛び出して来て、お姫を迎へました。そして、背像畫で罵えた、美しいマリア姫の上座するのを、今か今かと、待つて居ました。そして、これが、マリア姫だといふ、娘を見て、王子はあつげに取られました。

その人は、繪で見るやうな、美しい可愛い姫ではなかつたので

す。

イワン王子は、忽ち、持ち前のカンシヤクを起して、かんざしに怒り出して、大うそつき、家來達に云ひつけて、大うそつき、以前の親友だつた、デミトリイを

上座するや否や、引つとらへて、半屋へ投げ込んで終ひました。



可哀想に、デミトリイ王子は、何も悪い事をした覚えもないし、首ひわけ一つ出来ないうで、暗い半屋へ入れられて、一日に、一杯の水と、一かたまりの黒パンだけしか貰ふ事が出来ないうで、朝も晩も、厳しい番兵に守られて、誰一人、牢を助けてくれる人もないのでした。

長い一日を、夜になる迄、王子は、悲しい自分の運命を考へて

寝る事も出来ずに、神様にお願りをしてゐました。真夜中になると、小さい灰色の鴨は、海から飛び上つて、兄さんの所へやつて来ました。すると、美しい光りが、鴨のぐるりから流れ飛んで、國中がげつと、明るくなるやうに見えました。

小さい鴨が、翼を動かす度に、火花を散らす様に、美しい光りが流れ出ました。ばあツ、ばあツと、まるで、火の玉が、くだけて散る様に見えました。そして、そ



の光りの流れて行つた先の方に、お屋様の様な後光が散つて居るのを見ました。

半屋へ近づくと、鴨は、翼をばらばらと、すうと、半屋の窓から入つて来ました。

「兄さん！ お氣の毒ですわ！ きつと、悲しいでせう、こんな、恐ろしい半屋へ入れられて、かきくしの黒パンと、冷たい水しかたべさせられないなんて、なんて、お氣の毒なんぞでせう！ けれど、兄さん！ 妾、もつと、もつと悲しいのよ！ 明けても暮れても、眞常な、冷たい海の中で、たつた一人で浮いて居るのよ。乳母は、悪い人だわ！ 私達二人をこんな目に會せたのは、乳母なのよ。妾の、大事の着物を脱がせて、自分の娘に着せて終つたのよ。」

兄妹の、王子と姫は、悲しがつて、二人で泣きました。

夜が明けると、小さい鴨は、ま



た翼を擴げて、青い海の方へ飛んで行つて終ひました。

そのうわさが、忽ち擴がつてイワン王子の耳にも入りました。「王子様！ 昨晚の事で御座います。小さい灰色の鴨が、デミトリイ王子の牢屋へ飛んで来たと言います。そして、鴨から後光が射して、國中が明るくなる位だつたと申します！」

イワン王子は、家來達に命じてその不思議な鴨が、若し今晚に來たら、さつそく知らせる様にと云



ひました。  
夜中になると、風が起つて、海は荒れ初めました。けれど、灰色の鴨は、波の上を離れて、高く星空へ飛び上ると、一直線に、兄さんのある半屋の方へ飛んで来ました。  
また、ばあつと、美しい光が流れて、園中が輝きました。鴨は、翼をうごかす度に、金の雨の様に、後光が四邊に降りそそぎました。窓へととると、鴨は、また翼をすばめて、すうつと、半屋の中へ飛び下りました。  
家來の知らせて、はれ起きたイアン王子は、大急ぎで、半へ来て不思議な鴨を見ました。そして、家來連に云ひつけて、窓の外でどん／＼と火をまきました。  
自分には、月に耳をつけて、兄妹の話を聞いて居ました。  
『お氣の毒ね兄さん！ こんな、恐ろしいところへ入れられて、た

べる物は、冷たい水と、かさ／＼の黒ばんだけしかないでせう！でも、でも、妾もつと悲しいわ。明けても暮れても、たつた一人で海の上で泳いで居るよ。乳母は悪い女だわ！ 私達二人をこんな目に會せたのよ！ 私の大事の着物を脱がせて、自分の娘に着せて終つたのよ……オヤ！兄さん！ 何んか、キナクさかなの？』  
その時、イアン王子は、突然扉を開けて、半屋の中へ飛び込



ました。  
王子の顔を見ると一しよに、鴨はあわて、翼を擴げて、窓から飛び出しました。  
けれど！ けれど！ 窓の外には、火がもえ上つて来て、見る見る小さい鴨の翼は、半分やかれて終ひました。  
イアン王子は、すかさず、鴨の翼を、しつかりと掴みました。  
すると、何んと思ろしい事だぜう！ 何んといふ驚いた事だぜう。鴨は、いろ／＼な恐ろしいものに變つて、王子に向つて来るのでした。  
初め、ふと氣がつくと、王子は手だらけの、猿の手を掴つてゐました。忽ち、猿は、犬に變つて犬は、前足の爪で、イアン王子を引つかきにかゝりました。  
と、今度は、見るも物凄い大熊に變つて、きばをむいて、うなるのでした。



たまたま、長い蛇になつて、王子の肩に巻きついたかと思ふと、小さい蛇になつて、ケロ／＼と、王子の手の中で鳴き初めました。そして最後に、麻を織む糸車になつて、ちよ／＼と、王子の前に立つて居ました。  
イアン王子は、この間、ぢい／＼と、恐ろしい、氣味わるさを堪えて居ました。そして、決して、化物達の手を離しませんでした。最後に、糸車になつて、動かなくなつたのを見ると、王子は、

車の輪を、眞二つに割つて終ひました。そして、自分の、前と後ろに分けて置いて、  
『前のは綺麗なお姫様に！ 後ろは白い白練に！』  
さう叫びますと、にま／＼と大きな白練の帯が、王子の後ろへ生えました。そして、王子の前には、まがう方のない、マリア姫がこぼれる様な微笑みを浮かべて、すつくり立ち上りました。  
三人のよるこびは、例え様のない位でした。  
イアン王子は、デミトリー王子に、何うか自分の短氣を許してくれと云つて、謝りました。三人は、手をつないで、御殿へ歸つて来ました。  
すぐ、その翌の日、華々しい婚禮の式があげられました。誰も彼も、目出たい式に酔つて、笑ふやら、歌ふやら、踊るやら、それは／＼大さわぎでした。



たゞ、あの乳母と、娘だけはいつの間にか姿を消して、何處かへ行つて終ひました。その後、誰も、二人の事は、見た事も、聞いた事もない、といふ事でした。  
(なはり)

ドロテアと  
薔薇の花(伊太利)

西の國に云ひ傳へられた、美しい

しいお話をいたしませう。  
今から凡そ千九百年ほど前、ローマの國に、ドロテアと云ふ可愛らしい少女が居ました。その頃のローマは、國の掟として、キリスト教を信する事を、固く禁じてをりました。もしこの掟に叛いて、コソコソと信心してゐる所を見つからうものなら、直ぐにお役人に捕へられて、火突りにされたり、磔にされたりしました。  
ドロテアは、キリスト教を信心してをりました。元は、お母さんと二人で、森の傍の小さな家に住んで居りましたが、お母さんが病氣で亡くなつてからは、たゞ一人淋しく暮してゐました。  
ドロテアが、キリスト教を信心してゐると云ふ噂は、何時しか四邊に廣まりました。たうとう或る日の事、槍を持つ十五六人の兵士達が、ドロテアの家へ押しかけて参りました。



『ドロテアと云ふのは、お前か。』と、兵士の頭が云ひました。  
『はい、さやうでございます。』  
『お前はキリスト教を信心してゐると云ふ事だが、確と左様か？』  
『はい……』  
『確と左様か？』  
『はい……』  
ドロテアは、美しい顔をあげて、ぢい／＼と兵士の頭の顔を見詰めたが答へました。  
ドロテアは、直ぐに後手に縛りあげられて、役所へ引かれました。





「役所の頭の本テキオは、また一人信者が捕へられたと聞いて、どんな奴かと思つて待ちかまえておりました。すると其處へ、まだ年端もゆかの少女が、荒くれた兵士達に引立てられて来たので、一寸意外な氣がしました。ボンテキオは、出来る事なら救してやりたいと思ひました。」

「ドロテアよ。つまらぬ意地を張つて、あなたを命を賭してはならぬ。今の内に、思ひ返してはどう

二

か？」「もうこれからは決してキリストを拜んだりしはせぬ……と、たつた一言誓ひをたてれば、直ぐこの場で救してあげるのぢや、な、他の云ふ通りしない……」

併し、ドロテアは、俯向いたまま、一言も答へませんでした。ボンテキオは、猶も言葉を變えて、腹したり脅したりしましたが、ドロテアの決心は少しも搖ぎませんでした。たゞ小さな聲で、「どうか一時も早くお所刑を……」と云ふばかりでした。

ボンテキオは、たう／＼しびれを切りました。なんだか少し、腹が立つて来ました。

「よし、ではお前の望み通りにしてやる。」

ボンテキオは、かう云つて、兵士達に合図しました。ドロテアは又兵士達に引立てられて外へ出て行かうとした。

その時、道の入口の所に、サ

か？」「もうこれからは決してキリストを拜んだりしはせぬ……と、たつた一言誓ひをたてれば、直ぐこの場で救してあげるのぢや、な、他の云ふ通りしない……」

併し、ドロテアは、俯向いたまま、一言も答へませんでした。ボンテキオは、猶も言葉を變えて、腹したり脅したりしましたが、ドロテアの決心は少しも搖ぎませんでした。たゞ小さな聲で、「どうか一時も早くお所刑を……」と云ふばかりでした。

ボンテキオは、たう／＼しびれを切りました。なんだか少し、腹が立つて来ました。

「よし、ではお前の望み通りにしてやる。」

ボンテキオは、かう云つて、兵士達に合図しました。ドロテアは又兵士達に引立てられて外へ出て行かうとした。

その時、道の入口の所に、サ



イラスと云ふまだ胎の若い騎士がなりました。サイラスは、ドロテアがあんまり強情なので、少々驚かしてなりました。

「若い娘さん、お前さん死んだら何處へ行くんだね？」

サイラスは、ニヤ／＼笑ひながらかう訊きました。今まで俯向いてゐたドロテアは、この聲に、はつとしたやうに顔をあげました。

そして、サイラスの顔をぢいっと見詰めたが「私は、天の神様の所へ参ります。」

と、答へました。

「うつ。天の神様は宜かつたね。こりや表的だれ、うつ。若い娘さん、天の神様の所へ行つたら、僕に林檎、薔薇の花を返つてくれませんか。眞赤な奴をれ。」

すると、ドロテアは、いよく眞面目になつて云ひました。

「よろしうございます、サイラス様。さつとお送りいたします。」

「どうか、暫くお待ち下さいませ。最後の準備をいたしますから」

ドロテアはかう云つて、首切り臺の上へ坐つて、最後の祈りを捧げ始めました。

その祈りが終らうとする頃、森



の繁分を分けて、二人の可愛らしい少年の姿が現はれました。二人は、手に、大きな籠を掲げてなりました。その籠の中には、春の朝のやうな色をした林檎と、秋の夕やけのやうな色をした薔薇の花とが、うづ高く盛られておりました。

「御苦勞様でした。では済みませんか、その籠を、サイラスさんの所へ届けて下さい。」

ドロテアは、かう云つて、少年の顔を見ました。少年は長つて、



お話を聞いて、騎士のサイラスは、自分の家へ歸つて、今日の出来事を色々と奥さんに話して歸つて行きました。

「お話を聞いて、騎士のサイラスは、自分の家へ歸つて、今日の出来事を色々と奥さんに話して歸つて行きました。」



「ドロテア様から、これを貴方へ送上げてくれとの事です。」

少年はかう云つて、にっこりと笑ひました。笑つてゐる内に、少年の姿は、だん／＼と薄く薄くなって、たう／＼と見えなくなつてしまひました。あとには、薔薇の花と林檎の實を返つて下さるの、お前さんめ、大きな眼をして、よろしうございませう、さつとお送りします。」

云つたらやないか。いやどうも、あの強情さには、驚いてしまつたよ。サイラスが、かう云つてる時と叩く者がありました。

「お返入り。」

と云ふサイラスの聲につれて、扉を開けて還入つて来たのは、大きな籠を掲げた、二人の天使のやうな少年でした。籠の中には、今サイラスが話した通りの、薔薇の花と林檎の實が、こぼれるやうに盛りあがつてなりました。





通信

童謡の選後に

野口 雨情

最近、一般童謡界を見るに、童謡がどうやら散文に近づいて来たが、これは童謡のためにはいいものか、わるいものかの通信が私の手許に数通届きました。童謡が散文に近づくことは、童謡の本質を失ふものであることは、これまで歴々私が言つてゐることであるが、最近さうした傾向があるとすれば、それは童謡の墮落であるから、皆さんと共に、童謡擁護のために、その相違ひを糾さなければなりません。一體、詩人が詩壇を失つてしまふと、散文

での表現が困難になつて、不識々々のうちにその作品が散文化されて来るのであります。詩人が韻文を捨て、(韻文と言つたて、字足の意味でなく、言葉の韻律のことです)散文に親とむやうになつては、老ひたるかなと言はれなければならないので、その人にとりてお氣の毒なわけでありませぬ。

童話の選後に

齋藤佐次郎

○この頃どうした事か、一向に傑作が事りません。これはと、推薦して申し分ないと思ふ作のないのは甚だ残念です。先づ集つた作の中から相當に優れたものを舉げると次の諸作でした。

【大人篇】

- お屋敷の松 大島知恵子
- 富さきん 得能愛子
- 狸だんごのお話 中川秀雄
- 家 千代 桑島さく子
- 鳴 鈴木敏夫

【子供篇】

- 無 阿部和子
- ろり鳥とミイラント 佐藤カツ子
- 作中の中で特に目立つてゐたのは以上に掲げたやうな作です。それで、今月號は推

薦作の決定を一月だけ遅延して、尙もう一月分の間に集つた作の中から選んで、次號で決める事にしたいと思います。どうぞ、い、作が澤山に送つて下さい。幸ひこれから暑中休暇にもなりますから、その季節を利用して力作をお書き下さい。

編輯室より

○雜誌がますます、良くなつたと讀者の方々からいつて下さいます。編輯部のわれわれも良くなつたと思つてゐます。しかし、號を追つて、もつと、いい、雑誌になりますから、皆さんの遺慮のない御希望をいつていたゞきたいのです。○今月號から岡本先生の表紙になり、非常に面白いものになりました。○小島先生の長篇「王國を争ふ」が今月からはじめました。「暗闇城」も今月からはじめました。最初の「はじめがき」を讀んで下さつたら、作者の考へ、同時に編輯者のわれわれの考へもわかつて下さる事と思ひます。○綴方は今月休みました。これから童謡と童心句に全力をそそぎたいと思ひますので綴方は次月號の発表を最後として當分休む事にいたします。(齋藤生)

童心句掲載外佳作

- 西岡 種雄(愛媛) 鈴木 英夫(神奈川)
- 津渡 恒(山形) 布施 嘉一(京都)
- 土屋 政子(東京) 市場 謙草(兵庫)
- 竹下 晴月(島根) 金子 虹詩(東京)
- 中澤 通江(京都) 小林 安子(青森)
- 斎藤勝之進(東京) 新倉詩希(神奈川)
- 池田 義(山形) 鈴木 和(東京)
- 柳原 八重(京城) 武井 富雄(東京)
- 海野みどり(東京) 飯塚 政雄(埼玉)
- 望月 俊一(山梨) 高野 房一(埼玉)
- 戸籍 正(青森) 稲垣 秀坊(東京)
- 鯨井卯太郎(東京) 加藤 政一(東京)

童話掲載外佳作

- 野村朱月城(愛知) 宮内 清二(東京)
- 兼松 竹夫(大阪) 原 まさる(東京)
- 柴野 民三(東京) 川副 孝子(臺灣)
- 宮本 てる(長野) 林 賢雨(東京)
- 八重櫻草笛(東京) 柳築 保二(愛知)
- 三須 英三(京都) 柳瀨まさし(和歌山)
- 石倉 正雄(山梨) 笠原 枡火(東京)
- 吉川 行雄(山梨) 茶木 七郎(神奈川)
- 吉垣 克巳(熊本) 小澤 三三(東京)
- 幹 葉津子(神奈川) 高岡 千尋(東京)
- 松枝 二期(名古屋) 馬場 武治(長野)
- 堀口 光夫(北海道) 中村 武男(東京)
- 安田 道子(東京) 濱野 貞雄(廣島)

金の星誌友募集

金の星の誌友を募集いたします。誌友には色々な特典や便宜がありますからどうか振つて御加入下さい。ハガキで本社へお申込み次第、誌友規則書をお送り致します。

- 増田 實(茨城) 河合英太郎(東京)
- 岩本 孝作(神奈川) 西岡 水朗(長崎)
- 村山 京子(大阪) 富川いさ徳(京都)
- 關野 正(長野) 飯盛 三雄(大阪)
- 山口三津夫(東京) 原 知一(山形)
- 福林 一郎(京都) 磯田のりみ(埼玉)
- 館島 博郎(埼玉) 前田 妙子(東京)
- 野田よしな(静岡) 岩谷 貞三(秋田)
- 吉武金次郎(長崎) 吉田正太郎(京都)
- 原 千代子(東京) 宮本のり美(熊本)
- 中山トキヨ(山梨) 深川 安忠(岩手)
- 後藤たまこ(岐阜) 古川 シチ(東京)
- 渡邊 兼吉(山形) 瀧美 晴子(静岡)
- 井上 充夫(京都) 小川 貞雄(和歌山)
- 加藤 卓磨(兵庫) 山本 勇(福井)
- 加藤 正雄(埼玉) 岩井 春吉(千葉)
- 鈴木 秀雄(東京) 刀福 元成(石井)

童話掲載外佳作

- 森野 千代(北海道) 濱井 美母(愛媛)
- 小林 俊雄(新潟) 越後喜久重(埼玉)
- 富田健次郎(東京) 木藤 安子(東京)
- 高野 竹葉(埼玉) 山口やう(長野)
- 一瀬 昇(福井) 谷 孝次(北海道)
- 棚田 重忠(京城) 間鶴 忠次(山口)
- 小澤 義雄(東京) 芝地しげの(兵庫)
- 鍋谷 将子(新潟) 川島 房(埼玉)
- 川見 かれ(兵庫) 伊東 文子(大阪)
- 石塚 上(千葉) 川田 博(大阪)
- 小町 伊み(東京) 中野 由秋(愛知)
- 森 ぼたる(愛知) 古川 安忠(岩手)
- 新井 和子(東京) 馬場 武治(長野)
- 川地 榮一(愛知) 松井 作一(愛知)
- 志村治之助(東京) 磯野 兼一(群馬)
- 山本 力(朝鮮) 刀福 元成(石川)
- 岩村 協(北海道) 十返 一(香川)
- 池田 又雄(神奈川) 野口 昌男(東京)
- 中里 素行(神奈川) 白倉 忠儀(山梨)
- 鴻池登美子(兵庫) 山田 實(東京)
- 寺田孝二郎(長野) 松村かす江(愛媛)
- 安井 利雄(京都) 小野 喜作(新潟)
- 伊藤 純平(東京) (以下次號)

新誌友名簿



童心句の前途

中村 武男

野口雨情氏によつて童心句が生れた。童心句は益々盛になるであらう。然し私は心配をしてある。この詩人の作物、民謡にしても童謡にしても、實に童心の純真さには、えまされる事が度々ある。智識と云ふのをすっかり忘れて本當の自然の心で感じた事を唱へばまた自然のほほえみを散む人に與へる。この詩人が童心句を生んだ。この詩人の後にこの種の詩人が、はたして幾人出るか、童心句もまた指導者がなければならぬと思ふ。私の幼時、赤い鳥を讀んでゐた頃、私は童謡の頁に讀み到的と、がっかりしたものでした。今見て非常に面白く感ずる白秋氏の童謡も幼時の私はつまらないから早く讀んで童謡の方へうつらうと思ひました。書

葉は子供の言葉であつても、童謡に比べればつまらなく感じたのでした。「ちやつぽんちやつぽんちやつぽんぼんぼん」で始まつてゐた犬のお芝居とか云ふのでした。その調子が幼時の私に氣にいつたのでした。さうして今でも「ちんちんがちり／＼ちやつぽんぼん」と唱へるのであります。ちんちんと憶えてゐるのです。童心句には調子がありません。童謡には調子があります。童謡は歌へるから子供に喜ばれるのでせう。大人でも調子のついてゐるものはいいものです。大人が童謡を見て此は面白いものだ、と感心する事でも、子供にとつては當り前の事なのです。鳥の子供だつて大きくなつたら學校へ行くのだと信じてゐるかも知れません。子供は童謡を明歌つてゐる童謡に興味を持つてゐます。童心句は餘り短形であると思ひます。童心句が讀まれて來たのは大人の世界のものだからでせう。童心句の中に童心句があつ

ても、それは大人にとつて深い喜びがありませうが子供にとつては當り前の事を言つてゐるとしか思はれないでせう。深く詩な味ふ事を子供はしません。歌を歌つて、その調子の中に自分の楽しい世界を見てゐます。詩の中から調子を思ひ出すより、より多く調子の中から詩を感じるのでせう。子供にペンを持たせて童心句を書かせるより、野原へつれて行つて童謡を歌はせたいと思ひます。何だか反抗する様な言葉になつて來ましたが以上が私の心配とするとこゝろです。けれども童心句には私も非常に興味を持つてゐますから、自分でも歌つてみようと思つてゐます。私はこの心配をぬくつてもらひたいのです。

研究欄への寄稿を乞ふ

五月號より、童謡と童心句の研究欄を設けて、童謡、童心句に關する權威ある評論の御賛助を募集して來つて、幸ひ大方諸氏の御賛助を得まして、毎號熱心なる投稿を拜見する事が出来まして、こんな嬉しい事はございません。本號は、こんな嬉しい事があつたのでしたが、世界童謡欄其他に想像外の頁をとられてしまつたため、僅か一篇しか載せる事が出来ませんでした。次號には必ず頁を増して、この欄をいよいよ權威あるものにして参りたいと存じてをります。



金の星社 八月號  
出版だより

新刊書のお知らせ

- 金の星家庭文庫 (2)
- アーサー王騎士物語 (少年文學名著選集ノ五)
- 少年探險家物語 (童入世界童話集 第一卷)
- 信玄と謙信 (日本歴史實傳物語ノ五)

以上の五冊が七月から八月にかけての發行の決定になつてなりましたが、一冊位は九月まで發行の延びる本もあるかも知れません。以前もさうではありますが、今後は發行の書籍の一冊も、十分に研究に研究をした名著を選んで出版いたしますので、本が出る数は或は多少少なくなる事もあるかも知れません。が、それだけ本の内

容がいよいよ良くなるわけでありませう。どうぞ、今後の本社の發行圖書に就ては十分御注意なれがびたく思ひます。

『新刊書の紹介』

『金の星家庭文庫 (2)』 第二巻には有名なアンデルセンの童話集と、青い鳥と、インツア物語の三種を入れました。

『金の星家庭文庫の第一巻』を御覽になつた方は、必ず第二巻をお待ち下さると信じてますが、世界の童話の名作三種を、壯麗な天金の美本にして發行したので、大歓迎を受けることは申すまでもないことです。

皆さんの書棚に是非お飾り頂きたいと思ひます。丁度中元の季節にあたりました。贈物として、かういふ立派な本を贈つたら、受け

た人はどんなに喜んでござせう (定価金貳圓、送料十二錢)

『アーサー王騎士物語』

編者は大木雄三先生、挿畫は寺田良作先生、裝幀は寺内萬治郎先生です。

このお話は、英國の物語として世界に有名なアーサー王とアーサー王の騎士の勇ましい、そして美しい物語です。

實際上アーサー王といふやうな偉い王様があつて、その部下にあんな勇ましい武士達がゐたのかどうかそれは疑問とされてゐますが、現に角一ど讀み出したら中途で止められない程スバラシイお話です。或人は、アーサー王のお話は、英國人が外國人の侵入をふせぐ爲めに、自分の國には、こんな偉い人がゐたと威張るために作つたのだともいはれてゐます。

いづれにせよ、アーサー王と騎士達のお話は、西洋の中世紀の武士道をお話したもので、騎士のやさしい、勇敢な氣性がよくあらはれてゐます。お話は先づ、アーサー王の不思議な生ひ立ちからはじまつて、遂にアーサーが父の位を繼いで王となり、それから騎士達の物語りがはじまります。いづれも、アーサー王に忠義をつくす爲めに生れたやうな人達です。悪騎士と戦つて、美人を助けたり、罪の無い人達を牢獄から救ひ出したります。

中で、「湖水のランセロット」と呼ばれてゐる騎士は、最も偉い騎士ですが、このランセロットを慕つた少女の物語は、かす／＼ある騎士の物語りの中でも、最も涙をしばせませう。

少女は病気で死にます。死ぬ時に遺言して、自分の死骸を小舟に乗せて、川に流して貰ひます。舟には百合の花が一ばい積まれてゐます。そして、たゞ一人、おしの乳母だけが舟のちちを取らる爲めに乗り込みました。

舟は流れ／＼、遂にランセロットの住む城下に着きます。そして、そこで待たせてゐたランセロットにあつた少女の手紙が讀まれました。

「まづ、かういつたお話が澤山にあります、かうした美しい



物語は、必ず皆さんの心を清めずにはおきません。

少年少女の爲めに書かれたアーサー王と騎士の物語の出版は、本書がはじめてあります。是非御一讀下さい。特に、尋常六年生以上中學校、女學校の方々に讀んでいただきたいと思ひます。

(定價金壹圓貳拾錢、送料十錢)

### 『少年探險家物語』

この本には、少年として是非とも知らねばならぬ、左の三人の探險家の事に就いて書いてあります

- 一、リビングストーン
- 二、マゼラン
- 三、クック

リビングストーンは、闇黒の大陸と呼ばれた、恐ろしいアフリカの叢地を探検した人です。焼くやうな炎熱に悩まされながら、ある時は獅子と戦ひ、ある時は猿人と戦つて、遂に最後の目的を達しました。リビングストーンは、アフリカの内地に至る、最も便利な道を発見しました。ヨーロッパの人々は、アフリカの内部に、無盡蔵の富のあるのを知つて、われもわれも田かけて行きました。そして、

今日我々の見るやうな、礦産物に於いても又、牧畜業に於いても、工業に於いても、世界に比ぶものない程の、盛大な國になつたのです。

この本では、リビングストーンとはどんな性質の人であつたか、少年時代には、どんな事をしてゐたか？ と云ふ事に就いて、面白く書いてあります。

第二、第三の、マゼランとクックは、海の偉人として誰知らぬ者もない勇者です。マゼランは、始めて全世界を一周した人。クックは、日本の國の岸を洗つてゐる、太平洋の荒海を、隅から隅まで探検した人です。

丁度今、身中休暇が始まつて、皆さんは、海に山に遊ばれる時です。その時、トラングの底にこの本の一冊を入れる事を忘れないうで下さい。又、都會で夏を送る方は、壯快な探險家の物語を讀んで、暑さを忘れて下さい。クックが南極の氷海を探検するところなどは、ちつほけいな氷水をお飲むなど、これだけ涼しいかわかりません。この本は更に、井上猛夫先生の見事な挿畫によつて、一段と光

輝を増しました。挿畫は三色版の口繪の他に、十七枚這入つてなりました。

(定價金壹圓貳拾錢、送料十錢)

### 『書人世界童話集(第一巻)』

世界の貴重な童話を厳選して、美しい挿畫を澤山に入れ、尙それに三色版と二色版の壯麗な畫を十五枚程入れ、菊版型の非常な美しい本が出来ました。

一寸、外に比べものない内容と裝幀とを持つた本でありまして、さういふところが是非見ていただきたいと存じます。

第一巻には風かほる印度の物語りを集めました。何れもあまり知られてゐない立派な物語りばかりです。ありふれた印度のお話を集めた本と違つて、印度でなければ見出されないお話ばかりです。編者大戸喜一郎先生は、この本に就いて、

『皆さんは、インドの國を存じですか。西洋の子供さんたちは、インドは、太陽の出る國、さう信じてをります。まつ青な大空、香りの高い微風、虹のやうにも美しい羽根をした鳥、エメラルド、ルビ

1、サファイヤのやうなきれいな色をした蝶々や甲蟲。靜かな風もない夜に、小さな灯をつけて飛び交ふ可愛い螢、さうしておいしい、水氣のどつさりある果物があつてをり、美しい色をしたさまざまな草花は、どこにも咲き亂れてをります。

ほんとに、インドの國は、お伽の國であります。皆さんは、その美しいお伽の世界インドへ行きたいと思ひになりませんか。黄金色に輝くお城の中の、大理石の装飾の上に横になつておやすみになりたいと思ひませんか。そのとき、皆さんはどんな夢をこらんなりなすまでせうか。それからお話ししようとするインドの傳説、皆さんは、きつとこんな面白い、勇ましい夢を見るにちがひありません。しかもこの夢こそ、いくど見ても、決して飽きることはあるまいと存じます。』

裝幀は寺内萬治郎先生の苦心にたり、澤山の挿畫は有名な西洋の畫家の手になる原畫を取られ、二色版畫は寺田良作先生の努力によ

つて成りました。

### 『信玄と謙信』 三島崙川先生

の日本歴史寶庫物語叢書の第五篇です。有名な川中島の合戦をやつた武田信玄と上杉謙信の物語りです。戦國時代の二人の名將だけに、これまでも詩や歌や物語りになつて、どんなに澤山書かれてゐるかばかりで、この二人の偉い大將の生ひ立ちからはじまつてどうして二人が戦はなければならなくなつたかといふ事や、有名な川中島の合戦の模様などを記した本はあまり見當りませんでした。殊に少年少女のために書かれた本は、全く無かつたといつてよい位です。

例によつて、此の『信玄と謙信』は、三島先生が歴史を深く研究して、そればかりでなく實際に川中島から、あの附近へ行つて一々地理をくわしく研究した上で出来上つたそれこそ本當に苦心の結果出来た本だけに、皆さんにとつて興味深いことはいふまでもありません。羽島古山先生の繪と共に幾度讀んでもいよゝ面白味を増す本であります。御愛顧を待ちます。

(定價金壹圓、送料十錢)

### 讀後感

#### ロビンフッドを讀む

東京府下上戸塚八七六 小澤 一公

一度ダグラス氏のロビンフッドを見た事があつたが、あの勇敢な大義賊を實によくあらはしました。實話面白物はないと色々の人が言つてをりますが、僕もこれによつてよく味ひました。縁の森に行くまでの悲話があるかと思へば、森の戦、銀の矢等の壯話があり、そして面白い話の最後は、ロビンの死を書いたのは、一人本書だけである。

活動や講談的なのはどうしても實話と違つて面白く、又餘りに冒險すぎてるやうだ。又ロビンフッドは餘り世間でない。……この物語を知らないとは暹羅の土ではない。日本に武士道あれば英國にも紳士道といふ物がある。又美談あれば、外國にもそれに似た話がある。だから諸君、一度は金の星社のロビンフッドを見るべきである。

ある。

僕もこれを讀んで、一番氣に入つたのは肉屋に化けてのおどけ姿だ。讀みながらにして眼前に浮べせる。次にロビンの最後だ。……迄面白く且愉快であつた物語が急に寂しくなり涙が出て来る。今こそはクリスマス夕べ私等夜もすがら新らんの人の子の惱みそなたはし一字一字が涙より外にない。必ず筆者も涙のインキを用ひたに相違ない。

#### 沖野岩三郎先生の著書を読み

大阪お伽學園 藤野 福雄

日本に童話作家は多いけれど、眞實、子供の爲に、正義と愛を基調として童話を書かれる作家は幾人あつてしようか。沖野岩三郎、小川未明兩先生しか私には舉げることが出来得ないのではありません。兩先生の子供に對する愛は泪ぐましき程であります。その先生の中沖野先生の木がたえず金の星社より發行されてゐると云ふ事は、私

共の非常に嬉しく思つてゐるのであります。どの本がよいと云ふ事は私は申す事ができません。只沖野先生の本を讀むことによつて、如何に私達の心が和ぐかと云ふ事だけはお傳へします。そして最後に沖野先生の本は出来る限り熟讀なさいと云ふことか——

#### ガリバー旅行記を讀む

東京府下大馬町五ノ三四二 大木 柳影

先日正美の爲に「ガリバー旅行記」を買ひ求めました。幼い時、何度話されても面白かつたのはガリバーでした。案の通り正美は面白がつて讀みました。そして父に自慢氣に話してゐました。私も讀んで見ました。幼い時から何べんも讀んで見ましたが、御社の一番愉快に感じました。現にこの間まで〇〇の「ガリバー旅行記」を讀みましたが、長いばかり長つた。讀みながら幾度となく巻をとちた。けれど御社の「どうぞ子供が讀むんだから」と少し馬鹿にしてたいくつまで讀んで見ましたが、一氣に讀んでしまひました。





りよだ者讀

▼夏！夏！僕等の楽しい季節が訪れて来た。誌友諸君はお健在ですか。海に山に僕等少年の心は躍る。金の星七月號を手にした僕は、まづ第一に表紙に賛美の聲を...

「少年職業師」は「須磨寺の豹」とは全々別ですか、悲しみの現はしかたは同じ様です。流浪の孤兒二人の悲しいお話は少年の心を悲しくさせます。七月號は一般に良い物ばかりでした。編輯の先生に感謝します。親愛なる松枝二期君、榮松竹夫君、よろしく終にいよ、僕の小文誌誌も「一部八錢です。往復葉書にて見本を請求下さい。喜んで送ります。諸君、着いからと云つてあまり水は...

▼田んぼの田んぼのお月さま 蛙とおそんで夜がふける。は森はたる氏の傑作だ。「お月さま田んぼで蛙と遊んで」あんな事しちやいやだな、偶然かも知れんけど...「仔の馬は遊びたさうに後れて」「居ない居ないげあと出てきた花の虻」どうせ作るなら此の位ひつけれ。青柳氏はうまいなあ(ふるふるの目)...

▼金の星の益々御発展をお慶び致します。誌友及び賛讀者の皆様もお喜び加ふるに新しい方々の御奮闘ぶり際々男ましくも嬉しく存じて居ります。扱、私小い乍ら本當に詩歌の研究を致す集團として、童心と名付けて小冊子を發行致さうと存じます。原稿が集まり次第一日も早く出したと存じます。皆様の御力添えをいたゞきたく、童話を中心として詩歌俳諧の類態を備えたく、研究論文、創作童話童歌、短歌、俳句、藝術的繪畫等も載せたく存じます。皆様の御後援と原稿をお待ち申す。東京市小石川區西江戸川町九番地「童心社」(漢一朗)...

に折角お勉強下さい。そして、第二の渡邊智藏氏を作られんこと祈ります。(秋田 山口) ▼金の星の愛讀者諸君！こちらでは今回諸君の美しい童話を募集致します。何卒少年少女文士諸君奮つて御投稿を願ひ致します。送先は朝鮮北城津郡鶴東面石湖洞石雲堂に。終りに記者先生の御健康を祈ります。(朝鮮 許水萬) ▼七月號推薦童話足立孝平さんの「柳突掃夫」は「つた男の子の話」は大きく立派な讀みものでした。殊に歌調的であつて、最後に煙突掃除夫になつた男の子の後姿を見て、「今更ながらあの男の子はそんなに悪い子ではなかつたのだと言ふ事がハッキリしました。」などと云ふ處などは實に感心しました。が、少し感言へば、あの作には會話が少し無理でなからうかと思ひます。それで十五六の少年だとすれば、かと思ひますけれど、挿繪から見ると、男の子と妾と云つて居る女の子が、どうしても八九才位しか見えません。しかし、かう云ひましても、男の子の會話が無理ではなからうかと思ふのです。「でも警察の御厄介

なつたので飯の心配なんかいらなくなつたので云々」と云ふところなどは殊にさう感じられます。尚今後足立さんの本誌上に益々振はれん事をお祈り申上げます。拙評お許し下さい。(佐藤源五郎) ▼皆さん、今年の始めより多社の爲め御無沙汰致して居りました。しばらくぶりにお目にかけります。大變お奮でされ、私もポツポツ勉強して投書致しませう。金の星の杜仙之介様御病氣とお聞き致しましたがいかがですか。早く御全快を祈ります。青柳兄名和兄毎月佳作を見せて下さいました。有りが度うございませう。皆様に御勉強の上よい作を見せて下さい。では皆様の御發展と金の星の振ふことを祈ります。(岩手縣一關町 西野光兒) ▼杜君の病氣は、其後あまりはかばかしくないので、當分歸郷して保養につとめて居ります(記者) ▼僕は昨日學校から歸りに本屋へつて金の星六月號を買つた。實に金の星はいつも年々素晴らしい人氣だ。僕等はこれの充實した模範的金の星を中心に、童話冊子「翡翠」を本年一月創刊以來隔月

に出してゐる。誌代は一部金五錢で送料が二錢です。小さい年内客が豊富ですから、どうぞ金の星の諸君姉妹お投稿下さい。香川縣三豊郡上高瀬村田井「翡翠社」小野友春) ▼七月號が書店から配達されましたので、早速讀んで見ましたが、どれも面白と思ひました。中でも私の一番印象されたのは、横田先生の「須磨寺の豹」でした。少年の思ひやりの優しいこと、私悲しくなつてしまひました。これこそ本當の真心でなければならぬ。世の中には幾らも薄情な子供はあります。それなのにそんな考へれば考へる程、その少年の心を讚美せずには居られません。横田先生及他の先生方お願です。事實あつた本當に子供の爲になるやうなお話を多くして下さい。これが私のお願です。それで先生あまりながくなりますので、これで筆をおく事にします。終りに金の星の發展を祈ります。(横浜市野毛町三 石川雪花) ▼いよ、暑い夏になりました。

金の子の星の益々御発展をお慶び致します。誌友及び賛讀者の皆様もお喜び加ふるに新しい方々の御奮闘ぶり際々男ましくも嬉しく存じて居ります。扱、私小い乍ら本當に詩歌の研究を致す集團として、童心と名付けて小冊子を發行致さうと存じます。原稿が集まり次第一日も早く出したと存じます。皆様の御力添えをいたゞきたく、童話を中心として詩歌俳諧の類態を備えたく、研究論文、創作童話童歌、短歌、俳句、藝術的繪畫等も載せたく存じます。皆様の御後援と原稿をお待ち申す。東京市小石川區西江戸川町九番地「童心社」(漢一朗)...

讀後感を募集します。金の子の星の發行の書籍に就て、皆さんのお感じになつたことを、そのまゝ、遠慮なく記してお送り下さい。掲載の分には御謝を呈します。金の星社 出版目録を お送りいたします。出版目録の御入用の方は、ハカキで本社宛にお申込み下さい。早速お送り申上ます。















くろんぼが  
あをい海からはひ出した。  
くろんぼが  
白い濱邊でとつととかける。  
くろんぼが  
黄色いテントに集まつた。  
くろんぼが  
てんでに持ったおひやのコップ、  
くろんぼが  
赤い瓶からたらしした水、  
くろんぼが  
みんな揃つてうがひぶくぶく。  
赤い瓶小瓶あれなあに、  
水はみがきさライオンの。

